
戦国トランスジェンダー

藤森応輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国トランスジョンダー

【Zコード】

Z7265S

【作者名】

藤森応輝

【あらすじ】

断じて嫁に逃げられたのではない！

俺の名は上泉六三郎。

剣の腕を頼みに仕官先を求める旅をしていた。

その旅の途中であつた不思議な美女、七重を娶り、甘い新婚の毎日を送つていたが、ある朝目覚めると俺は女になつていた！ しかも愛する妻の姿も消えていたのだ！

周囲の者達から、嫁に逃げられて可哀想にという視線を浴びつつ、俺の旅は嫁の行方を捜す旅に変わり、旅の途中でたまたま助けた抜

け忍の伍助に夜毎体を狙われながらも共に全国を巡る事だ。

ナヒマパートは、挿絵作家の方が文章を書いています。

「なにやつてんだ！」「オーラー！」

俺はそう叫ぶと、伍助の股間を蹴り上げた。そして股間を押され
て悶絶する伍助にさらに怒鳴った。

「人の寝込みを襲つなど何度言えば分かるー！」

伍助は旅の途中に、刺客に襲われ危ないとこりを俺が助けてやつ
た拔忍だ。

伍助が言つには、上忍の奥さんに手を出したのがばれて忍者の里
を追われた、といつより逃げ出して、しかもその上忍から追つ手を
差し向けられていると言つ事だった。

そして伍助は、助けて貰つた御恩返しにと言つて、俺に付いて来
て寝床の用意や食事の用意をしてくれているのだが、ちょくちょく
俺の寝込みを襲いやがるのだ。

随分口の悪い女だな。と思われるかも知れないが俺はれっきとした
男として生まれた。

じゃあ、伍助は男も女もOKな両刀なのか？ と言つとやつ言つ
訳でもなく真性の女好きである。

言つている意味が分からねえ、と思つかも知れないが、俺だって
この状況は訳が分からねえ。

ある朝起きると、なんと体が女になつていて、しかも妻の姿も消
えていたのだ。

あまりの出来事に数日呆然となつていた俺だが、我に返ると

自分に降りかかった問題と向き合つ事にした。

このまま女の体のままで暮らすのも真つ平だし、居なくなつた妻も搜さなくてはならない。

俺は消えた妻を捜せば、女になつた理由も分かるかと思い、妻を捜す旅に出た。

勿論、メインは愛する妻を捜す方である。

とはいへ、せつかく妻を探し当てても、体が女のままでは何かと残念な事になるので、女に戻る方法も重要だ。

そしてその旅の道中、武蔵国で、伍助が追っ手にやられて命を落す寸前の所を助けてやつたのだ。

とは言つても伍助は3人の追っ手に襲われ、1対3で負けかけていたところに俺が偶然通りかかり、俺の出現に3人の追っ手の注意が伍助から俺に移り、その一瞬の隙を突いて伍助がその内の1人を切り殺し、残りの2人より伍助の方が強かつたと言つだけなのだが。

にも関わらず伍助は俺の事を命の恩人だと言つて、ついて来るのだ。

そして俺は、自分で言うのもなんだが故郷では、美貌と猛将ぶりで有名な陶晴賢の再来と呼ばれるほど美形であり剣の腕も立つ。つまり俺は女になつても美人であり、上忍の奥さんに手を出すほどの女好きの伍助がちょくちょく俺の寝込みを襲い、そのたびに俺に股間を蹴り上げられて悶絶しているのである。

まったく憲りないもので、俺に付いてきているのも本当は恩を返す為ではなく、俺の体目当てなのではないかと思えてくる。

勿論俺は伍助に、俺は本当は男であり今女の体なのは物の怪か何

かの所為なのだ、と説明したのだが、伍助は「そんな細かい事気にしゃせん！」と言い放った。

これにはさすがに俺も脱力し、それ以上口論する事を諦め、ちょくちょく俺の寝込みを襲う伍助を撃退する日々となつたのだ。

> 222495 | 2976 <

俺が妻と出会つたのは、仕官先を求めての旅の途中だつた。

故郷の道場では俺に剣の腕で敵う者はおらず、仕官先などいくらでもあると高をくくつていた俺は、大きな城下町に辿り着くと、その城下町にある道場へと出向いた。

調べたところによると、この道場の道場主は、この国の大名家に剣術指南役として禄を貰つているらしい。

ここで俺の剣の腕を見せれば、大名家の方から俺に仕官してくれと言つてみると考へたのだ。

自惚れでは無い。それだけの力は俺はある。そう思つていた。
故郷の道場の師匠は過去に戦に出て380人の敵兵を討ち取つたと言われている。その師匠が俺に言つたのである。

「お前の剣の腕はすでにわしを遙かに超えておる。戦場でもお前ほどの者を見たことが無い」

こう言われて自分の腕に自信を持たない者がいるか？

だが城下町の道場で、「一手ご指導願いたい」と型どおりの台詞で、
その道場の師範と試合つた俺は、その師範の剣術に戸惑つた。

なんとその師範は刀を振り回してきたのだ。
(刀つて突くんじゃないんですか?)

そう考えていた俺はその師範の剣術に翻弄され、胴を打ち果たされた。

勿論俺は（胴を刀で打つても鎧を切れるわけ無いだろ。ノーカウント、ノーカウント）と思つて、試合を続けようとしたが、なんと俺と師範の傍に立つっていた男が、

「一本！」

と叫び、そこで試合が終つてしまつたのだ。

そして「いやいや、おかしいだろー」と叫ぶ俺の抗議は無視され、道場から放り出されてしまつたのだ。

俺の剣の流派は突きを得意とし、合戦では無類の強さを發揮した。戦場で鎧を身に付けている敵に、刀で頭を殴ろうが胴を叩こうが文字通り刃が立たないのだ。

鎧ごと相手を切る大型の刀も有るにはあるが、基本刀で鎧武者を倒すには突きである。

だが最近徳川家により豊臣家が滅ぼされ戦はめつきりなくなつてしまつた。

鎧武者と戦う事もなくなつてしまい、現在の剣術の主流はあの師範がやつていた様な刀を振り回す剣術らしい。

こうして俺の、その城下町で仕官先を求めるという思惑は外れてしまい、どこかに俺の剣を理解して召抱えてくれる大名が居るはずと、仕官先を求めての旅に出たのだった。

そして妻の七重とはその旅の途中で出会つたのだ。

妻は、と言つてもその当時は妻ではないが便宜上妻と呼んでおく。

俺が仕官する国を求めて山道を歩いていると、妻は罪人が入れられる様な竹で編んだカゴに入れられ、カゴから伸びる綱を括りつけた長い棒を担ぐ数人の男に運ばれているところだった。

とは言つても罪人ではなく、どうやら売られていくらしい。

興味を覚えて顔を覗いてみると、なんとすごい美人ではないか。髪の色は茶色がかっていて、肌の色はやや浅黒かつたが細面のかなりの美人である。

売られると言つながらどこの遊郭に売られるのだろう。

俺はそれならばと、一番初めの客になるべくその後を追う事にした。

だが後を追いつむに妻を入れたカゴを担いでいる男達の会話が聞こえてきた。

「せつかくだから俺達で頂いちまいやしじよ」

「馬鹿やろ？ 我慢しねえか。俺達がやつちまつちや値が下がるだらうが」

「しかし、これだけの美人めったにいやせんぜ」

ここまでは俺も「さもありなん。さもありなん」と頷いていたが次の言葉が引っかかった。

「せつかくひつさりつた女なんだ。この女を遊郭に売った金で、他の女を買えば良いじゃねえか」

ひつさらつただ？ 貧しい農家がなんかから売られてきたんじやないのか？

娘を売るにも色々と事情はある。下手に助けたりすれば逆に迷惑

にもなりかねないと思つていたが、さらわれたと言うなら話は別だ。さらわれたところを助けたとなれば、彼女も俺に感謝して仲良くなれるかも知れない。

男達は5人。みな腰に刀をぶら下げ、確かに改めてみれば楼閣の人買いというより、野盗と言つた方が近いかもしれない。その2人ずつが順番に疲れたら交代しながら妻を担いでいる。

俺は妻を助けるべくチャンスを待つた。

勿論、野盗の5人くらい俺の腕なら倒すのは訳はないが、兵法とは勝ち易きに勝つものだ。もっと勝ちやすいタイミングがあるかも知れないなら、そのチャンスを待つべきである。

そして夜、そのチャンスが到来した。と言つよつはじめからこの時を狙つていた。

男達は1人を見張りに残し順番で眠りに落ちた。妻もカゴの中で寝ている様だ。

男は焚き火にあたりながら、暇をもてあましているのか、時おり木の棒でその焚き火を突いている。

できれば奇襲で見張りの奴を始めに斬つて捨てたい所だが、野盗なだけあって戦闘に慣れているのか、敵襲に気付きやすい様に見晴らしのいい所で野宿をしている。と言つ訳で、奇襲で見張りを倒すのは諦めた。

俺は地面を這つて近づき、これ以上は地面を這つても見つかるだろうという所まで来ると、いきなり立ち上がり見張りの男の元へと走つた！

男は俺の姿を見つけると、瞬時に傍に置いてあつた刀を持って立

ち上がり刀を抜いて構える。だが俺はその時には男達の近くにまで駆け抜けていた。

「おい。おめえら起きろ！」

間近に迫つた俺に男がそう叫んだが、俺はその叫びが終るか終らないかの内に……寝ている男達を刀で、グサグサと刺して回つた。

寝ていた男達は「ぐえ～」やら「ぎや～」やらと断末魔を上げて死んでいく。どうして自分が死んだのかも分からっていないだろ。

見張りの男は「え～～」という目で俺を見ているが、だつてお前が万一千ご腕で倒すのに手間取つたら、こいつらも起きてきて5対1になつちゃうじやん。

だがこの見張りの男がすご腕かもといふ心配は杞憂だつたらしく、この、突然現れた男が寝ている仲間を殺して回るといふ状況に恐怖を覚えて、逃げ去つてしまつた。

まあ俺もこの男がすご腕なんて事は無いだろとは思つていたが、作戦とは最悪の状況を想定するものである。

野盗が死んだり逃げたりして居なくなると、髪を撫でつけ妻が入つている力口を開けて、妻に話しかけた。

「お嬢さん。悪夢は終りました。白馬のお殿様が助けに参りました」

俺のこの決め台詞に田を覚ました妻は、辺りを見回し、口を開いた。

「まだ暗いじゃない。もつ少し寝かせてよ
そしてまた眠りについてしまったのだ。

「いやいや、そんなに上方じゃなくて、もつと下方の方を見て」

俺の言葉に妻は再度目を覚ますと、今度は地面に転がる野盗達の死体を発見した。

「あら？ どうしたの？ 今度はあなたが私をやられたの？」

「うーん。どうも反応がおかしいな。野盗の死体を見つけたなら「
きやー！」と叫ぶなり、自分が助かったのだと俺に礼を言つなりし
そうなものだが。

まあいい。状況を説明しよう。

「せりうなんてとんでもない。そなたを野盗から助けたのセー。」

俺はせりうて、野盗の死体に困まれながらわやかに笑つて白
い歯を見せた。

「そりうなの？ 面白がりだから言つとおりにしてただけで、別にいつでも逃げられたのに」

「え？ マジ？ せっかく助けたのに余計なお世話だった？」

だが俺が残念そうにしてくるのに気付いたのか妻はこつこつと笑
つた。

「でも、助けてくれたんなら礼を言つわ。ありがとうね」

お？ 結構ポイント高かつたか？ 行けそうか？

俺がそう思つて妻に笑い返していると、彼女がおもむろに俺の背後を指差した。

ツガキン！ と俺の背中がなつた。

「あ。後ろ」と彼女が呟く。

いやいや。遅いから。もう斬られてるから。

俺はすぐつと立ち上ると、振り向いて俺を切つた相手と向き合つた。さつき逃げた見張りの男が戻つて来て俺を背後から袈裟切りにしたのだ。

斬られたにも関わらず平然と立ち上がる俺に、男は「えへ。うそん」と声を上げ、啞然とした表情で俺を見ているが、別に俺は矢や刀の刃が立たない魔物と言つ訳ではない。

俺は常に着込み（鎧帽子）を着ているのだ。着込みを着ていればよほどの豪腕の持ち主が相手でない限り斬られる事はない。もつとも着込みでも突きには弱い。

鉄で出来ていてかなり重く、常に身に付けているのはかなり大変だが、俺の剣術が否定されてから剣を振り回す奴らにだけはやられまいと、身に付けているのだ。

俺は見張りの男を必殺の突きで串刺しにすると、再度妻と向き合つた。

妻は拍手をする様にパチパチと手をあわせ俺ににっこりと微笑んでいた。

だ。

「見事な腕前ね。あなたの名前は？」

「上泉六三郎だ」

「ずいぶんと長じて腕前ねえ」

妻は呆れたように俺の顔をまじまじと見た。

「なんて呼ばばいいのかしら？かみいすみ？」

「上泉は苗字だ。六三郎と呼んでくれ。君の名は？」

「ナエマ」

「なえ？」

「なんでもいいわ。苗でも七重でも」

「七重か？」

「助けてくれてありがとう」

七重はもう一度花のようになつぱつと笑ってみせた。

野盗からはいつでも逃げ出せると書いていた妻も、俺の事を、命がけで自分を助けようとしてくれた頼もしい男性、と思つたらしくすぐに仲良くなることができた。勿論、色々な意味でだ。つて言つた、妻だし。

少しつして妻と2人で仕官先を探す旅を続けていたのだが、なかなか

か上手く行かない。

俺が仕官を求めて、何とかその国の大名の役人に渡りを付けて話が進むと、最終的にはやはりどこも「では、そちの腕を見せてもらおうか」という話になる。

そしてその大名に仕える腕自慢の武士と試合つたが、つい体に染み込んだ動きをしてしまう。

その染み込んだ動きとは、胴や頭を切り払われそうになつても鎧があるからノーカウントと、打たれるのに任せて突きに行つてしまふのだ。

だがやはりこの動きは理解されず、「戦場だつたら俺の勝ちですよー」という俺の叫びも虚しく仕官の話は流れてしまうのだ。

ちなみに俺は、決闘する時は頭には鉄板を仕込んだ鉢巻を付け、腕にも籠手代わりに鎖を巻きつけ、そして当然着込みを身に付ける。

もつとも仕官の話がまったく無かつたわけではない。

男も女もOKという両刃の大名は大勢居る。織田信長や武田信玄は有名だし、特に珍しい趣味と言う訳ではない。

そして美形の俺をそれ目的で仕官させようと言つてくる大名も居たのだ。だが俺にはその趣味はない。さすがに断つた。

こうして仕官先を求めての旅を続ける俺と妻だったが、ある日突然妻の姿が消え、そして俺は女になっていたのだ。

女になつては仕官先を求めるも何も無く、こうして俺の旅の目的は仕官先を探すという事から、妻を捜す事へと変わったのだった。

1：六三郎（後書き）

鎧武者を突き以外で刀で倒すのは困難ですが、まあ実際は合戦の武器としては刀より槍が主流なので、作中で出てくる合戦を刀で戦うのが当たり前の様な話はフィクションという事で。

後、突きが強い流派で実践に強いけど道場では弱いという話は、新撰組の近藤や土方、沖田の流派である天然理心流が突きが強くて実践には強いが、道場で戦うと弱かつたという話が元になっています。

もつともこの場合の突きが実践的だったのは、相手が鎧武者だからではなく、室内で戦う場合に刀を振り回すと家の鴨居に刀が引っかかったり、狭い路地での乱戦で刀を振り回せなかつたりして、突きの方が有効だったからですね。

2：ナエマ（前書き）

ちなみに、「ナエマ」パートは挿絵作家の人が、文章を書いています。

「ふう～。いいわねえ、温泉は。疲れがとれるわ～」

下野に来て今日で5日目だけど、毎日入っても飽きないわね。温泉は。

実際に来てみて、ジパングっていうアンビリーバブルな国だとと思うけど。

水どこりかお湯が湧き出る泉があるところのがまた驚きだわ。

「疲れつて……。姫様いつたいどんな疲れることがありますか？」

少し離れたところで温泉に浸かってくつろいでいる侍女のアースの冷ややかな視線がわざわざいた。

「あ、気疲れよ。ほら、私ってアーリケートだから～」

「どの口が言こますか？ 少しは反省しなさい」

「反省なんてしないわよつ……」

私はふっと頬をふくらませてアースから田を背けた。

反省しなければならないのはあいつの方なのよー

湯気の立ち上る中、枯葉がはらつと落ちて水面を滑りながらくると回った。

迷つてゐる……。まるで、私の心の中みたい。

ほんの一週間ばかり前、私は自分の夫に呪いをかけて家出した。私の魔術の中でも最高級にレベルが高くて難しい呪い……。

そう、性転換の呪いを。

私は遙か遠い西の国からはるばるジパングにやつて來たの。

アラビアにあるアムランといつ小国だけど、曲がりなりにも王の娘ですからね。

一国の姫としての教育も受けて、このジパングについても家庭教師に教わったのよ。

ジパングは明瞭な四季があつて、豊富な水と美しい緑や花の生い茂る豊かな国と聞いてずっと憧れてきたわ。

屋根は黄金でできいて、人々はキモノと呼ばれる美しい衣装を身につけていると。

豊富な水と自然については教わったとおりだつたけど、黄金の屋根なんてどこにもないわねえ。

まあ、別の場所に行けばあるのかも知れないけど。

それはいいとして、私は観光でジパングに來たわけじゃないの！ジパングに私の運命があると信じて、人生を賭けて家出してきたのよ。

ある日私の父である王アン・ラム=アル=ラシッドは「いつ言ったの。^{スルタン}

「明日、シャブワのシャルルカン王子が来られる。お前たちふたりのどちらかを后に迎えたいとのことだ」

ふたりというのは私エマと双子の姉のマハネのことよ。

双子なだけあって見た目は気持ち悪いぐらいたつくりなんだけ
ど、性格は正反対と言つてもいいくらい。

マハネは大人しくて従順で、自分の考えを口に出せない引っ込み思案な性格なの。

「つまりお見合いつてわけね。親の決めた相手と結婚なんて気が進まないわ」

「でも……自分で結婚相手を探すわけにはいかないでしょ？」
マハネは困ったようにうつむいて言った。

「そうしていけない理由が私にはわからないわ」

私たちが幼い頃に私たちと城を守るために魔物シンと戦つて亡くなつたお母様とお父様も恋愛結婚だつたじゃない。

お母様は善良な魔女シンニアで、その魔力はなぜかマハネには受け継がれず、私だけが魔力の持ち主として生まれたの。

双子なのに不思議な話よね。

美しい魔女だつたお母様にオアシスで出会つたお父様は人目で恋をしたと聞いてるわ。

魔族の国を飛び出してお父様と結婚したお母様は、魔力を受け継いだ私に色々な魔法を教えてくれた。

たとえば水晶を使って未来を映し出す魔法や、変身魔法、幻覚魔法なんかをね。

そして、命を落とす直前に私たちに銀で出来た小さな箱をひとつつくれたの。

私の小箱にはバラの花の細工が、マハネの小箱にはジャスミンの

花の細工がそれぞれ施されていた。

「この箱にはお前たちの運命が眠っている。時が来たら開けて『いらっしゃい』。そのときまで決して開けてはいけませんよ」

そのまま、銀の小箱は私たちにとつて形見の品になってしまったわ……。

翌日、たくさんのお供を引き連れてシャルルカン王子がやつて來た。

「お会いできて光榮です。噂にたがわずなんと美しい姫君でしきつ王子は私とマハネを見てにつこりと微笑んだ。

シャルルカン王子の印象を一言で言つなれば、まさにおどぞ話の王子様ね。

高貴なロイヤルパープルの衣装を身にまとつて、全てを魅了する

よつなアーモンド形の美しい目をした男性だった。

私は一目でシャルルカン王子に恋をしたの。

……そして、きっとマハネもね。

それから私は猛烈果敢にシャルルカン王子にアタックをしたの。魔法で村人に化けて、ふたりでこつそり市井見学にも行つたのよ。

「あなたはいつもこんな風に街に出かけているんですか？」
市場で買ったなつめやしのお菓子をためらいながらかじつて王子は聞いた。

「いつもひわけじやないけど」

喧騒を離れて寺院の木陰に隠れるようにしてふたりで座った。

「領主たるもの庶民のことも理解しておかないと。そうでしょう？」

私は微笑みながら王子の顔を覗き込んだ。

王子は困ったように、でも嬉しそうでもある笑顔を見せた。

「そのとおりですね」

「……まったく、あなたにはびっくりさせられる」

さつきまで歩いていた人だかりのする市場を見ながら王子は言つた。

「街に出て自分で買い物したり、庶民の中をひとりで歩いたのは初めてですよ」

「はしたない女だとお思いになる?」

「いいえ、まさか!」

大きく首を横に振つて、まぶしそうに笑いながら私を見た。

「あなたは素敵ですよ。ナエマ……。あなたのような人に会つたのは初めてだ」

王子の優しい目がじつと私を見つめて、
私もまっすぐに王子の目を見て、
どちらともなく唇を重ねた。

彼が私の運命なのだと、あの時は信じていた……。

それから2～3日後、中庭で話す王子とマハネを見かけた。
どんな話をしているのかはわからなかつたけど、王子がジャスミンの白い花を手折つてマハネの髪に挿しているのが見えた。
はにかむように微笑んでマハネはうつむいた。

マハネはこんなにきれいだつたかしら？

そう思ったのも不思議なことじやなかつた。今にして思えば……。

彼女もきっと恋する乙女だつたのだから。

不安な気持ちが胸の中を真つ黒に染めていく。

この気持ちは何なのだろう？

王子は私を素敵だと言つた。

私のような人に会つたのは初めてだと。

……だけど？

私はこひそりマハネの部屋に忍び込んでマハネの銀の小箱を持ち出した。

この中に私たちの運命がある。

シャルルカン王子は私の運命なの？ それとも……。

部屋に戻つて鍵を閉めると、カーテンも閉め切つて、テーブルの上に小箱を並べた。

私の銀の小箱と、マハネの小箱。

胸がざわざわとする。

見てしまつたら何かが、何かが取り返じのつかないほどに決まつてしまふ気がして……。

だけど開けずにはいられなかつた。

私は自分の運命に向かつて歩いて行く。運命を待つているような女じやなかつたから。

意を決して、まず自分の小箱を開けた。バラの花の細工が施された銀の箱を。

箱の中には……真つ赤な炎が燃えていた。

♪ 122773 — 2976 ♪

何……？　これは、いったい……。

「やはりお前が開けたのね。ナエマ」

どこからかお母様の声がして、飛び上がるほど驚いた。

「お母様！？」

周りを見回したけど、お母様の姿はない。

「ナエマ。開けていらっしゃるさい。マハネの箱も」
声は直接私の頭の中に響いてくるようだつた。

言われるままに、私はジャスミンの花の細工が施されたマハネの箱を開けた。

蓋を開けた瞬間にかぐわしい香りがして、青い水のような輝きが見えた。

「……水と……炎？」

お母様の優しい声がまた頭に響いた。

「お前にはわかるはず」

全てを焼き尽くす情熱の炎。

全てを潤わす癒しの滴。

王子が求めているのは私ではない。

お母様は何もおっしゃらなかつたけれど、私にはわかつたわ。

あの小箱の炎と青い輝きを見た瞬間に。

涙が頬を伝つたけど、私は私の運命をつかむと決めていた。

「ここでこれ以上コケにされてたまるもんですか！」

ひつなつたらこの城を出て、私の運命を見つけてやるんだから！

それから、思い立つたが吉田とばかり、大急ぎで荷造りをしてその日のうちに城を出たのよ。

持ち物は宝物庫にあつた金貨を少しばかり失敬して、城の宝の空飛ぶ絨毯と水晶玉と……それから、お母様の形見の小箱と、これだけあればまあなんとかなるでしょ。

……と思つてゐたら。

「さよならつてどうじうじうことですか？ 姫様」

生まれたときから姉のように私の世話をしてくれた侍女のアーネスにはお別れを言つてしまひ思つたのが運のつか。

「姫様は私がいなきやなんにもできないんですからね！ 姫様が行くところにまどかへだつてついて行きますよ」

……と、魔物封じのランプに自ら閉じこもつて私の旅に同行することになったの。

アーネスがいなくたつて魔法でなんとかなるんだから、ついてこられても口うるさいだけなんだから……。

しかも、自分は高所恐怖症でおとなしく絨毯に乗つてられないからつて普段はランプに隠れてるんだもの。

でもまあ、ひとりよりは少しあは心強いかな？ アーネスがいてくれたら。

「どうせ家出するなら思いつきり遠くへ行つてやううー。モハメド先生が話してくれたジパングなんていいわね！」

……と、空飛ぶ絨毯で海を越えてここ、ジパングまでやつて来たのよねー。

はるばる西の彼方から……といつても、空飛ぶ絨毯に乗つてるんだからひとつ飛びなんだけど、ジパングらしき小さな島国にたどり着いた。

いきなり外国人が街に出て行くのも田立ちすぎるので、始めの数日は山奥にひつそりと隠れて水晶玉でジパングの文化を研究していだの。

ジパングの言葉はなかなか難しいので、魔法を駆使して睡眠學習まで取り入れてアニスとふたりで勉強したわ。

ハトに変身して町に出て、そつと文物のキモノをいただいちゃつたりもしたわね（言つとくけど盗んだわけじゃないわよ！　金貨をちゃんと置いてきたんですからね！）。

それからひと月ほど経つたかしら……、私の言葉もずいぶん上達して、そろそろ本格的に町にくり出してもいいかなと思つたじるにタイミングよく？　野盜らしき男数人に取り囮まれた。

「命が惜しかつたら言つとおりにした方がいいぜ。べつぴんさんよ、男たちは下卑た笑いを浮かべて舌なめずりをしながら私を見ていた。

全員ネズミに変えてやつてもよかつたんだけど、「親切に立派な籠で町まで送つてくれるそうだから、そのまま言つ通りにしておくことにしたのよね。

「こりゃめつたにない上玉だぜ」

「上玉……つて、超美形つてことよね。ふむふむ。

「せつかくだから俺達で頂いちまこいやしょ！」

やれるもんならやつてみなさいな。

「馬鹿やつ。我慢しねえか。俺達がやつまつちや値が下がるだろうが」

「しかし、これだけの美人めつたにいやせんぜ」

「そうでしょうとも。

“輝く太陽を恥じ入らせるほど美しい”と言われた后ゾバイダの娘ですからね。

それからも男たちはなにやらひそかに話していたけど、夜も更けてきたことだし、なんだかうとうとしてしまった……。

本格的な眠りに落ちる寸前に、「ボスッ」という音とか「ぐえ～～っ」という声とかが聞こえてきて、ぼんやりと田を覚ますと、田の前にやたらきれいな男の子？ が立っていた。

ジパングの若い男性を近くで見るのは初めてだつたから、年齢まではよくわからなかつたけど、艶やかな黒髪と輝く瞳が印象的だつたわ。

さつさと話して男たちとはずいぶん毛色が違つみたいだけど、なんなの？ いの人は。

彼は二畠田のよつな田でひつじと笑つて言つた。

「お嬢さん。悪夢は終りました。白馬のお殿様が助けに参りました」

声をかけられて少し意識がはつきりしてきたけど、寝入りばなを起されたもんだからまだ眠くて堪らなかつたわ。
しかも空を見上げるとまだ真夜中だつたし。

「まだ暗いじゃない。もう少し寝かせてよ」

「こやこや、そんなに上方じゃなくて、もう下の方を見て」

寝ぼけたまま素直に下の方を見ると、ビビリやつときの野盗たちが転がっていた。

「あらへ、どうしたの？ 今度はあなたが私をやつすの？」

「やつうなんてとんでもない！」

美青年はぶんぶんと首を振つて答えた。

「そなたを野盗から助けたのさ…」
そしてまたさわやかに笑つて言つた。

「そうなの？ 面白そだだから言つとおりにしてただけで、別につでも逃げれたのに」

と思わず本当のことを言つと美青年は少なからずがっかりしたみたいだつた。

そのがっかりした様子が小さな男の子みたいでなんだか可愛い。

「でも、助けてくれたなんなら礼を言つわ。ありがとうね」

今でははつきりと冴えた目で彼の方を見ると、背後で大きく刀を振りかぶつた男の姿が見えた。

「あ。後ろ」

危ないつと思つて指差したけれど、ガキンという音が鳴つて既に彼は斬られていた。

斬られたにもかかわらず彼は平然と振り返つて、驚きのあまり奇声を上げる男を一瞬で尽き倒した。

常人だといふのにすごい瞬発力！

こういう剣術を国では見たことがなかつたけど、かなりの使い手みたいね。

「見事な腕前ね。あなた名前は？」

「上泉六三郎だ」

彼は刀を鞘に收めて、私をまっすぐに見た。

その目は優しく微笑んでいて、その細い腕は荒くれ者5人をひと

りで倒すよつた豪傑のものにはとても見えない。

むしろなんだか可愛いのよね。悪い人じやなさそつだし。

籠を開けて六三郎は私の手を取つた。

意外に骨っぽい彼の手は温かく、少しだけ胸の奥がざくんとした気がした。

「姫様……、なんですか？　あの男は」

私は六三郎が眠った隙に、じつそりランプからアニスを呼び出して事の次第を説明した。

5人の死体が転がっているところから離れて、安全そうな川辺で今夜は野宿することになったの。

「うへへん。命の恩人？」

少なくとも私のために命を賭して戦ってくれたのは本当だし。

「こんな不得体の知れない異国の中についていくなんて、賢い判断ではないでしょ？」

アニスは眉をひそめて小声で言つた。

「小声にならなくとも大丈夫よ。今の彼は殺しても起きないから。

魔法をかけてあるの」

「普通殺したら一度と起きませんよ」

……相変わらず口のへらない女だわね。アニスも。

そう言いながらも、アニスは少しためらいながら六三郎の寝顔を覗き込んだ。

「まあ……」これは、ずいぶんときれいな若者ですね」

「でしょ？ シャルルカン王子にも劣らない美丈夫よね」

「でも……ヒゲを生やしていませんね。まだ未成年なのでしょうか？」

「うへへん。そうかも知れないわね」

私たちの国ではヒゲを生やしていない男は子供がホモと言われているの。

ヒゲをたくわえていることが立派な成人男性の証もあるのよね。

ジパングはどうみてもオヤジだつたりしてもヒゲを生やしていない人もいたけど、六三郎は案外私と同じ19歳ぐらいなのかも知れないわね。

あんなにたくさん人の男を斬ったのに、罪のなぞそんな無邪気な寝顔をしている。

「とにかく悪い人じゃないわよ。もしさうでも一瞬でネズミにしちゃうから心配しないで」

「……まあ、そなんでしょうけど」

アニスは「嫁入り前の娘が……」とかぶつぶつ言いながらまたランプに戻つていった。

嫁入りをつちやつて家出してきた娘を相手に何を言つてゐるのか

しらね。

私はもう一度六三郎の寝顔を見つめた。

そして、銀の小箱をそつと持ち上げてみた。

そつと蓋を持ち上げるとキラキラと虹色に輝く星たちが見えた。

「星……？　これはいつたい？」

アムランを出る直前は真っ赤な炎が燃えているように見えたのに。今は虹のように色彩を変えながら輝く無数の星たちが閉じ込められているように見える。

私の運命を暗示するこの箱。今度はいつ何を言おうとしているの？

問い合わせても、その夜お母様の声は聞こえなかった。

翌朝から六三郎との二人旅（実はランプに入ったアーネスも入れて三人旅）が始まった。

話を聞いてみると、彼はもといた道場では免許皆伝の腕前で、その師匠をも凌ぐ剣豪だったらしい。

剣の腕を頼みに就職活動してゐるらしいんだけど、要領が悪いのか未だ就職先は見つかっていないんですって。

あれほどどの剣の使い手なら、向こうの方からスカウトしきてもおかしくなさそうだけど……。

「七重。そなたの家はどこだ？」
「帰りたいだろ？」「

水にひたした干し飯を朝食にほおばりながら六三郎が聞いた。
この人私の名前を聞き間違えて「七重」つてことになっちゃったの
よね。まあいいけど。

「ううん」

もらつた干し飯を少し齧つて首を振った。

「私家を出てきたの」

「家出？ それはまたなんで？」

六三郎は驚いたように田を丸くしていた。

まさか「婿探しに来ました」とは言えないのであいまいに

「うーん。色々あって……。それに簡単には帰れないわ。遠い、遠
い国だから」「

と答えておいた。

「へー。そんな遠い国から女ひとりでなんて、大変じゃなかつた？」

「ま……、まあね」

「深く追求しないでよ……。」

「なら、俺と一緒に来るか？ そなたひとりぐらことは何としても食

わせてやるし守つてやるだ」

六三郎はなんの心配もなれど、明るい表情をして言った。

確かにジパングには不案内だし、彼がいれば色々なことを教えてもらえそうだわ。

あの虹色の星はきっと六三郎と関係があるような気がするし。それに、この人なんだか可愛いし、気に入っちゃったのよね~。

そう考えた私はにっこりと微笑みながら頷いていた。

このときは、数日後彼が自分の夫になるとはまだ思つてもいなかつた。

そして……よもや、自分が彼に呪いをかけることになるとこいつとも。

俺は故郷である常陸国へと向かっていた。

この状況を故郷に居る剣の師匠に相談しようとしたのだ。

とは言つても師匠にこの状況をどう説明すればいいんだよ……。
「なぜか突然、女になりました」じゃ絶対に信じてもらえないだろうしな……。

まあそれは故郷に着くまでに向とか上手い言い方を考えよう。

しかし、今度故郷に帰るときは師匠には「妻を娶りました!」と報告して驚かせるはずが、まさか「女になりました!」と驚かせる事になりかねないとは……。

もつとも剣の師匠にこんな事を相談しても、なにも解決しないかも知れないが、あまりの出来事に、実際俺自身も気持ちが落ちているとは言えない状態だ。

七重が居なくなつて、はや五日。

もしや、またさらわれたのかと思い、七重が居なくなつた付近の遊郭はくまなく捜したが、七重の姿は無く、それらしい女を見かけたという話も無かった。

やつぱり、俺の体が女になつた事と七重が居なくなつた事は関係あるんだろうか……。

とにかく一旦故郷に帰つて、気を落ち着かせたら改めて日本中を歩き回つても七重を探し出すつもりだった。

しかし、七重は今どこにいるんだろうか。

遊郭に売られたりしているわけじゃないのは間違いないと思つが、それと七重の身が安全という事とはまた別の話だ。

だが、闇雲に探し回つたところで偶然七重を見つけるなんて事は、あり得ないだろう。

俺が故郷に向かうのには、当然元来た道、七重と歩いた道を逆に歩くことになる。

もしかすると、何か手がかりがあるのでは？　という考えもあつた。

さらに、落ち着いて事態を整理する意味もあつて取り敢えずは故郷を田指す事にしたのだ。

しかし、七重が無事かを考えるたびに、胸が張り裂けそうになる。七重は野盗に連れられ去れそうになつていていた時も、簡単に逃げられるみたいな事を言つていたが、實際どうやつて逃げるつもりだったのかは聞いていなかつた。

今回七重が連れられて戻つてきていないと言つ事は、七重のその方法が通用しなかつたと言つ事だらうか……。

だめだ、気が滅入るばかりだ。

しかも、ただでさえ頭を悩ませている俺に追い討ちを掛けやがる奴がいる。

「宿に泊まるんなら同室つすよね！」

どうしてここにつけさせて、？（疑問）ではなく！（断定）を持つて来るんだ？

俺と同室で寝ることを田論んで、伍助は田を輝かせながら俺の後を付いて来る。

どうしてこんな奴を付いて来させるのかと言えば、勝手について来やがるのだ。

伍助と初めて会った時に、伍助は追っ手を1対2で倒しただけあつてかなりの腕前だ。

そのかなりの腕前の忍者を撒くのは、それ以上の腕前の忍者でないと難しい。

戦えば伍助に負けるとは思わないが、あくまで剣士である俺に、伍助を撒くのは不可能だったのだ。

もちろん、何度も俺も伍助を撒こうとしたのだが、伍助が寝ていふうちに起き出し、必死で駆けて山を越え谷を越えた挙句、

「黙つて行くなんて、つれないですよ！」

と笑いながら先回りされていては逃げるのも馬鹿馬鹿しくなった。

結局、どうせ撒けないのならと、俺は伍助に貴重品以外の荷物を持たせたり、野宿する時に食事の用意をさせたりと、こき使う事にした。

だが伍助は、荷物を持たせようとした俺を

「やつと俺のことを受け入れてくれたんっすね！」

と抱きしめてきやがつた。

とりあえず伍助の股間を蹴り上げたが、寝込みを襲われてはたまつたもんじゃねえ。

「……いや、先を急ぐので次の宿場町は素通りする」

「野宿は危険ですよー!」

お前の方がもつと危険だ。

「だいたい、俺は野宿でも襲うから同じ」とですよ?」

自分で言つなよ。

だが先を急ぐ事もあるが、実は路銀が底をつきかけている。野宿したからといって体調を壊すようなやわな鍛え方をしていいので、よっぽどの事がない限り野宿したほうが良いだろ?。飯は伍助が何とかするしな。

俺は、未練がましく「やつぱり泊まりやしょーよー」という伍助を無視して宿場町を通り過ぎ、道を急いだ。

山道を進んでいると、はじめは俺たち以外の旅人とも何人かすれ違つたが、日が傾くに連れて誰ともすれ違わなくなつた。

これからこの山道に入つていては、日があるうちに次の宿場町まで辿り着けない。

野宿などしない普通の旅人がこの時間にこんなところを歩いてはいないか。

俺たちも暗くなる前に野宿の準備をする事にした。

「じゃあ、なんか食つもん集めてきやすー!」

伍助はそう言つて山の中に分け入つて姿を消した。忍者だけあって、食べられる山菜を見分けたり、野鳥などを捕らえるのが上手い。まかせておけば大丈夫だろう。

じゃあ、俺はかまどでも作っておくかな。

いろいろな石を集めて環にならみに並べ、次に木の枝を集めた。たいして手間が掛かる事でもないのですぐに終わり、俺は近くに生えていた木の幹にもたれ掛け伍助の帰りを待つた。

そういうえば七重と旅していた時は、七重がかまどの準備をしてく れてたな……。

七重の作る料理は今まで食べたことが無い味付けで、辛かつたけ ど美味かった。

俺が「変わった味付けだな」と囁ひて、七重は、「私の生まれたところの味付けな」と言った。

「七重の生まれたところって?」

「えーと。ここよつやつと西に行つて南の方よ

「ずっと西で南つて囁ひて……。もしかして琉球?」

「え? ええ。やつよ。やつ

「やつよ。やつ。やつうか。七重はひよつとHキゾチックな感じだから、そ うかなつて思つてたんだ。でも、すくべ遠くから來たんだな」

「ええ。やつ。とても遠くから來たの……

七重はやつと遠く遠くを見つめていた。

琉球か……。

場合によっては琉球まで行くことも考えないといけないな。

しかもしも七重が琉球に居るとなると、もしかして俺に見切りをつけ、実家に帰ったということか！？

いやいや、そんな事は無いはずだ！

だって、俺と七重はラブラブだつたはずだ！

だが、七重は親の承諾を得ずに俺と結婚している。

もしかして、それが親にばれて連れて帰られたとか、ありえるかも知れない……。

やはり、結婚するときは、ちゃんと親御さんに挨拶すべきだったか……。

琉球に行くときは、結納道具を持参すべきだつた

いや、しかしそれにしても、俺の体が女になつている事を先に解決しないと、

「娘さんを嫁に下さい！」

「きみは女じやないか」
で、話が終わってしまう。

やはり、男の体に戻るのが先か？

いやいや、七重が実家に帰つていると決まった訳じゃない。
七重の安全を考えれば、七重の居場所を先に見つけないと。

うーん。考えが纏まらない。

やはり、早く故郷に帰つて落ち着いて考えを整理する必要がある

な。

「ただいま帰りやした」

俺が七重の事や体の事を色々と考えていろると、伍助の声が聞こえた。

声のする方に視線をやると、伍助が右手で山菜を抱え、左手に野鳥をもつて戻ってくるところだった。

そして近くまで来ると、俺が準備したかまどの傍にその山菜と野鳥を置いたが、伍助は終始にこにこと笑っている。

「なにをそんなに笑ってるんだ？」

「いやー。一仕事終えた旦那の帰りを、飯の準備をして待つ新妻つてこんな感じなんっすかねー？」

伍助はそう言つて、俺に向かつて親指を突き立てて笑つた。

「……」

> 22973 | 2976 <

俺は一度とかまどの用意はしないと心に誓い、とうあえず今回は無視する事にした。

その後俺は、飯の準備は伍助に任せ、伍助に背を向けて寝転がり飯の準備が終るのを待つた。

背を向けたのは、もちろん、拒絶の意思を表す為だ。

そしてそのうち、良い匂いがしてきたなー。と思つてると伍助の「出来やしたよー」という声が聞こえた。

俺は伍助が用意した飯を食い終わると、すぐに横になる事にした。辺りが暗くなれば寝るしかする事がないのだ。早く寝て朝早くに起きて道を急ぐのがいいだろ。

だが、木の幹の傍で横になろうと、かまどの前から立ち上がろうとした俺だったが、膝が縛れその場に尻餅をついてしまった。

なんだ？ 体が重いぞ？

「あ。効いてきたっすか？ 飯に薬入れたんっすよー。」

おいおい。洒落になんねえだろ。

「いやー。料理している時に、俺から背を向けていたから、チャンスかなーって。つい

伍助は呆然とする俺に見つめられながら「さーて」と、ゆっくり立ち上がった。

我に返った俺は、地面を転がり木の根元へと辿り着いた。そして木の幹に立てかけていた刀を手にする。

殺らなければ、犯られる！

俺は震える手で刀を抜くと、木の幹で体を支えながら何とか立ち上がった。

「あれ？ 結構動けるんすね？ かなりの量の薬入れたのに
伍助はそう言いながらにやにやと笑って近づいてきやがる。
薬が効いていると余裕なのだろう。

俺は刀を持つ手を腰の右横に引いて、突きの体制に入った。
伍助は警戒して俺の突きの間合いの外で脚を止めた。そしてそこで余裕の表情で俺を眺めている。

薬が効いて俺が倒れるのを待っているのだろう。

だが、しばらく俺と対峙しているうちに、伍助が首を傾げた。

「なんでも立つてられるんです？」

「昔から薬が効き難い体质でな」

「げ！ それは予想してなかつたすね……」

さつきまで余裕を見せていた伍助だったが、かなり焦ってきたようだ。

さすがに薬まで使って失敗しては、後がない。

ここまでやつて失敗しては、次の日も共に旅するには難しいと伍助も分かっているのだろう。

だが薬が効き難い体质というのは嘘だつた。

俺は今にも倒れそうになっていたのだ。

ではなぜ平気そうに、重たい刀を構えていられるのかというと、実は木の幹にくぼみがあるのを見つけ、そのくぼみに刀の柄を差し込んでいたのだ。

つまり、重たい刀を構えているのではなく、固定された刀に寄りかかって立っているのだ。

だがそれももう限界だった。

寄りかかるといつても、刀を構えているように見せかけているので、全体重を支えられているわけではない。

今にも膝が崩れそうだった。

倒れたら伍助の餌食になるだろう……。
しようがない……俺はやむを得ず切り出した。

「ルールを決めないか?」

「ルールつか?」

「ああ。とりあえず薬はなしだ」

「へえ。それで?」

「薬なしでお前が俺を襲うのに成功すれば、大人しくお前のものになつてやろうじゃないか」

想像すると自分でも気持ち悪いが、仕方がない。
ここで犯られるよりはマシっていうもんだ。

「へー。どういう風の吹き回しですか?」

伍助が疑いの眼差しで俺を見た。

薬が効かないのなら、そんなルールを作る必要がないだろうと疑つていいのかも知れない。

「お前がもつと強力な薬を持つていないと限らないからな。まあもつともこのルールをお前が受けないなら、どうひらじろもつお前をつけていたせめる訳にはいかないがな」

俺は舌が縛れそうになるのを何とか堪えた。

目も霞んで来た。

もう限界に近い。

「うーん。どうせじょつかねー」

伍助にしてみれば、俺が連れて行かないと言つても、勝手について来る事はできるのだ。

薬ありで俺に隠れて追いかけて襲うチャンスを待つと、薬なしで俺と一緒に旅しながら襲うチャンスを待つのどうひらじろが良いか迷つていいのだろう。

「言つとくが、薬ありの場合、お前を殺すつもりで抵抗するからな」

「げ！ それは勘弁して欲しいですね……」

伍助は「うーん」と唸り考え込んでいる。

まつたく、もつと違うことに頭を使つたらどうなんだ。

そんな事だから、上司の嫁なんかに手を出して命を狙われるんだ。

……くわ。

早く結論をだしてくれ、もつ……限界なんだ。

「うーん。じゃあ薬なしの方で」

その声を聞いた瞬間、俺は意識を失った。

しばらくし気付くと、俺は伍助の膝に抱えられていた。
なに？

犯られてないか！？

俺は慌てて自分の体のあちこちをさわり衣服の乱れを確認した。

「大丈夫つすよ。何もしていやせん。約束ですからね」

伍助はそう言つて、にこりと笑つた。

「伍助……」

意外に律儀な奴なのかもしれないな……。

「お六……」

伍助はそう言つて俺の顔に自分の顔を近づけた。

「誰が、お六だ！！」

俺の頭突きが伍助の顔面に炸裂した。

4・ナマ（前書き）

六三郎とナマが結婚するまでの経緯を書いたお話をナマのドキドキを書いてみました。

アニスが旅籠の隣の部屋で新しいキモノを縫つてゐる隙に、私は
じつそり水晶玉を取り出した。

お母様直伝の透視スクリュイイングは私がもつとも得意とする魔術のひとつなのよ。

両手のひらで水晶玉の表面を軽くさすると、ぼんやりと六三郎の姿が浮かび上がってきた。

あの人、また野宿してゐるのね。

どこの山奥で焚き火の炎に照らされながら横になつてゐる六三郎の姿が見えた。

相変わらず無邪気な寝顔で、男のときから可愛かつたけど、女になつた今ではこの私が焦りを感じるくらいの美女ぶりだわね。

眠れる美女……と言つたところかしら？　となんとなく思つた瞬間に隅の方で黒いものが動くのが見えた。

……男？

引き締まつた体つきの黒装束の男が歩いてゐる。

もつとよく見ようと水晶の映像をズームアップして男の顔がはつきりとわかるようにした。

粗野な感じだけどなかなかのハンサム。纖細で美女と言つても通

用しそうな六三郎とはまたに正反対のタイプで、男臭さが漂つワイルドな魅力がある。

なんなの？　この男は？

男は口元に笑いを浮かべると、いきなり六三郎に覆いかぶさつて首筋に唇を押し当たた。

なに～～～！？　ここつも六三郎の愛人なわけ！～～？？

思わず拳を硬く握つて水晶玉を覗き込んだけど、水鏡に小石を投げ込んだみたいに映像が割れて、波打つようなノイズが流れた。

あ～～、またやつてしまつたわ！　こんなとおり～～！

お母様によると、私のスクライティング能力は突出してるんだけど、どうも感情の起伏が妨碍になつて映し出した映像にノイズが入つてしまつことじがしばしばあるらしい。

「ひなつたらむつ」の映像は見ることができないのよね～。

「くう～～～～～～～

感情のコントロールができない限り、このノイズもコントロールできないみたいなんだけど……。まったく、こんな時にー！

「姫様？　どうかしましたか？」

「仕事終えたらしごアースが襖を開けて出てきた。

私はあわてて水晶玉を後ろに隠して答えた。

「な、なんでもないわよ。ちょっと足がしびれちゃって」

アニースはうなずいて言った。

「ジパングって椅子がないですもんね。ザブトンとかいうクツショ
ンを作るぐりいなら椅子を作つたらいいこのこと思いますわ。木材も
驚くほど豊富にあるよつじす」

なんとかごまかしたけど、自分から呪いをかけて捨ててきた六三
郎が気にかかるなんてとても言えないわ……。

「で、どうだつたんですか?」

アニースは私の向かいに腰を下ろしてたずねた。

「どひつて?」

「六三郎さんのことです。水晶玉で見ていたんでしょう?」

……」の女」を千里眼なんぢやないかしら。

「べ……別につ」

私はふいつと顔を背けた。

「私思うんですけど」

アニースは私の態度を氣にもかけずに続けた。

「六三郎さんの浮氣つて姫様の勘違いだつたりしませんか?」

「どひつて? 私は」の田で見たのよ」

まさに今も、水晶玉で見たばかりですしね。

「六三郎さんと直接お話したことはありますか？」

アニスは首を傾げた。

「男性は愛してもいい女性をお母様の形見のかんざしを渡したりするものでしょうか？」

「それは……」

わたしは。初めての夜、六三郎が私にかんざしをくれたときのことと思い出した。

六三郎との旅は主に野宿だった。

就職活動中の彼はお金持ちとは言いがたかったし、徒歩での旅だったから（私の正体は隠していたから絨毯は使えなかつたの）、慣れない私を連れてそれほど早く移動することはできなかつた。

すっかり疲れた私を背負つて歩いてくれることもあつたし、六三郎ひとりなら次の旅籠にたどり着けた距離でも、私を連れていたせいでその半分ぐらいしか進めなかつたみたい。

だから必然的に野宿をすることが多くなつていて、六三郎は柔らかい草を集めてその上に自分のキモノを置いて少しでも寝心地のいい襷を作ってくれたりもした。

「い」めんなさいね

私は六三郎の背中で揺られながら謝った。

「何が？」

「重いでじょひ。私足手まとこになつてゐわよな」

実は六三郎が負担を感じないように魔法でちよつと身を軽くして
るんだけど、それでもかなりの負荷がかかることになってしまつ。

六三郎は暢氣に笑いながら答えた。

「なんの。軽すぎて拍子抜けしたぐらうだよ。女はみんなこんなに
軽いのか？」

そんなわけないでしょ。普通だつたらこの部へ門にあるわよ。

「それ

「一緒に来い」と言ったのは俺だ。そなたを守ると約束したんだから。
これからこいつしたこと無いよ

ながら六三郎は言った。

胸がぐくんと鳴った。初めて彼が私の手を取ったときのよつと。
「ひみつのときのよつと？」

「いやだわ。ぴつたりと密着して背中からこのどきどきが伝わつ
た。六三郎は鎖帷子着てるから伝わらないかしら
（？）

こんな少年みたいな感じの華奢な体で（とこつても筋肉硬いけど）、女の子みたいにきれいな顔で、そんなこと言わると弱いのよね～。

「のギャップがダメだわ！ 私。

シャルルカン王子とキスをして、身も心も焦がすような恋心を抱いたのはついこの間のことなのに。

激しいスコールの後、砂の間の水分がじんじんと消え昇っていくよひに、あの時の切なさが消えてゆく。

まだ彼に出会って4日目だといふのに……。

その日は、六三郎にわべジパングの「梅雨」という雨季が近づいてきている影響でかなり湿度が高かった。

アムランではこんなじめじめした空気を感じたことがなかった私は、息苦しそうにだったわ。

特に、夜の寝苦しかったわ。

六三郎は小さな滝の近くの風通しのいい涼しい場所を野宿に選んでくれたけど、19年間砂漠でしか暮らしたことのない私は、何度も寝返りを打つては汗だくなつて日田を覚ました。

「のんなんじゅとつても寝られやしないわー。

ただでさえ寝起きのあまりよくなかった私だけど、あまりの不快さにがまんできなくなっていたのね。

熟睡している六三郎の横をじろり通り抜けて、滝つぼで水浴びをすることにしたの。

乾いたきれいな筋の上でバサッとキモノを脱ぎ捨て（姫だから自分でドレスをたたんだりはしないのよ）、つま先をしゃぶると水の中に浸してみた。

うへへん！ 冷たくて気持ちいい！

安心した私はぎらぎらと水の中に入っていました。

滝つぼは腰ぐらいの深さで中腰になれば肩までじっかりと浸かることができて水浴びにまぴつたりだった。

嬉しくなって、私はちょろちょろと流れている細い滝の下まで歩いて行つて頭から冷たい水を受けた。

……あると、思わず声に出して言つてしまつた。

「あへへー！ 気持ちいい！」

「七重ー、じうじたー。」

私の声と気配の無むに違和感を感じたのか、田を覚ましたらじー六三郎の声がした。

しまつた！ 寝ぼけて魔法かけるの忘れてたわー！

一刻も早く水に飛び込みたい一心で六三郎を昏睡状態にする魔法をかけるのを忘れちゃったのよね。

しかもあわてちゃったもんだから、どんな魔法でこの事態を切り抜けばいいのかとつさのことで思いつかない。

「七重！」

ガサッと音がして草むらをかきわけて六三郎が飛び出してきた。

水浴びをしている私を見て驚いたのか、一瞬弾かれたように後ずさって声を上げた。

「な、なななな何してんだ！？ 七重！？」

「何つて……」

見られたものは仕方がない、とばかりに私は開き直ることにした。

「水浴びよ。あんまり暑くて寝られないんだもの」

大丈夫。肩まで水に浸かっているし、頭から水浴びしていたさつきも六三郎に見えたのはせいぜい背中ぐらいいよー。

そう、自分に言い聞かせたものの、胸のドキドキが頭までのぼつて、体は冷えたのに顔が火照ってきているのを感じる。

「ひとりで危ないだろ？ また野盗にさらわれたらどうするんだよー？」

「さらわれないわよ」

「……って、実際さらわれてただろー？ そなたは女なんだから用心しないと！」

六三郎は今度は真剣に怒つているようだった。

あれはわざとさらわれたのであって、そんな心配はまつたくないのだと叫つわけにもいかない。

「わ……わかったわよ。出るから向ひへ行つてよ」

私は右腕で水面を払いのけるように飛沫をあげながら六三郎が来た方を指差した。

六三郎は素直に来た道を帰つていったけど、じばりくするとまたガサガサと音をたてて戻ってきた。

「おい」

「何よ？」

あんたがいふと出られないじゃないの～～！」

彼は襦に使つていた自分のキモノを私のキモノの横に放り投げた。

「それで体を拭くといい

六三郎は私に背を向けてその場に立っていた。

「……あ、ありがとう」

私は体をかがめたまま、水面から上に肌が露出しないようにして
キモノを置いた岩の方に進んだ。

「……ちよつと」

「なんだ？」

「こつまでそこへいるのよ？ 出れないじゃない」

六三郎はため息をついた。

「見ないから安心しる。でも、誰かが来たら俺がいないと危ないからな」

今度こそ私の顔は真っ赤になった。

両手のひらで頬を覆いながら岸に近づいて、水から上がるときは
両腕で胸を隠しながらすばやく六三郎のキモノを取り上げた。

あわてて体を拭いて自分のキモノを着ると、帯をしっかりと結び、
髪をしぼって足元にボタボタと水滴を落とした。

「着たわよ」

六三郎は振り返つてこちらへ歩いてくると自分のキモノを拾った。

「布団が濡れてしまったな……」

「……」めぐなさい

私はうつむいて言った。うつむいたのは反省したからじゃなくて、真っ赤になつてゐるであらう顔を六三郎に見られたくなかったから。

今夜は明るい満月で、月明かりに照らされたら私の頬の赤さがきっとはつきりとわかつてしまつ……。

六三郎はゆきくつと右手を伸ばして私の濡れた髪に触れた。

我知らず体がびくつと震えるのを感じた。

髪についていたのか縁の若葉をつまんだ六三郎がその葉を見ながらささやくと呟いた。

「……やべーな……。俺が襲つちまうかも……」

！？？

「……ちよ……、襲うとか、そんな顔で言つのもやめて……！」

「七重」

六三郎は真剣な声で（表情は見れなかつた。私が真っ赤な顔を上げれなかつたから）私の方を見て、両手で私の肩を抱いた。

「キドキがピークになつて胸が苦しくて、私は思わず身をよじつて逃れようとした。

「聞いてくれ。七重」

逃がすまいとしたのか六三郎の腕に力がこもった。私が身動きもできないほどに。

「七重。俺の嫁になつてくれない？」

私はびっくりして真っ赤な顔のまま六三郎を見た。

何を……言い出すのよ？ 突然、この人は……。

六三郎は優しい目をしていて、でもちょっと困ったような照れたような表情をしていた。

「……はじめて会つたときから飛天のように美しい女だと思つてたんだ」

右手を私の頸に添えて更に上を向かせる。

「白状すると、そなたが売られてしまつなら最初の客にならうと思つて後をつけてた。最初にそなたを抱くのは俺だと」

「わ……私は売り買いされるような女ではないわ！」

「わかってる」

左手で私の頬を包み込むように触れる。髪から流れる滴がその手を伝つて落ちるのがわかる。

ああ、きっと私の顔が火照っているのが六三郎には丸分かりにな

つたしまったに違いないわ。

六三郎は田を細めて言つた。

「そなたのような女は初めてだ」

彼の言葉に、シャルルカン王子の言葉を思い出していた。

「あなたのような人に会つたのは初めてだ」

王子もそう言つた。でも、選んだのは私ではなかつた。

「……私だけ？」

「うん？」

「それは、私だけ？ 死ぬまで私だけを愛すると誓える？
アッラーにかけて」

六三郎は首を傾げた。

「アッラー？」

ジパングではアッラーの神は敬われていないのね。

アムランでは、アッラーに立てた誓いを破ると魂が損なわれ懲罰を受けると言われているわ。

つまり「破ることのできない誓い」を意味するのよ。

「それが何かは知らんが、」のかんざしにかけて誓つた。

彼は下着の懷から赤い包みを取り出した。包みを解くと中に入っていたのは一本の鼈甲の髪飾りだつた。

「これね?」

「母上の形見だ。肌身離さず身につけていた。上泉家の家紋が入つてゐる」

丸い部分に三つ葉のクローバーのような彫が入つてゐる。

きつと高貴な女性が髪に挿していたのだろう。

「これをそなたに。母上以上に愛する女に伝えたう渡そうと思つていたんだ」

六三郎はかきこじの玉の方を私に向けて差し出した。

「そなたがこれを受け取つたら、今晚そなたを俺の妻にする

「…………」

「…………今晚つて!? なんでそんな急展開なの〜〜!?

考えておいてくれとか、せめて一週間後に返事を聞かせてくれとか、普通もつと待つてくれるもんじゃないの?」

シャルルカン王子のときは違つ。これじゃ振り回されてものまるで私じゃない?

しかも手首とかかけひきとかじゃなくして、この男は天然なのよ～
～～～！

ああむづ～。そんなけれども無い顔で私を見ないでつた。

混乱する頭のまま彼の目を見ると、ほとんど魔法にかかったよう
にかんざしに指を伸ばした。

数秒後かんざしを手にしている自分にはっと気がつくと、六三郎
はそのまま私の体を引き寄せ、強く抱きしめた。

そして私を抱き上げると柔らかな草の上にそっと下ろした。

「ちよ……ちよっと待つて

私はのしかかってくる六三郎の胸を両手で押し返そうとした。

「どうして？ 言つただろう？ カンヅシを受け取つたら今晩そな
たを俺の妻にするつて

彼は私の両手首をつかんで傷つけないよう優しく、でもしつか
りと地面に組み敷いた。

「七重は受け取つた。これはオッケーとこいつことだよな？」

「それは……そりがもしれないけど……」

女には心の準備つてもんが必要なのよ～。

「あれは、手が勝手にね～」なんて言い訳はこの期に及んで通用し

ないかしら……？

「有言実行が俺の信条だ」

六三郎は笑つて私を見た。

「…………」

そんな風に微笑まれると何も言えない……。

彼は、心臓が破れそうにドキドキしている私の帯を解き、胸元を開いた。

そして、私の首筋に、肩に、胸に、頬に、唇に、そつとついばむような口づけをした。

すべてが終わって、自分が六三郎の妻になつたのだと思つたとき、私は彼の腕の中でそつと呪文を唱えた。

六三郎が私以外の女を愛せなくなる呪文を。

5：六三郎（前書き）

いよいよ、六三郎が故郷の道場に到着。
六三郎の元力ノも登場?
(なにげに伍助も大活躍)

俺は、伍助との真操をかけた数度の攻防にすべて勝利し、何とか清い体のまま常陸国にある故郷の村へとたどり着いた。

だが、伍助との攻防に全神経を傾けた結果……。

師匠に会った時に、俺の身に降りかかった事態をどう説明しようかという事を、まったく考えてなかつたのだ。

くそ……、これもすべてこの男の所為か……。

俺は伍助を睨んだが、当の伍助は飄々たるものだ。

どうにかして、俺が男のままだという事で通用しないか？
そういうえば、伍助は俺を一目見て女と分かつたんだつけかな。
その時も俺は男の格好をしていたはずなんだが……。

「どうして俺が女の体をしているって分かつたんだ？」

「もちろん、フヨロモソンっすよ！」

「……ああ、すまん。聞いた俺が悪かった

「後、腰のラインっすかね！ それとやっぱり胸の膨らみはたまん
ないっすよー」

「……いや、もういい

だんだん気持ち悪くなってきた。

しかしフローロモンなんてもので分かるのは伍助くらいなもんだろ
う。

腰のラインと、胸の膨らみか……。

腹に布でも巻いて胴を太く見せて、胸はサラシを巻けば、男っぽく見えるか？

よしー、うだうだ考えてても仕方がない。

これで行こうー！

こうして俺は、体中に布を巻きつけ、数ヶ月ぶりに故郷の道場の門をくぐった。

「お久しごりです！」

俺がそう挨拶して道場に入ると、道場に居た俺の弟弟子達も一斉に、

「兄弟子！ お久しごりです！」

「いつも通りに！？」

と口々に挨拶をして来た。

うんうん。どうやら女だとばれていらない様だな。

「今着いたところだ。とにかく道場に顔を出そうと思つてな

俺はそう言いながら、弟弟子達のところに近づいた、が……。
でかー！ じいつらこんなに身長が高かつたか？

「あれ？ 兄弟子、背が縮んでないですか？」

なに？

あ！ そつか、女になつた時にもしかしたら身長が縮んでたのか！

着物がぶかぶかになつたとは思つていたが、それは単に体が細くなつたからだと思つてた。

七重が居れば、七重との背丈の差で自分の背が縮んだ事を分かつんだろうが……。

とにかく今は、何とか誤魔化さないと。

「いや。えーと。お前達ちょっと見ない間に随分大きくなつたな！見違えたぞ！」

「え！ 本当ですか？ 自分でも背が伸びたとは思つていましたが、いやーまさか兄弟子よりも背が高くなつているとは」

「ははは。いやいや、本当に見違えた！ 見違えた！」

ふー。

なんとか誤魔化せたか。

俺はやれやれと、額の汗を拭つた。

すると弟弟子の一人が、俺の背後に立つ伍助を見つけて聞いてきた。

「そういえば、そちらの御仁は？」

「ああ。こいつは俺が危ないとこを助けてやつた抜け忍で、伍助つて言うんだ」

「始めてまして。彼氏の伍助です」

誰が彼氏か！

俺は伍助に怒鳴りついたが、それよりも早く弟弟子達が騒ぎ出した。

「そんな！ 兄弟子はそつちの趣味は無いって言つたのに。」

「だったら俺も諦めなれば良かった！」

「ひどい！ 俺達を騙してたんですね！」

……おい。お前ら。

正直、兄弟子に迫られた事はあつたが、まさか兄弟子達にも狙われていたとは……。

もしかして、俺はまんまと獸の巣窟に入り込んでしまつたのか？

「お前ら騙されるな。俺が男に走るわけないだろ！」

俺が全力で否定すると、弟弟子達はなんとか納得したみたいだが、その表情はなにやら残念そうだった。

俺が男色に走つたのなら、自分にもチャンスがあるとでも思ったのか？

くそ……。

故郷の道場に戻れば、氣を落ちつかせられると思ったのに、これではおちおちのんびりともしていられない。

まあ師匠ならばこいつらみたいな事もないだろ。俺はそつ思つて道場を見渡したが、師匠の姿が無い。

「あれ？ 師匠は？」

「師匠は、持病の腰痛が悪化して寝ています」

そつか。

まあ師匠は20年以上前40歳のときに、当時の常陸国を治めていた佐竹氏側として、関東の雄後北条氏と戦つた事もあるという人だからな。

よる歳には勝てないか。

「と、言つ事は今道場に居るのはお前達だけなのか？」

「はいせつですか」

「うーん。

どうも心許ないな。

俺を含めてこいつ等の兄弟子は、みんな仕官を求めて道場を出て行つてゐるからな。

しかし、兄弟子達の仕官は上手く行つてゐるんだろうか？

数年前に道場を出た兄弟子の多兵衛さんの時はまだ合戦もあつたからすんなりと仕官出来たと聞いている。

だが、その話を聞いて、じゃあ俺達も簡単に仕官できるかも！と思つてその後に出た俺や、俺とおぼえてられない時期に道場をでた兄弟子達は、俺と同じく仕官に苦労してゐるんじゃないかな？

兄弟子達も当然俺と同じく、突きが主体の実践剣術。今はやりの刀を振り回す道場剣術は苦手のはずだ。

まったくほんの数年の差でいつも状況が変わるとは、これが仕官氷河期といつやつか。

俺がそう考へてゐると、弟弟子が遠慮がちに声をかけて來た。

「兄弟子が帰つて來たのが嬉しかつたので、忘れていましたが、実は……。今、道場破りが來てゐるんです

「道場破り！？」

わざわざいろんな田舎の道場に来る道場破りが居るとは。

「はい。やうなんです。二日後に果し合いで来ると予告があつたんです」「

「予告してから来るとは、随分自信満々な道場破りだな」

普通予告なんてすれば、道場側が圧倒的に有利だ。
道場側は準備を整えられるし、極端な話大人數を揃えて袋叩きに
した拳句、他に目撃者が居ないのを良い事に、1対1で勝つたんだ
と言い張ることすら出来るからだ。

もちろん、うちの道場はそんな卑怯な真似はしないが、どうやらこ
そろその道場破りはかなり腕に自信があるのでさう。

「それが実は、その道場破りは師匠の昔のライバルの弟子らしいん
です」

「師匠のライバル？」

「そうなんです。実は師匠の幼馴染だつたらしいのですが、昔一緒に
に合戦に出たとき、師匠の方が手柄を立てて褒美を貰ったのを逆恨
みしたらしくて……」

故郷の道場に戻つて氣を落ち着かせるはずが、色々と面倒な事にな
つてゐるな。
道場破りの件も含めて師匠と話すしかないか。

「師匠は母屋の方で寝てるんだな?」

「はい、そうです

その返事に、俺は勝手知つたる道場の奥へと進み、師匠に会って行くことにした。

伍助は連れて行くと面倒なので、道場で見学でもしていろと言つて置いてきた。

「師匠！ 六三郎。ただいま帰りました！」

俺は師匠の寝室の前で正座をして、中で横になつてゐるであろう師匠に声をかけた。

「おお。六三郎か。どうしたのじゃ？ 仕官は出来たのか？」

う！

いきなり痛いところを……。

「いえ……。残念ながら仕官の儀はまだですが、実は折り入つて師匠に相談したい事が」

「わしに？ まあ良い。とにかく中に入れ」

「失礼いたします」

俺は師匠の言葉に、ふすまを開け寝室へと入つた。

師匠は予想通り、布団に横になつていた。

そして俺を見るなり、体を起こしながら口を開いた。

「おお。六三郎、少し見ない間にすっかり……小さくなつて無いか

？」

「氣のせいで御座います」

「おお。やうか氣のせいか」

ふー。

上手く誤魔化せたか。

「それで、何の用でわしに会いに来たんじや？」

「実は、私妻を娶りまして……」

「なに！ それはめでたい。すぐにその妻とやひひと会わせろ。どう
におるんじや？」

「いえ。それが……突然姿が見えなくなつてしまいまして……」

「なに！ 結婚してすぐ嫁に逃げられたと言つのか！」

「ち・が・い・ま・す！ 姿が見えなくなつたのです！」

だが俺の抗議もむなしく、師匠は氣の毒そうな表情で俺を見ている。

ああ。現実を認められないんだな……。とでも言つたのだろう。
だが、断じて逃げられたのではない！ その前田まで俺と七重は
ラブラブだつたのだ！

「ふー。それで、わしに何を相談したいのだ？ 嫁がどうしていな
くなつたのか？ などと聞かれても、わしに突然居なくなる乙女心
など分からんぞ？」

「歸匠にこの女心について聞いつけたが、おまかせで」

「じゃあ、わしに何が聞きたいのじゃ？」

「居なくなつた人を探すにはどうすれば良いか、歸匠なら何かお知恵があるかと思いまして」

すると歸匠は「うーん」と眉をひそめていたが、しばらへすると「たしか……」と口を開いた。

「どこの国に、失せ物や探し人が居る場所を探し当てる事ができるといつ者達が居た筈なのじゃが……」

「おおー、まさしくその様な話が聞きたかったのです！　その者達はどうに問ひますよ！」

だが歸匠は俺の問ひに首をひねつた。

「どこの国に居るかがどうしても思いませんー。」

歸匠……そんな事を男らしく叫んでいたがどうでも。

しかし、そうなるとどうしたものだろう。

歸匠が思い出すまでじめりく待つしかないか……。

あ、そういえば道場破りの話もあつたな。俺が戦つた方が良いんだろうか。

「やう言えば、道場破りが来ていいのうですね」

俺がそう聞くと、師匠の表情が曇った。

当たり前と言えば当たり前だが、師匠にとってあまり楽しい話では無いらしい。

「ああ。あやつめ。手柄を立てられなかつた事など出来ぬ得であるひ、わしを逆恨みしあつて」

確かに。

だが、その様な者の弟子など高が知れているとゆうのだが、よくうちに道場破りに來たな。

「じい。その道場破りは果たしてだれなのでしょつか？ 話を聞く限り、たいした相手とは思えないのですが」

「いや。油断は禁物じや。あやつは剣の腕はわしに敵わなかつたが、それだけに卑怯な奴での。もしかしたら、今度の事もわしが伏せておる時を見計らつて弟子を送り込んだのかもしれん」

「なるほど……」

確かに、俺を含めた免許證クラスの弟子がすべて出払つ。そりに師匠も腰痛で寝たきりの時ならば、たいした腕でなくとも道場破りに来ておかしくは無いか。

だが、俺がちよつと帰つてきついたのが運の刃あだ。
俺がその果し合いに出れば問題ないだらつ。

俺が師匠に「果し合には俺が出ますー」と申し出ようとしたその時、

「書いておぐが、おぬしに果し合には出で貰おつなど、考えておりんだぞ」

と師匠が先に口を開いた。

「確かに、おぬしに任せればわしも安心じや。しかし、今この道場を守つておるのはお前の弟弟子であるあやつりじや。わしがあやつりを信用してやつたといんじや」

「師匠……。

「申し訳ありませんー。この六三郎。師匠のお心が分からず、差し出がましいことを言つていいで御座いましたー。」

俺は、畳に額をこすり付け師匠に頭を下げた。

「はっはっは。よこよこ。それよりもその弟弟子達に稽古でもつけてやつてくれんか」

「はー。かしらまつました！ それでは、早速稽古をつけて来ますー。」

「うむ。よろしく頼む。しかしあまりじき過すぎるだないぞ。弟弟子をすべて叩きのめしてしまつては、たすがにお前に頼むしかなくなるのでな。はっはっは」

「ははっはー。」

俺は師匠の部屋からでて、また道場へと向かつた。
たすがは師匠だ。

俺も師匠の様な心を持つた立派な武士にならなくてはな……。

しかし道場へとたどりついた俺は我が目を疑つた。

「なんか、俺達の兄弟子に手を出すとか難癖つけてきたんでやつちやいましたよ?」

弟弟子達はすべて伍助に叩きのめされ、道場の床に転がっていたのだった。

> i 2 3 3 0 6 — 2 9 7 6 <

俺は弟弟子達を介抱した後、師匠の部屋へと戻り畳に額をめり込まず様にして頭を下げた。

師匠は、弟弟子達が全滅したのは俺の所為ではなく、いとも簡単に叩きのめされたあやつらの田頃の鍛錬が足りんのじや。と言つてはくれたが俺の連れである伍助がやつたのだから、やはり俺にも責任があるだろ?う。

俺は、やはりここには俺が代わりに道場破りと戦うしか無いと思いつめたが、許せないのは伍助だ。

勝手に人に付いて来たばかりか、俺の弟弟子達を叩きのめすとはー。

俺はそう思つて伍助をただではおкан! と追い掛け回したが、なんと師匠が止めに入った。

「いやいや。客人に先にくつてかかったのは弟子の方と聞いておる。その拳句叩きのめされたのならば自業自得と言つものじやろ?」

師匠にそう言われては俺も何も言えない。
やむを得ず伍助には「一度とするな!」と釘を刺すだけが精一杯
だった。

そして俺は今、道場で一人、型の稽古をしていた。
なにせ伍助が弟弟子をすべて倒してしまい、師匠も寝たきりなので練習相手すらろくに居ない。
だからと言って、伍助に相手させるのもなんか癪だしな。

相手の体のど真ん中、正中線を狙つての突き。

左右にぶれない完全なる真正面への攻撃に、相手は左右のどちらに避ければ良いのかと、一瞬反応が遅れる。

俺は、道場の壁に印をつけた板をかけ、その印に向かって竹刀で突きを繰り返した。

その稽古を繰り返す。稽古の積み重ねだけが、技の完成度を上げる。

ん?

稽古を続けていた俺は、道場の外に人の気配を感じた。
俺が振り返つて道場の入り口を見ると、妙齢の女性の姿が見えた。

「……おふみ」

そこには元カノのおふみが立っていた。

6. ハウス（前編）

今回ばかりはとめのめの。
六三郎とのパートナーもあつます。

「初めて知りましたわ～。泥でキレイになれるなんて…」「ほんとにねえ」

温泉宿の女中たちは口々に驚きの声を上げた。

「泥と言つてもそのまま使わないで、いつたん天日で乾かしてから油とト子の粉を混ぜるといいのよ」

2～3日前、部屋を担当してくれている仲居さん曰く、「お客さん、おきれいな上に肌ツヤツヤですねえ～。うわやましい限りですわ。何か特別なお手入れされてるんですか?」

と聞かれたことがきっかけで泥パックを紹介してあげたんだけど、それが宿中で話題になつたらしく、休憩時間には数人の女中相手に様々な美容法をレクチャーすることになつたの。

ま、いいんだけどね。これと言つてすることもないし。

「お一人は美容のために温泉巡りをされていると伺つたんですけど、もうあちこち行かれたんですね?」

「え……。ま、まあね」

アムランでは毎日の入浴が日課だったけど、温泉はなかつたのよね。

「どの温泉が一番良かつたですか?」

「下野の温泉はとても氣に入つたわ」

私はにっこりと笑つて答えた。（他の温泉にはまだ行ってないのよ）

「もうなんですか～。それは嬉しいですね。他にまだどんな温泉に行きましたか？」

「そ……そ……うね～。バラの花びらを浮かべたバラ風呂とか……。塩でマッサージあるお風呂とか」

「へえ～～バラ風呂～～」

女中たちは顔を見合わせて、しきりに感心してこるようだつた。

すると休憩時間もそれなり終わつらしく、女将の怒鳴り声が聞こえてきた。

「お前たち、いつまでおしゃべりしているんですか！　あんまりお密さんの邪魔するんじゃありませんよ～」

「は～～～い！」

女中たちは声をそろえて立ち上がつた。

「七重様ありがとうございました。たのしゅうございましたわ

「お礼に美味しいお菓子でも差し入れますね」

手には小分けした泥パックのサンプルをしつかりと持つて女中たちは仕事に戻つていつた。

「姫様、ジパングで化粧品の訪問販売でも始めるつもりですか？」
女中たちとのやりとりを苦々しい顔で見ていたアーニスが嫌味たつぶりに言つた。

「あら？　それもいいわね」

私は手のひらを打ち合わせて笑つた。

「全ての女性は美しくありたいものなのよ。アラビアだらうとジパングだらうと変わりはないわ。私の使命はジパングの女性に美の手ほどきをすることだったのかも……」

「はつきり言つてそれは逃避ですね」

アニスは腕組みをしながら手厳しい言い放つた。

「あのね」

きつとアニスを睨んだ。

「何が言いたいの？」

「姫様の本当の気持ちはどうなんですか？」

腕を組みながらも、少しだけ口調を穏やかにしてアニスが尋ねた。

……私の、本当の気持ち？

私はアニスに背を向けて座り、障子を開けて裏庭に咲くあじさいの花を眺めた。

青だつたり、ピンクだつたり、紫だつたり……、不思議な花ね。

私はどうしてここにいるのかしら？
私はどうしたいのかしら？

アムランに戻つても、一度六三郎の妻になつた私はもう結婚できない。したくもない。

じゃあ六三郎のもとに戻る？

いいえ。彼を許せない限り、戻ることはできない。

できない。したくない。できない。したくない。」ればかりで八方塞がり。

虹色の星は、箱の中でもだきりめにていたけれど……、私にはその意味は読み取れないまま……。

「私には、姫様はまだ六三郎さんが諦められなこようと思えます」

「……………ギリギリの細かいところをね？」

「やつやあ…………」

アニスは苦笑にして答えた。

「寝言で六三郎さんの名前を呼ぶ姫様を見たら誰だつてそう思います」

「ひー？」

寝……寝……私があいつの名前を呼んだのです……！」

ぐつと口蓋に詰まつて、私は思わず両手の拳を握り締めた。

円明かつの中、夏草の青い匂いに包まれて私は彼に尋ねた。

「INの先一生、私だけを愛すると言つて。」

六三郎は腕枕をしてくる左手で私を引寄せ、私の顔を見て言った。

「誓ひよ。母上のからだにかけて」

そして、壊れやすいものに触れるように私の髪をそっと撫でた。

「……他の女を愛したことはある?」

ちょっと驚いて、困ったような顔をして六三郎は言った。

「……なくはない」

「……やつ」

じゃあ私以外にもこんな風にしたのね……。

こんな風に抱きしめて、キスをして……髪に觸れたりしたのね。

「でも、妻にしたいと思ったのは七重だけだ」

月が雲に隠れて、彼の表情が見えなくなつた。

「私と他の女たちは何が違うの?」

「うーん……」

六三郎は唸つてしまふく黙り込んだ。

そんなに考えなきやわかんない違ひなの!?

「……上手く説明できなけれど」

数十秒たつてやっと口を開いた。

「全然違ひ」

「…………」

まったく説明になつてないんですけど……。

沈黙から私の不満が伝わったのか、六三郎はまたちょっと考へて付け足した。

「俺はずっと剣の道一筋できたけど」

「やつなの？」

「うん。正直剣の腕で一番になる」と、それで身を立てることが考えてなかつたな

月を隠す雲が流れて、夜空を見上げる六三郎の少年のよつな顔が見えた。

ジパングの男性はみんな「いつなのかしづか」。繻子のよつてなめらかな肌が月明かりに照らされる。

「こつかそういう俺をサポートしてくれるよつないい妻が欲しいと思つたけど……」

また私の方に顔を向けて目を細めた。

「今は逆なんだ」

「逆」

「うん。七重を幸せにするためにこの剣の腕を活かしたいと思つて
る」

「…………」

「そういう風に思つたのは初めてだから」

「…………うん」

「七重と他の女とは全然違う」

……イケメンのわりに不器用なのね。この人。そういうところが、
可愛くていいのかも知れないと。

アムランでは男は4人まで妻を持つことができたから、お母様亡
き後、お父様も2人の妻を娶つたわ。

さすがにシャルルカン王子がマハネと私を2人妻にすることはな
かつたでしょ？

私はそういう結婚は嫌だつたの！

私の夫は私だけのもの。
身も心もずっと私だけのものでいてくれないとダメなの。

それから数日旅をして、甲斐の国にたどり着いた私たちは、ここで大名に仕官しているという六三郎の兄弟子を訪ねたの。

「兄弟子、つてなあに?」

「俺と同じ道場の先輩だよ。昔一緒に修行してずいぶん稽古もつけてもらつた」

「じゃあ六三郎より強いの?」

「俺の方が強いけどね」

六三郎はにやっと笑つて言つた。

仕官先のお屋敷を訪ねてみると、兄弟子の多兵衛さんは町道場を運営しているらしく、その口もお弟子の指導中だったみたい。町道場の場所を聞いてみると、お屋敷のすぐ裏にあるとのことで、私たちはそのまま歩いて道場まで行くことにした。

道場は程無く見つかって、中を覗いてみると子供たち相手に剣の技を教えている多兵衛さんがいた。

「おお、六三郎か。久しいな? 息災か?」

六三郎より5~6歳は年上かしら? 日焼けした精悍な顔立ちで、イケメンではなかつたけどいかにも武道の達人っぽい感じ。

「お久しぶりです。多兵衛さんもお元気そひでなによりです」

挨拶を交わしてから、多兵衛さんの視線が私に向いた。

多兵衛さんは一瞬虚を衝かれたように黙つたが、すぐ我に返つて尋ねた。

「どちらの女性は？」

「妻の七重です」

「……結婚したのか！？」

「はい」

六三郎は照れ笑いを浮かべて頭を搔いた。

「すうじい美人の嫁さんじゃないか

「ええ……まあ。かたじけない」

「とにかくめでたい」

多兵衛さんは六三郎と私を交互に見ながら笑つた。

「積もる話もあるが今は仕事中でな。近所の茶屋でも待つててくれないか？　なに、あと半時ほどで稽古も終わる。終わつたら迎えに行くから休憩しておいてくれ」

と手を振つて稽古に戻つたので、私たちは言われるままに近所の茶屋に行くことにした。

お店と言つてもベンチ？　のようなものを置いただけの簡単な造りで、座るとお茶と緑色の丸い食べ物が出された。

「「れはなあ」」。

「草だんじだ。美味じよ」

恐る恐る齧つてみるとむちむちとした食感でほのかに甘い。

「琉球にはだんじはないのか？」

「「んな食べ物はなかつたわね〜」

「ふーん。どんな甘味があつたのかな?」

「アーモンドとザクロと砂糖で作つた甘いお菓子とか」

「なるほど。琉球はサトウキビが豊富にあると聞いた」とがあるからな。で、アーモンドについてのは?」

六三郎はずすとお茶をすすりながら聞いた。

「えーと、木の実の種よ。クルミみたいな

「不思議な取り合わせだなー」

「やうね。私にはこの草だんじ? が不思議だわ」

お茶も緑色で不思議な香り。

アムランではミントの葉を浮かべた紅茶に砂糖を入れて飲んでいたけど、ジパングではお茶に砂糖を入れる習慣はないみたい。

ふと気がつくと六三郎がなんだか嬉しそうに元気いっぱい。

「どうしたの？ そんなに」お菓子好きなの？」

もう一個食べる？ と私は自分の草だんごを差し出した。

「いやいや。やうじやなくって」

六三郎は笑いながら首を振った。

「こんな風にのんびり女の子とお茶を飲んだことはなかつたなーと思つて」

「やうなの？」

「うん。俺が住んでるといろも田舎だったし、周りにはほとんど男しかいなかつたからなー」

「私はいつも城……家を抜け出して町に出かけてたわ」

時にはアーネスをお供に連れて行くこともあつたわね。

ナツメのお菓子やシャーベットを買い食ひしたりした。

マハネに話すと、大人しいあの子にしては珍しく「王女にあるまじき振る舞い」と眉をひそめてたけど、あれはやめられなかつたわ〜。

「すういな、七重は」

六三郎は口を丸くして言った。

六三郎は、自分には3人のお姉さんがいるんだけど、みんなほとんど外に出かけることも無く、自分が小さい時に嫁に行つたんだと話した。

それからは両親が他界し、2人のお兄さんたちとも別れて、常陸国の道場で師匠の息子同様に修業するようになつたとも。

「だから女ってみんなほどんど家にいるもんだと思つてたな」

「うちもやつよ。姉はずっと城……家に閉じこもつしたもの」

私はふたつめの草だんごにかぶりついた。

結構豪快な食べっぷりだったので、六三郎は可笑しそうに笑つた。

「六三郎も、女はしとやかな方がいいと思つてるの？」

「いいや」

笑顔のまま首を振つた。

「一緒に野宿して、平氣で水浴びするような度胸のある女がいいな」

「……なつー？」

「あ、でも危険な」とはNGだぞ。またさらわれたら困るからな

「だからあれは私ひとりでも逃げられたんだってば」

私は口をとがらせて六三郎を睨んだ。

「七重もガソ」だなー」

私が本気になつたらあなただけってかなわないんだからね！

声には出さなかつたけど、心の中で六三郎に舌を出しておいた。

私がふたつめの草だんごを食べ終わつたころ、稽古を終えた多兵衛さんが迎えに来てくれて、3人で多兵衛さんの家に向かつた。

多兵衛さんは独身の一人暮らしだつたけど、結婚祝いだと黙つて心づくしの晩餐を用意してくれた。

いなり寿司という変わつた料理や葉物でできたピクルスのようなもの、焼き魚などが机に並んだ。

それからお酒も少しふるまつてくれた。

「多兵衛さんも早く奥さんもいらしましょうよ～～

どうやらお酒に強くないらしい六三郎はほんの一本飲んだだけで酔つ払つてしまつたらしく、さかんに多兵衛さんに絡んでいた。

「女は面倒でいけない。俺が落ち着くのはもう少し先でもいいだろう」

女の私を目の前にしてずいぶん無神経な発言だけど、どうやら多兵衛さんも酔つてきているみたい。

「俺は剣の道一筋よ～～

だんだんエスカレートしてきたのか徳利から直接お酒をぐびぐび飲みながら多兵衛さんが言つた。

「あ、俺もそりつたんすけどね～～

だめだわ……。六三郎、完全にわねつが回らなくなつてゐる。

「嫁さんごのといこれすよ～～。あんなこととも「こんな」ともできる
し～～」

「なに言つてんだお前は～～」

多兵衛さんの旦が据わつてきた。

……何？　ふたりとも下戸だつて言つの？？？

「ふつたるんじる～～！　稽古つけてやる。来い～～」

突然多兵衛さんが立ち上がりて玄関に向かつた。

「おっ。のむむとこりうだ～～～

六三郎も立ち上がりてふらふらと玄関に向かつて歩いていつた。

「ちよ～～、ふたりとも一、ざい行くのよ！？」

私も思わず立ち上がりてふたりの後を追いかけた。

「心配すんな～、ななえ～」

六三郎が私の肩をつかんで家の中に押し戻した。

「ななえは留守番だ～～」

「大丈夫ですよ～、奥さん。道場でひと勝負したら戻つてきますか
ら～～」

多兵衛さんも右手をぱらぱらと振りながら言つた。

「行つてぐるな～。にやにやえ～～」

ふらつきながら肩を組んで歩いていく男ふたりを複雑な心境で見
送つたわ。

道場は近いから、そこまでたどり着けないとこつこともなさそう
だけど……。

あんな状態で木刀を持つて怪我しないかしら？？？

私は六三郎が飲んでいたお酒を一口飲んでみた。

「あ、けつこう美味しいかも」

安心してぐびぐびぐびと飲んでみた。

「あ～～これ、いける～～」

と壇に出したとたん急にくらつと田の前が回りだした。
なになに？？これ、けつこう強いお酒なわけ？？
体に力が入らなくなつて、私はそのまま机の上に突つ伏した。

「……ちょっとだけ……。きゅうつけい～～」

意識が薄れて、どれくらい眠ってしまったのだろう？
目が覚めたときは外が真っ暗になつていて、ふたりが戻つてきて
いないことに気づいた。

さすがに心配になつてきて、私は道場まで様子を見に行くことに
した。

泥棒や追いはぎにあわなによつて家の周囲と道に入除けの結界を
張る。

これでみんなこの道を迂回して通ることになる。

道場の前まで行くと、中からうすら灯りが洩れているのが見えた。

あのふたり、あの状態で本当に稽古してるの？？

私は道場の引き戸を開けた。

わが田を疑うような光景が田の前に広がっていた。

六三郎が……多兵衛さんに覆いかぶさるよつて元にして激しいキスを交わしていたのだ――

アンビーバブル!!!!!!

「……と云ふことがあつたわけよ」

一気に話して喉が渴いた私は、用意されていたお茶を一息に飲み干し、ついでに側にあつたお茶菓子に手を伸ばした。

「な、なるほど……ですね」

アニスはなんとも言えない顔をして、また少し考え込んだ。

「あいつホモの氣があつたのよ。そもそもなんか怪しいと思つたのよね」

お茶菓子をひとつ口に放り込んだ。

「まあ……」

「2、3日前も水晶玉で様子を見てみたり、別の男どこかやついてたのよ」

もつひとつお茶菓子を口に入れた。

「うーーーん

「女は私だけでも、男なら何人でもいけるってわけ？　なめんじやないわよ」

3つ目のお茶菓子にかぶりついて一気に飲み込んだ。

「……太りますよ。姫様」

呆れたような目をしてアニスは言った。

「今日だけよ」

私はお茶でお菓子を喉の奥に流し込んで、ふうーっと息を吐いた。

「それに、私がかけた呪いが発動して、六三郎は女になっちゃってるしね～」

「ええつ！」

アニスは卓袱台を叩いて、身を乗り出した。

「なんでそんな呪いをかけたんですか、姫様！？」

「六三郎の浮氣封じのつもりだったのよ」

アニスは苦々しい表情で私を見た。

「……わかつてゐるわよ。結果的には男好きの六三郎の後押しちゃってるってことは」

「いえ、そういうことではなくって」

「なによ？」

「万が一それが全部姫様の勘違いだつたらどうするんですか？」

「現行犯逮捕なのに？」

「聞けば姫様酔つ払つてたんでしょう?」

「ま……確かに、家を出る前はちょっと酔つて眠りこけちゃつたけど

「ふたりを見たときはもう醉いが醒めてたのよ」

「自分の寝起きがどれだけ悪いかわかつてますか?」

「大丈夫よ。レム睡眠だつたから」

「は? 意味不明です。とにかく」

アニスは私の手をきつと見つめて言った。

「直接六三郎さんに確認してきてください。今後の身の振り方はそれから考えましょ?」

> . 1 2 3 5 7 4 — 2 9 7 6 <

「……六三郎さん。帰つてきていただならびにして言つてくれなかつたの？」

道場の入り口で、おふみは少し悲しげに俺を見つめていた。

おふみとは彼女からの強烈なアプローチで付き合い始めたのだが、俺が稽古に明け暮れあまり彼女にかまつてやれなくなつた為自然と疎遠になり、俺が仕官を求めて故郷を出る頃には自然消滅していた。

「……すまん。まず先に師匠に挨拶をと思つて道場に立ち寄つたら、色々と騒動が起つてな……」

「そう……。でも、久しぶりに故郷に戻つてきたんだから、挨拶に来ないなんてひどくないかしら？」

う！ 普通は、元カノに挨拶に行くものなのか？
おふみにしたつて別れた元カレになんて、会いたくないと思つて
いると、考えてたんだが……。

だが、俺が反応に困つていると、彼女は俺が申し訳なくて押し黙つたのだと解釈したのか、少し苦笑気味に笑つた。

「仕方ないわね……。六三郎さんは前からずっと剣一筋だったから
……」

「すまん……」

「聞いたんだけど、道場破りと戦つことになつたんですよつて。」

「ああ。やうだけど、そんな話じいで聞いたんだ？」

「えいひー……。村中その話でもちきつよ？ だつて小さこなにもない村だもの。何か変わつたことがあれば、すぐに広まつちやうわじられた。

確かにこには小さい村だ。

住んでいる者達も、代わり映えのない毎日と少しでも違つ事が起これば、瞬く間にその噂が村中を駆け巡る。

「やう言えばそつだつたな……」

「ええ。息が詰まりやつ」

おふみの言葉に俺は改めておふみを見つめたが、おふみは俺の視線に気付いたのか誤魔化す様に、少しだけとらしく明るい口調で口を開いた。

「とにかく、久しぶりに六三郎さんと会えてうれしかつたわ！ じやあ、稽古の邪魔をしちゃ悪いから、もう行へわね」

「こや、わざわざ会いに来てくれてあつがとう

「ひひん。じゃあ、またねー！」

おふみはそう言つて手を振り道場を後にした。

またね。
か
.....。

俺は頭を一振りすると、また稽古を始めた。

そして道場破りとの決戦の日。

俺は、道場破りと対峙し、ふたりの間に緊張が走る。

まつ返りでいる。

じくじちらの隙を窺つ。

を貫くだろ？……。

なんだこりや？

「ちゅうちゅー！」だと呟く見えぬわよー。」

だ
！
」

「六さん 相変わらずへ、ヒンたな」
「道場破りの子も、ワイルドでカツ」「いいじゃない」

「……おこ。いれはどひの壁へりとだ。」

俺は堪えかねて口を開くと、俺の前ににやつきながら立っている道場破りが「ククツ」と笑いを漏らした。

「お前らが、卑怯にも俺を袋叩きにしておいて、1対1で勝つたなどと言い出さぬ様に保険をかけたまでさ」

「ううか……。

これを狙つてわざわざ道場破りの予告なんでしたって訳か。

小さな村のことだ。

道場破りが来るともなればみんな見物に来る。

見物人が大勢居れば、こちらが袋叩きにしたくとも出来ないだろうって訳だな。

もちろん、はじめからそんなつもりは無かつたが、なかなか油断ならない奴だな。

しかも、こいつの師匠は戦で手柄を立てられず、俺の師匠が手柄を立てたのを逆恨みする程度の男と聞いていたので、その弟子という道場破りも大したことはないと思っていたが……。

何んまいや雰囲気からは、意外にもかなり腕が立ちそうだぞ。

道場破りは、ザンバラ髪に着物を着崩しているが、その機崩した着物の襟から着込み（鎖帷子）が見えている。

俺と同じ様に着込みを着ているのか……。

しかもこいつの師匠は俺の師匠と同じ合戦に出ていたんだ。

こいつの剣術も突きを主体とした実践剣術って訳なんだよな。

共に突きを主体として戦うというならリーチの差がかなり重要なのが……。
でかいな……。

弟弟子との身長差から推測すると、俺が男だった頃よりも少し大きいくらい。

つまり、女の体になつて背が縮んでいる今リーチの差はさう広がつているだらう。

しかも俺は女になり体が小さくなつた為、自分の間合いの目算が狂つている。

それに気付いて昼夜猛稽古をしたが、数日で長年の感覚を矯正できたとは言ひがたい。

これは存外、苦戦するかもしれないな。

俺は、改めて道場破りを睨んだ。

だが、俺が真剣にそう考えていると、俺達を取り囲む見物人の輪からどんでもない声が聞こえてきた。

「どうちに賭けるんだい？」

「やつぱり、ペッピンさんの方だらう。同郷のよしみもあるし」「いやいや。道場破りのあんちゃんも強そうだぞ。こいつあんちやんの方に賭けてみるか！」

おこおこ。賭けまで始まるのかよ……。と俺が考えていると……。

「兄弟子が勝つに決まつてゐるだろ！ 兄弟子に全部だ！」

おこお前り……。そしてわらひ。

「じゃあ、俺は俺が勝つほつに全財産だ」

道場破りはそう言つて、賭けの元締めいらしき男……つて伍助じやないか！ に自分の財布を放り投げた。

「こいつ等、馬鹿にしやがつて……。

「ふざけるのもいい加減にしろー。とつとと始めるぞー。」

「へいへい

道場破りは俺の怒号に、飘々と答えて、木刀を構えた。

道場破りが構えたのにあわせ俺も構える。

俺の全神経は奴に集中し、さっきまでうるさかつた見物人達の声が、嘘の様に耳から消える。

正眼の構え。

つまり木刀を自分の腰の辺りで握り切つ先を俺の喉元に向けるという、攻防どちらにも対応できる基本的な構えだ。

取りあえずこちらの様子を見る気だな。

俺はそれに対して脇に木刀を構えている。

防御には向かないが、この構えの利点は自分の腕と木刀を前に突き出す正眼の構えと違い、こちらの間合いが相手に悟られ難い事にある。

さつき対峙していた時も何気に木刀の端を5寸（約15cm）ほど着物の袖で隠し、俺が手にしている木刀が通常の物よりその5寸長い物である事を誤魔化していたのだ。

これで俺の間合いは道場破りとの間合いより2寸ほど広いはずだが、道場破りが俺の身長から俺の間合いを推測しているとすれば、その2寸が勝負を分ける。

だが、その誤魔化しも一度きり。

一度俺が突きに行けばそれでこちらの間合いはばれる。

俺はじわりじわりと、道場破りへの間合いを詰めて行った。
道場破りはまだ間合いの外だからと思つてゐるのか、相変わらず
飄々とした表情でまったく感情が読めない。

俺はさらににじり寄る。

俺の間合いで後、5寸。

4寸。
3寸。

あと少し！

だが唐突に道場破りが動く！ 奴の木刀が俺の体目掛けて伸びて
きた。

「つく！」

俺は反射的に身を左に捻りその攻撃をかわす。

……片手突きかよ。

奴は右手正眼の構えから左手を放し、体を捻りながら右手だけで
突いてきたのだ。

当然、体を捻る分間合いは広がる。

だが、体を捻りながらの突きは僅かながら俺の体の正中線からぶ
れ、その為俺は反射的にかわす事が出来た。

これが正中線に決まっていれば俺は動くことすら出来ず、棒立ち
のままやつの突きを食らつていただろう。

もつとも、片手突きで寸分ぶらず狙い打てる奴など、この日本
に何人居ることやら……。

しかし、これで俺の間合いの優位は失われた。

とはいえ、当然片手では威力は落ちる。

一刀流が邪道と言われるのは、片手では肉は切れても骨は断てないと考えられているからだ。

それは突きでも同じこと、いくら鎧武者には突きが有効とは言え、片手突きでは鎧を突き破るのは難しい。

最近よく噂になっている宮本某という一刀流の剣豪がいるが、その剣豪は人並みはずれた臂力『怪力』を持っていると聞いている。

俺は足を後ろに運び、奴から間合いを取つた。

そして、首元の汗を拭うふりをして、俺も着込みを着ていることを何気に道場破りに見せ付けた。

すると飄々としていた道場破りが破顔した。

「あつははは！　あんた面白いな。そおいやー。まだ名前も名乗つていなかつたな。新九郎つて言つんだ」

「……六三郎だ」

「へー。六三郎つて言つんだ」

道場破り……新九郎はそう言つと、正眼の構えではなくあからさまに木刀を右手だけで持ち、そして右手を大きく後ろに引いた。右の片手突きをしますよ。って言うところか？　いや、右手一本で着込みを突き破りますよって言いたいのか。

ふー。結構やばい戦いになりそうだな。

俺は、再度奴との間合いを詰めに入つた。

だが俺が奴の間合いに入る前に、やつの方から一歩踏み込み間合いを詰めてきた。

奴の片手突きが俺を襲う。

俺はすんでのところでの突きをかわした。

そして一回間合いを取つてから再度、間合いを詰める。そして再度の奴からの突き。それも身をかわす。

俺は神経を集中させ、何度も奴の突きをかわした。

そして次第に、飄々としていた新九郎の表情が険しくなっていく。何度もやつても突きが俺に当たらない事にイラついてきているのだ。

それに対しても俺はにやりと笑つて見せた。

実は、俺の背中は冷や汗でびっしょりと濡れていたのだが、あえて余裕がある演技をした。

そう、突きが届くといつ事と当たるといつ事は別なんだよ。当たなければもつと踏み込め。と挑発したのだ。

俺は改めて奴との間合いを詰め始めた。

俺の間合いままであと5寸。4寸。

そして3寸。ここが奴の間合いのはずだ。だが新九郎は動かない。

2寸。

1寸。

……俺の間合いに入った。

だが俺もまだ仕掛けない。

さらに1寸近づく。

もう1寸近づく。

後1寸。

1寸。

そしてさらに俺が間合いを詰めようとしたその瞬間！ やつの右手が動いた。

俺は、身を捩りかわそうとしたが、奴の木刀は俺のわき腹を貫く。だが俺の木刀も奴の胸部を突いていた。

時が止まったかのように俺と奴はお互いの体に木刀を突きつけたまま対峙していたが、不意に奴が倒れる。

奴はよつほどごつい着込みを着ていたようで、女になつた俺の力では奴の着込みを貫くことは出来なかつたが、それでも奴の胸骨にひびを入れさせる事ぐらいは出来たようだ。

そして奴の木刀は俺の着込みを見事に貫いていた。俺の体に巻いた大量のサラシと共に。

男の体のままだつたら相打ちだつたか？ いや、男の体だつたらまた違う戦い方になつていて。考へても仕方がないか。

しかし紙一重だつた。奴が仕掛けるタイミングは読めていたにも拘らず、それでも脇腹を貫かれるとは……。

そう俺は、奴があのタイミングで仕掛けてくると讀んでいた。

俺は木刀の長さを5寸誤魔化していた。奴は俺の間合いで後1寸あると思つていたはずだ。

いくら自分の間合いよりもっと踏み込む必要があると言つても、俺の間合いに入るまで踏み込む必要はない。俺の間合いのギリギリ外で仕掛けねばいい。

それでダメだつたらその時には、俺の間合いにまで踏み込めばよいのであって、はじめから冒險をする必要はないのだ。

そして勝つたと思って気が緩んだ瞬間、俺の耳に大歎声が聞こえてきた。奴に集中していた神経が解放されたのだ。

「やつたなベッピンの兄ちゃん！」

「あんたに賭けてよかつたよ！」

「なんで、腹から木刀を生やしてて平氣なんだい！？」

もうちょっと、感動的な声援を贈つてもられないものかな……。
俺が不満げに見物人達を見回していると、不意に女性の声が聞こえた。

「六三郎さん！ 素敵よ！」

おー、やつやつやつ称賛を。と俺が声のする方向を見ると……。

おふみ……。

そこには俺に向かつて手を振るおふみの姿があつた。
だが笑顔を贈つてくるおふみにどう返そうかと困惑つていて、
弟弟子達が俺に抱きついてきた。

「兄弟子！ やりましたね！」

「あいつの木刀が刺さつてますが大丈夫なのですか？」

「ああ。大丈夫だ。ギリギリ着込みだけ貫かれただけだからな」

「ギリギリつていう感じではなさそうですが……」

俺の言葉に、弟弟子達は怪訝そうに首を傾げながらそう言った。
実際俺の胴はサラシを何重にもまいてかなり太さを水増ししている。
奴の木刀はそのサラシを貫いてるのだが、はたから見れば思いつきり俺の腹部を貫通している様に見えるのだ。

「だつ大丈夫だ！ それよりも師匠に報告してくるー！」

俺はそう言つと、脇に刺さつた木刀を抜いて逃げるように道場を後にした。

そして師匠の部屋へと向かつたが、足早に歩いていふうちに木刀に貫かれたサラシがほどけてしまつた為、途中にある空いている部屋へと滑り込んだ。

改めてサラシを巻きなおす為だ。

着込みを脱いで、一旦サラシを全部とつてと……。結構面倒なんだよな。

っち！ あいつに貫かれた所為で、サラシが途中で切れちまつている。

俺は上半身裸のまま、切れたサラシを結び合わせて改めて一本にしていた。

「おお。六三郎ここに居たか！ 見事道場破りをやつつけたらいいな！」

不意に師匠がふすまを開け、飛び込んできた。腰痛はどうなったんだ？

だが今はそんな事より、師匠に俺が女の身体だとばれた事だ。

師匠はしづらへ然と俺を見つめていたが、ポツリと呟いた。

「こつの間に、そんなにええ乳になつたんじゃ」

「いえ。 じつこれは……」

「旦那がそんなええ乳では、嫁も逃げるじゃ わつな……」

「……」

その後、やうに弟子達もやつてきて大騒ぎになつた。

「俺は両方行けます！」

「俺は兄弟子が女でも気にしません！」

「姉さん女房は、金の草鞋を履いてでも探せといいますしー。」

「馬鹿野郎！ お前らは男でも良いんだろうが！ 女の兄弟子は俺に譲つて、お前らは違う男の兄弟子を探せ！」

「おお前ら……。伍助……。

仕方がないので、俺は師匠および弟子達に、こきそつを洗いざら喋ると、師匠は、さすがに驚いていたが、実際俺の身体が女になつている以上信じるしかない。

道場破りを倒したさつきまでの浮かれた気分も吹き飛んでしまい、みなあまりの事に押し黙っている。

「とにかく、今日はもう疲れたであろう。わしも少し混乱してある。みなも今日はもう休みなさい」

師匠は俺たちにそつと、俺達も素直に下がった。

実際、道場破りとの戦いは長い時間ではなかつたが、全神経を集中させ身体にも緊張が張りつめていた結果、俺の身体は泥の様に重くすぐに躍りに付いた。

俺は七重の夢を見ていた。

「おお、七重！ 探したぞ！ 会いたかった！」

「六三郎！ 私も会いたかったわ！」

「どこに行つてたんだ？」

「それが、悪い魔物に連れさらわれていたの……。でも、隙をついて逃げ出してきたわ」

「そうか。それはよかつた。

「六三郎の身体が女になつたのもその魔物の所為だつたんだけど、私がその魔法も解いておいたわ」

俺が自分の体を見下ろすと何故か着物を身に着けておらず、俺の首から下には男の身体が見て取れた。

「おお、男に戻つている！」

そして顔を上げて改めて七重を見ると……、七重も着物を身に着けておらず裸だった。

……七重。

「……六三郎

俺達は強く抱き合つた。

久しぶりのやわらかい七重の身体を抱いて……。硬い？

俺は怪訝に思つたが、七重はかまわず俺の首筋に吸い付いてきた。

あれ？ 七重つてこんなに積極的だったか？

そして七重が俺の名を呟く。

「お六……

お六？

「誰がお六だ！？」

俺が目を覚ました。目の前には果たして伍助がいた。

「いやー。今日は疲れてぐっすりと寝ているかなー。ひとつ伍助はそう言いつながら、俺の身体の上で頭を搔いている。うまで移動すると、刀を手に取った。

「てめー。伍助！」

俺は伍助を突き飛ばして転がりながら自分の刀を置いてあるところまで移動すると、刀を手に取つた。

「いやー。そこまでマジにならんでも」

「うるさいー。」「

実際、伍助が俺の事を「お六」なんて呼んでなければ、今日のはやばかったんだぞ……。

「兄弟子！ 今の叫び声はいかがしたのですか！？」
ふすまを勢いよく開けた弟弟子達が部屋に雪崩れ込んできた。

「お前！ 僕達を差し置いて何やつてんだ！」

「つるせえ！ 早いもん勝ちなんだよ！」

「なんだと！ あ。兄弟子！」

「うわ！」

不意を付かれた俺は一瞬反応が遅れたが、すんでのとこで身をかわした。

なんと、伍助の言葉を真に受けたのか、弟弟子の一人が、じゃあ俺が一番に！ とでも言つのか、俺に飛び掛ってきたのだ。

「お前らいい度胸じやねえか！ まとめてかかってこいやー！」

俺が伍助と弟弟子達に叫ぶと、奴らは俺に飛び掛ってきた。
俺は飛び掛つてくる奴らを鞘に収めたままの刀で迎撃する。
そして夜はさらに更けていった。

ビスミラー。

彼が情欲を持つて私以外の者に触れるとき、彼の肉体を女と変化せしめん。

私は彼の心臓が脈打つ左胸にくちづけて唱えた。
これで六三郎は私以外の女を愛することはできない。

「……それにしても、六三郎にホモの氣があつたとは誤算だつたわ
ね」

夜明け前の空を絨毯で飛行しながら私は呟いた。

もうすぐ夜の闇がラピスラズリの色彩に変わり、やがて日が昇る
とき世界はしばらく白く柔らかな光に包まれる。

私が一番好きな時間。

アムランにいるときも、いつそり城を抜け出して朝の空気を楽し
んだわね。

残念ながら、今絨毯で飛んでいられるのは夜が明けるまでだけど。

「直接六三郎さんに確認してきてください」

とアーニスに言われて、仕方なく六三郎に会いに行くことになった
私。

そんなこと言われたって、既に魔法が発動してるんだから、それ
が何よりの証拠じゃない？

……だけど、もし何かの間違いだったら？

(だけど、六三郎は多兵衛さんにしつかりしがみついてキスしてたのに?)

……だけど、酔っ払ってた私の見間違いだったら?

(だけど、水晶で見たときも別の男といちやついてたわよね?)

「へへへん。考えるほど混乱してきたわ。

「七重を幸せにするためにこの剣の腕を活かしたいと思つて」

「そういう風に思つたのは初めてだから」

と言つた、あの夜の彼の言葉を信じたいけど……。

私は六三郎の道場があると思われる村の少し手前の人気の無い森に降り立つた。

どうやら私の姿はジパングではかなり人目を引くことがわかつていたので、地味な村娘に見えるように魔法で変装することにした。いつもこいつときは美人過ぎるのも苦労するわね。

村に向かってしばらく歩くと、早朝から野良仕事に出てきたらしいおじさんに出会つた。

あ、あの人聞いてみようっと。

「すみません。少し尋ねたいのですが……」

「おじようちやん見ない顔だね。何の用だい?」

小さな村にはよそ者というだけで珍しいのか、おじさんは上から下までジロジロと私を見ながら言つた。

これでも、ずいぶん地味に変身したんだけど……。

「六三郎という人がいる道場を教えてもらいたいんです」

「六三郎つてことと、あのべっぴんのお兄ちゃんかい？」
べっぴんのお兄ちゃん……。確かに。

「はー。やつだと思こます」

「その道場な『い』の田んぼの一本道を歩いて右側にある丘の上の神社の裏にあるよ」

「あつがといじれこまか」

お札を書いて立ち去るといふと

「しかし、あんたもむづびここときに来たね」

とおじさんは頷きながら笑った。

「え？」

「今日はやの六さんと道場破りの果し合いであるんだよ」

「ええつー？」

果し合ーー？

「な、なんの果し合いでですか？」

「そりや道場の看板をかけての果し合いだらうなあ」

何を当たり前のことを聞いているんだばかりにおじさんは苦笑
いをして答えた。

「六三郎が……、いえ、六三郎さんが戦うのですか？」

「やつ聞いてるよ。なんせあの道場の一番弟子は六さんだからねえ」

そんなことになっていたなんて知らなかつたわ。

二二二、三日、六三郎のことは考えまいとして水晶も見ていいなかつたものね。

「じいじ、あんたよく見るとべっぴんさんだねえ。六さんとはど

「うこうう関係なんだい？」

話しているうちに私の美貌に気づいたらしく、にわかに私と六三郎の関係に興味を持つたらしいおじさんが尋ねてきた。

「うへへん。ここで『妻です』というのもなんだしね。

……第一、彼が女になった今、そして他の男と関係を持った今、妻でいるのかどうかも疑問だしね……。

「旅の途中に危ないところを助けてもらつたんです」

「ほおお～～。そうなのかい。で、いったいどんな危ない田川!?」
興味津々という風に田川を輝かせておじさんが迫ってきた。

……まあい。面倒なことになつてきましたわよ。

「めんどくさいので、私のこと忘れてしまいなさい！」

おじさんの田川の前で両手を打ち鳴らし、おじさんガ呆然と意識を喪失しているあいだにこそそくひとその場を立ち去つた。

さつといへこつこつとはすぐ村中の噂になつたりするんだわ。
後々のことを考えても私の痕跡は残さない方が良さそうね。

しばらく歩くと右手に小さな神社が見えてきて、その裏にまわると古びた道場が建っていた。

「こゝが六三郎の道場ね……。

多兵衛さんの道場と比べると大きいけど、老朽化が進んでいて今にも倒れそうだわ……。

近づいていくと、神社と道場の間に小さな雑木林があつて、そこで一心に素振りをしている剣士がいるのに気づいた。

……六三郎。

稽古に集中しているのだろう。遠くにいる私の気配までは気づかない。

ずいぶんと……小さくなつたのね。
もともと細身だったけど、男性にしては華奢としか言いようがない（女性なんだからしううがないけど）。
こんな体で勝てるの？

六三郎は敵を倒すことだけを考えていた、彼の中にはその「いつぱいなんだ」ということがその横顔からわかつた。

彼の心の中は私以外のものでいっぱいだわ……。今日だけじゃなくて、あつと、いつも。

私の事だけで六三郎の中をいつぱいにできればいいの……。

六三郎と話すのは果し合ことやらが終わつてからにしよう。
今、私たちの話を持ち出して六三郎の心をかき乱すべきじゃないし、私も姿を隠しておいた方がいいわね。

私は魔法で姿を少年に変え、六三郎に自分の存在を気取られぬようにしてその場を立ち去った。

日が高くなつてくるとたくさんの方たちが集まつてきて、にわかに道場は賑やかになつた。

まあ、田舎の小さな村だし、これといった娯楽もなさそうだし、村でよそ者との決闘があるとなればみんな見物に来るわよね。ゴザを敷いてすっかり観戦モードな人たちもいるし、なんだか場違いにおしゃれした村娘たちのグループもいる。

……もしかして、六三郎ファンの女の子たち?????

「やつぱイケメンよね。六三郎さん」

「昨日会いに行つたんでしょ？ おふみ」

「会いに行つた」という言葉に反応し、私はおふみと呼ばれた村娘を田で追つた。

「うん。ちょっとだけだけだけどね」

髪を結い上げて赤い櫛を挿したなかなかの美人だ。たとえて言うなら「野に咲く一輪の花のよつな」感じ。

「何話したのよ？」

「挨拶程度よ。彼は稽古中だつたし」

稽古中にわざわざ会いに行つて話すなんてどういう関係よ？

「久々の再会よね？ 彼なんて言つてたの？」

「別に……。会いにきてくれてありがとうって」

おふみは肩をくめた。

「焼けぼっくいに火がつく」とはないの？

隣に立つていた娘がおどけて言つた。

焼けぼっくい？？

「わからないわね。彼、今は今日の試合のことで頭がいっぱいみたいだし」

氣のせいかしら？ 彼女はやけに熱っぽい目で六三郎を見つめている気がする。

「よりを戻したとしても前みたいにずっとほつたらかじこされてたんじゃ淋しいしね」

よりを戻す？？

つまりこうこう」と？

おふみつて人は六三郎の元恋人だった。

で、再会した今復活愛を狙っているというわけ？

ああ、この人が六三郎が元愛した人なんだわ……と思うと複雑な気持ちだけど、今の六三郎の体のことを思うとなんとなく笑いが込み上げてきそうでもある。

しかも、六三郎の同性愛嗜好をこの人知ってるのかしら？ （まあ、これは保留なんだけどね）

そういうしてくるうちに六三郎の対戦相手らしき男性が現れた。

筋骨逞しい、多兵衛さんと同じタイプのいかにも剣豪っぽい大柄な男性だ。

美形でもハンサムでもないけど、不敵な笑みを浮かべたその顔は不思議に少年っぽくて魅力を感じさせた。

大きいやんちゃ坊主みたいね。乱暴だけど、女性にモテそうなタイプ。

「おお、いかにも強そうな兄ちゃんだな」

「六三郎、負けんなよー。」

六三郎は対戦相手の男と何か一言二言交わし、憮然とした表情で口をつぐんだ。

何かを考え込んでいるように見える。

……大丈夫?

私は自分の頭の中を探るよつて思考した。

六三郎が負けるという兆候は感じない。

私の直感を信じるならこの勝負は六三郎の勝ちだろ。

ただ、六三郎はハンデを背負っている。

私がかけた呪いのせいでの体力的には男のときと回り……という訳にはいかないはずだわ。

無傷で勝つのは難しいかも知れない……。

魔法で……六三郎を助けることは、できればしたくない。

真剣勝負なんだから、私の出る幕じゃないもの。

でも……もう、怪我だけはして欲しくない。

初めて彼に抱かれた日、きれいな肌にいくつもの傷跡があつた。痛そうで、可哀想で、私の胸が痛くなつた。

「平気だよ」と六三郎は笑っていたけれど……。

「兄ちゃんも一口どうだい?」

考えてみると、ふいに男の声が耳元で聞こえた。

振り向くと……

「あ！」

「ん？ どうした？ ギャンブルには興味ないかい？」

にやにや笑いながら立っているこの男は……。

あの、水晶玉に映っていた六三郎の愛人！？

「ギャンブル？」

「地元のアイドル六三郎が勝つか、挑戦者の道場破りが勝つか」

……この男。自分の恋人を金儲けの道具にしてるの？

呆れてしまつたけど、情報がもらえるかも知れないと思つて聞いてみた。

「……オッズはどうなつてるんだい？」

「お。いい質問だね。今のところ六三郎1・5倍。道場破り2・3倍だよ」

なるほど。みんな六三郎が圧勝だとは思つてないみたいね。

「何やつてんだ！ 伍助！」

六三郎が男をぎりりと男を睨んだ。

伍助と呼ばれた男は「へへ」とでもいうように頭を搔いた。ふーん。伍助っていうのね。この人。

私は銀貨一枚投げた。

「六三郎に一口」

「まいど」

伍助はにやりと笑つて銀貨を受け取った。

私に背を向けて別の客を捕まえようとした伍助を追いかけよう
に質問を投げた。

「あなたさ

伍助は振り向いて首を傾げた。

「なんだい？」

「六三郎とやうどびつこいつ関係？」

「おっ。ばれちまつたかい？」

笑いながら伍助は親指を立てた。

「コレだよ。コレ」

「……なんだ？　コレって？」

私は同じように親指を立てて顔をしかめた。（アムランには「んなゼスチャーはなかつたのよね～）

「コレと言つたら決まつてるでしょーが！？」

伍助は呆れて肩を落とした。

「彼氏だよ」

「ほんとに？　男同士で？」

わざとちゅうと驚いてみせた。

するとまたにやつと笑つて伍助は言つた。

「兄ちゃんにはそう見えるんだろうな」

「どういう意味？」

「これ以上は俺の口からは言えねえな」

伍助はひらひらと手を振りながら、「じゃな」と言つて去つていつた。

つまり六三郎が女だと、あの男は知ってるのね。

まあ、どう考へてもその方がノーマルなんだけど。

はつきり「彼氏」と言われたのに、なんだかまだ釈然としないものが残っている。

きつと六三郎本人に確認してないからなのね。

試合が終わったら……きちんと確かめて、何もかもすつきりしよ

う。

それからしばらくして、

「とつとと始めるぞ!」

という六三郎の怒鳴り声がして、場内はしーんと静まり返った。

いよいよ始まるのね。

私も観客も固唾を飲んで六三郎と挑戦者を見守った。

ふたりは睨み合い、しつかりと木刀を構える。

向かい合つふたりを見ると。改めて体格の差がわかる。

身長は、100cmは違うだろう。

体重は……20kgぐらいは違うかも知れない……。

この差が、きつとそのまま力の差になるのね。

じれつたいほどにゅっくりとふたりの距離が縮まっていく。

ふいに挑戦者の方からの先制攻撃。

片手で軽々と木刀を持って六三郎の胸を突こうとする。あつといつ間のすばやい動き。

私は思わず自分の胸元を手で押された。

きわどいところで六三郎はひらりと攻撃をかわした。そして挑戦者から距離をとると首筋の汗をぬぐった。

場内のあちこちから安堵と感嘆のため息が洩れる。

挑戦者は余裕綽々といった様子で笑いながら六三郎に話しかけている。

表情を変えずに答える六三郎。

そして、六三郎は再び挑戦者ににじり寄る。

六三郎の方から仕掛けしていくように見えたそのとき、またしても挑戦者の突きが六三郎を襲つた。

また、それを危うくかわす。

それからの攻撃は全て挑戦者からの突きで、六三郎はそれらをかわすので精一杯のように見えた。

八一 23714 — 2976 ←

けれども、徐々にふたりの表情が変わってきていたことに気づいた。

六三郎は相手を挑発するように薄笑いを浮かべている。
「突けるもんなら突いてみな」と言つてゐるかのようだ。

対して当てが外れた挑戦者の表情には焦りが見えてきている。

胸が……どきどきする。

魔法のような六三郎の動きから目が離せない。

再びふたりは木刀を構え向かい合つた。

少しずつ挑戦者に近づいていく六三郎。

今度こそ……六三郎からの攻撃？

あつと思つた瞬間に六三郎の木刀がすばやく相手の胸を突いていた。

表現しようのない鈍い音が響く。

場内からわあつと歓声が上がって、「決まつた！」と思つたけれど、相手の木刀も六三郎の脇腹を貫いていた。

……六三郎！！

思わず駆け寄りそうになる。

でも、次の瞬間に崩れ落ちたのは挑戦者の方だった。

拍手喝采に包まれながら、六三郎ははつと我に返つたようだつた。ん？？？ 体に……木刀が刺さつているのに平然としてる？？？

「六三郎さん、素敵よ！」といつ黄色い声がして、声の主を見るとおふみというさつきの村娘が手を振りながら笑っていた。

六三郎はおふみを振り返りながらなんともいえない複雑な表情をしている。

どう反応するのだろ？と思つてゐるうちに、道着を来た少年たちがわらわらと六三郎を取り囲んでいった。

怪我はないの？ 大丈夫なの？

なんとか近づいて確認できないかと思つてみると、六三郎が体に刺さつた木刀を抜いて床に投げ捨てた。

そして、そのまま人々を搔き分けてだーと道場から走り去つていつた。

……破れたキモノから白い包帯のよつたな布がはみ出てたよつた……

……？？？？

チャンス！ とばかりに六三郎の後を追おつと出口へ向かつて足を踏み出したけど、がしつと男の腕に肩を掴まれた。

「兄ちゃんおめでとひ。」れあんたの配当な。手数料として一割はもらつといだせ」

伍助が笑みを浮かべながら何枚かの硬貨を差し出していた。

「あんたの……コレ、大丈夫なのか？ 木刀刺さつてたみたいだけど」

私は硬貨を受け取り、親指を立てながら聞いた。

「いやいや。コレは俺。あれはコレ」

伍助は親指を立ててその先を自分に向けるように振り、次に小指を立てて見せた。

「コレ？」

今度は小指かいつ！

「コレは「彼女」って意味。兄ちゃんおぼこいねえまいつたなー」というように伍助は苦笑した。

「それはどうでもいいんだけど……。あの人、大丈夫なのか？」

「うんうん。大丈夫。お六さんは着物の下に鎖帷子着てる上に、更にその下にサラシぐるぐる巻きにしてるから。見たところじゃあ、何枚かのサラシめくつたぐらいだな、あれは。道場破りの方は骨にヒビぐらいいつてんだろ？」

「そうなの？？」

「おうよ。だから心配いらねえってわけ。じゃ、おめでとさん

伍助は私の頭をポンと叩いてその場を離れた。

そう……。女になつたわりにはウエストもないし、やけにすん胴

だと思つたら、男に見せかけるためにサランシを巻いてたのね。

私はほつとため息をついた。

怪我がなくてよかつた……。

夜になつて人気が引いたら、六三郎に会いに行こう。

そして、確かめなきや。

多兵衛さんとのキスのこと。伍助との関係。それから……おふみつて女のことも……。

すっかりと夜も更けて、道場の面々はみんなぐっすり眠っているようだつた。

私は足音と気配を消しながら少しつつ六三郎が眠つているであります部屋に向かつた。

若く健康そうな寝息やこびきがあちひらひらの部屋の中から聞こえてくる。

……それにしても……男臭つ！

道場の木材の匂いとかび臭い匂い、そして汗の匂いなどがもわっと襲つてくる。

私は鼻から口にかけてを右手で押され、鼻で息をしなによじながら歩いた。

そして、六三郎の部屋の前に着くと変身魔法を解き、こつもの自分自身の姿に戻った。

手鏡を取り出して髪の乱れや肌に汚れがなどをチヨックする。（女子なんだもの。当然でしょ！）

髪を整えてキモノの崩れを直してから、音がしないよフスマと呼ばれるジパングの引き戸をそつと開ける。

そこで、私が目にしたものは……。

なに……これ？

行灯と呼ばれるジパングのランプの薄明かりの下で、六三郎がガシッと伍助を抱きしめる姿が見えた。

布団の上で……もつれ合いつゝに抱き合つぶたり……。

伍助が六三郎の首筋に吸い付くよつて顔を埋める。

六三郎は左手で伍助の背中を抱き、右手で伍助の頭を優しく愛撫している。

うぐつ。

……吐き氣が……、込み上げてきたわ……。

容赦ない悪臭と、それに……目の前で繰り広げられている氣色の悪い光景に……。私、耐えられない……！

匂いとふたりのあえぎ声と……水晶で見るのとは違う、あまりの生々しさが衝撃的だった。

気がつくと、私は絨毯に乗って夜空に浮かんでいた。

あの光景を直視するのに耐えられず、無我夢中で逃げ出していたみたい……。

ふたりが抱き合っている鮮明な映像と胸のムカムカがこびりついていて、とにかく混乱していた。

あれは、やつぱりそういうことよね？

私の疑惑は、単なる勘違いではなくって現実……つすことよね？
……という」とは?????

「……明日考えましょ」

そう呟くと、呆然とした状態のまま、私はアーネスの待つ宿に向けて絨毯を飛ばした。

「まつたく昨日は散々だったな……」

俺は昨日の騒動について愚痴をこぼしながら、道場の横にある井戸の傍で洗濯をしていた。

以前だったら洗濯なんか弟弟子にやらせていたのだが、俺の身体を狙っていると思うと洗濯させる氣にもならなかつたのだ。

すると背後に人の気配を感じた。特に殺氣も感じないので弟弟子の誰かと思っていたら、「……六三郎さん」と女の声で名を呼ばれた。振り返ると、おふみが立っていた。

「おふみ……」

うーん。

元カノと何度も顔をあわすのもなにやらへんな気分だな……。

だがおふみはそんな事は気にも留めていないようで、笑顔でさらに俺に近づいてきた。

「昨日はおめでとう。すぐに言ひたかったんだけど、六三郎さん奥に入つて行つちゃつてたし」

「そうだったな」

「それ洗濯物?」

「ああ」

「私が洗つてあげるわ」

おふみはそつぱつと近づいてきて俺から洗濯物を取り上げてしまい、じやぶじやぶと洗濯を始める。そして洗濯物に視線を落としたまま問い合わせてきた。

「仕事は上手くこなてるの？」

「いや……それがなかなか」

「やつか。でも六三郎さんなら仕官先なんてすぐに見つかるわよ」

「ああ。ありがと」

「へん。どうもおふみのペースだな。

「食事とかはどちらがいいの？」

「まあ、適当にやつてあるよ」

「でも、一人じゃ大変でしょ？」

「いや、実は連れが居るんだ。昨日道場破りと戦った時、賭けをしてた奴分かるかな？　あいつと一緒に繕なんだ」

「やうなんだ……。どうぞ知り合つたの？」

「確か武蔵野国の方だったかな……。実はあいつ抜け忍らしいんだけど、ちょうど追っ手に追われているところに俺が出くわして、たまたま助けたみたいになつたら、なんか恩返しとか言つてついて来てるんだ」

本当は俺の身体担当なんだが、それはさすがにおふみには言え

ないな。

「そりなんだ。でも男の人だけじゃ大変よね？」

もしかして……。おふみは俺について来たいのか？

「いや……意外と何とかなってるよ。男だけだと野宿でもかまわないしな」

「わ、う……」

残念そうだな。やつぱり俺について来たいみたいだ。そういうえば昨日も小さな村でうんざりみたいな事を言ってたつて。これはすっぱりと早めに諦めさせた方が、おふみのためか……。

「おふみ……実は俺嫁を貰つたんだ」

「ええ！ 誰なの！？ 私の知つてる人？」

洗濯をする手を止めて、おふみは目を大きく見開いて俺を見た。

「いや……。旅先で知り合つたんだ」

「そりなの……。で、その人は……どこのいるの？」

あ。いきなり痛いところをついて來た。

「いや、それが今どこに居るかは分からんんだけど……」

「ど、ど、ど、ど？」

おふみは怪訝そうに俺を見上げた。

「それが……朝起きたら姿が見えなくなつてたんだ」

そう。多兵衛さんの道場で酔っ払つてそのまま朝まで眠つてしまい、目を覚ますと慌てて家に戻つたが、七重はいなくなつていた。
……しかも、俺の体が女になつてしまつているというオプションつきで……。

「何の前触れもなく？」

「ああ……」

俺は頷いた。

どうして七重がいなくなつたのか、今でも皆田検討もつかない。

おふみは再び洗濯物に視線を落として呟いた。

「やつ……。私だったら逃げたりしないのに……」

……痛い。痛すぎる。おふみ。

「いや！ 逃げられたのではない！ 何故か姿を消したのだ！」

だが全力で否定する俺に、おふみは氣の毒そうな視線を投げかけてくる。

まったく師匠といいどうしてみんな七重が逃げたと決め付けるんだ！

「とにかく、俺にはすでに妻が居るのだ。おふみ、もし俺について来る気だったのなら、すまないがすっぱりと諦めてくれ」

だが、俺の言葉におふみは眉をひそめて疑わしそうな表情を浮か

べた。

「奥さんって本当に困るの？」

もしかして、おふみを連れて行きたくないばかりに俺が嘘をついてこむと思つてゐるのか？

「いやいや。本当に困るんだ」

「じゃあ、連れてきてよ」

「だから姿を消したんだって」

「じゃあ、困なこのと一緒じゃなーーー。」

おふみさじまでも食こ下がつた。

つ。これじや話が堂々巡りか。

「とにかく、お前を連れて行くわけにはいかないんだーーー。」

「私は諦めないからねーーー。」

おふみは俺の洗濯物を桶に呑もつたあと、足早に立ち去つてしまつた。

何なんだ？ おふみの奴。

昔からマイペースな女だったが、いへりなんでも強引過ぎるだらう！？

……しかしあの分じや、なかなか諦めてくれやうに無いな。

まつたくどうしたものか……。

俺は仕方がない、また洗濯物を洗う為に桶へと向かつた。

その後朝飯を食つてさらに田も昇つた頃、他に相談する相手もないでので、やむを得ず俺はおふみの事を伍助に相談することにした。道場から少し離れた林に伍助を引っ張つて、おふみといふ元カノがいること、その元カノにしつこく迫られていることなど一通り状況を説明し、

「おふみを諦めさすにはどうしたらいいと思つ?」「聞いてみたのだが……。

「俺が頂いちまいましょうか?」

「…………死ね」

「冗談つす。俺は六さん一筋つすよ!」

「…………死ね」

ダメだ。やつぱりこいつに相談しても意味なかつたか……。
だが実際どうしたものかな。いくら嫁が居るといつても信じない
し……。

「ふ。お困りのようだな

俺と伍助が同時に声がする方を向いた。

俺たちふたりそろつて気配に気付かないなんてどんな奴かと思つていると、なんとそこには道場破り……新九郎が立つていた。

すると伍助がにやにやしながら言った。

「おお。あんちやんどうした？六さんにも負けて賭けにも負け帰る旅費が無くなつたか？」

「ふ。まあそんなとこりうだ

伍助の冷やかしにもまったく堪えていない様で、新九郎は肩を竦めて笑つた。

俺だつたら果し合いで負けた道場破りがどの面下げて……と思つところだが、こいつは相当凶太い神経の持ち主のようだ。飄々と笑いながら自分を負かした相手に話しかけるとは。

「伍助少し黙つてろ。お前も何の用なんだ？」

「話は聞かせてもらひた。そのおふみつて奴を諦めさせればいいんだろ？」

てめえには関係のない話だろ？と言いたい所だが……、おふみの件については、今の俺はワラにも縋りたい状況だ。妙案があるとこりうなら、新九郎の話だろ？と聞いてみよつとこり気になつた。

「まあそりだが……。何か考へがあるのか？」

「つまりあんたに相手が居れば良いつて話なんだろ？」

「そりうだな。だがその相手が居ないから困つてゐんだろ」

「簡単な事だ。相手をでつち上げれば良い」

「でっか上げるとこつてもそんな事を頼めそつた女は居ないぞ？」

「ふ。別に女である必要はないだらう」

女である必要がない……。

「しかし、女装が似合つそつた奴なんて居ないぞ？」

「ちつちつ… まつたくなこぼけた事言つてやがるんだ。男が出来たつて言やあ良じじゃねえか」

「ふざけるな！ ビリヒト俺が男と付き合わなくちゃ行けないんだー！」

「だから、でっか上げるつて言つてるんだらうが！ 要するに俺はそつちの人間だから女はお呼びじゃないといつ訳よ」

「へん。こいつの言わんとする事も分からぬでもないが……。

「しかし、誰と付き合つて居る事にしきつてこいつなんだ？」

「ふ。もうらん俺に決まつて居るだらうが！」

新九郎は右手の親指で自分を指差したが、新九郎の言葉を伍助がせせら笑つた。

「何言つてんだよ。六さんは俺のもんに決まつてんだらうへ。」

伍助はそつ言いながら、俺の肩に手を回すが俺は即座に振り払つ。

「誰がお前のか！」

そして伍助の言葉を俺が即座に否定した事に、新九郎が勝ち誇つた。

「ふ。どうやらめえは六三郎に嫌われている様じゃねえか」

「まあ見てなつて。一回でも押し倒す事に成功すれば俺のもんになるつて約束になつてるんだからな」

ちつ！ そう言えばそんな約束もあつたな。
しかし、新九郎もどうして俺と付き合つふりをするとか言つ出しだるんだ？

「もしかしてお前両刀なのか？」

「ふざけるな両刀なんて氣持ち悪こことするかよ」

「おお。どうか。いや最近俺の周りにはそんな奴ばかりでな。それは悪かった」

「当たり前だ。男一本に決まつてゐるだろ？ 俺は俺より強い男をずっと捜してたんだ！」

もつと悪いじやねえか……。

「さあ。俺がお前の彼氏になつてやるから早くそのおふみとかいう女の所の行こうじやねえか」

くそ……。どうして俺の周囲にはこんな奴らばかりなんだ？

いや、だが考え方によつては男にしか興味がないなら、今の俺にとってはむしろ安全かもしれないな。

「よし、分かつた！ じゃあ、おふみのところに行こう。」

俺はそう言って新九郎と共にあふみのところに行こうかとしたが、すると伍助が鼻で笑いながら口を挟んだ。

「ふつ。何言つてやがんだ。昨日六さんと戦つておきながら、恋人です！ なんて通じるわけないだろ。ここはやつぱり俺の出番だな」「…………たしかに」

ここで俺が新九郎と仲良くしていっては、あの試合も八百長と言わ
れかねないか。

たしかに

「うーん。 やむをえん。 伍助を彼氏にするしかないか……」

俺は肩を落としたが、ここで中途半端におふみを置いていけば、おふみの為にもならないだろう。すっぱりと諦めさすには仕方ないか。

「くそ……。俺のアイデイアなんだぞ！」

新九郎は悔しそうにしているが、確かに昨日戦つたばかりなんだ
からやつぱり無理があるしな。

「せつかくアドバイスしてくれたのに悪かつたな。後で一杯奢らせてくれ」

「それはデータの誘いと受け取つて良いんだな?」

「いめん。違ひ」

即座に否定する俺に新九郎は田に見えて落ち込んだが、こいつに構つている余裕はない。

「まあとにかくまた後でな」

俺はそう言つて新九郎をその場に残し、伍助と共におふみに会つべく、おふみの家へと向かつた。

そしておふみの家の近くまで来ると、通りがかつた子供に駄賃を渡して、近くの林へとおふみを呼び出して貰つた。

「六三郎さん、わざわざ呼び出すなんて……もしかして連れて行ってくれる気になつたの？」

おふみは期待を込めた目で俺を見ている。

これから言わなければならぬ台詞を思つと気が重いが、俺には七重が居る以上おふみについて来られる訳には行かない。

「いや、実は俺は付き合つてゐる奴がいるんだ」

「何よそれ！ その話なら今朝もしたじゃない。奥さんなんてどこにも居ないじゃない！」

激昂するおふみに俺はどう切り出したものかと考えていると、俺の横に立つていた伍助が口を挟んだ。

「姉ちゃん。だからいつかう事なのさ」

俺が何がいつかう事なんだ？ と不思議に思つていると、突然伍

助が俺の肩を引き寄せた。

そして何だ？と思つて伍助の方を向いた瞬間、さうに俺の顔に手を添えて……。

「うぐっ…」

「六三郎さん…」

なんと伍助が俺にキスしゃがつたのだ。

「てめ……何しゃがる……」「

抗おうとする俺に伍助は一瞬唇を離し小声で囁いた。
「これくらいしないと信用しやせんって
いやしかし……。

だが戸惑つてこる俺の唇を再度伍助の唇が襲つ。

だがそこに怒鳴り声が響いた！

「てめえ！ 俺の六三郎に何してやがんだ！」

俺と伍助、さらにおふみが声の方を向くと、果たしてそこには新九郎の姿があつた。どうやら俺達の後をつけていたらしい。そして怒りの形相で俺と伍助の間に割り込むと、あっけに取られていた俺の唇をなんと今度は新九郎がふさいだ。

「いや———」

この状況についてにおふみが叫び声をあげた。

不必要なまでの「ティープキス」に、俺は息を止めて吐き気をこじら

ながら新九郎から体を離した。

くそつ、気持ちわりい！ 叫びたいのは俺の方だ。

そして取り乱したおふみに俺がつい近寄ると……。

おふみは飛び退いて俺をきっと睨んだ。

「近寄らないで！ この変態！」

変態……。俺はその場にがっくりと膝を付いた。

「付き合つてゐるときからぜんぜん手を出していくないと困つたらひ……、
そうこうことだったのねー！」

いや……正直俺としては、おふみとはそこまでの関係じゃないと思つてたし……。なんて言つたら火に油を注ぎそうだな。

がつくづくとつな垂れたまま口も利けずにいる俺の左右で、

「そうそう」

「そうこうこと」

と、伍助と新九郎がしきりに頷いていた。

それからおふみは俺たちに向かって無言で走り去つて
いった。

まるで汚らわしいものから逃げるかのよう。

……一応、これで目的は達成された。が、俺の胸中には苦々しさ
と、今にも込み上げてきそうなあざましい吐き気が残つた。

しかも、明日こは俺がホモの変態野郎だといつ不名誉な噂で村中
もちきりだらう。

「まあ結果オーライってやつですかね？」

「俺の最後の一撃が効いたようだな」

伍助と新九郎は満足げに逃げ去るおふみを見送っていたが、俺は密かに誓った。

こいつかこいつらを殺そう。と。

「ただいま……」

夜明け前、丸めた絨毯を魔法で縮めるのも忘れてずるずると引きずりながら姫様が戻つて來た。

「おかえりなさい。……大丈夫ですか？」

ガラガラと窓が開く音に飛び起きた私は、暗がりの中憔悴しきった表情の姫様に気づき、声をかけた。

風に煽られた髪が乱れている。

身だしなみにこだわる姫様らしくないわね。これは、大変かも……。

「あいつ……やつぱりそうだったのよーーーー！」

「姫様、しーっ。声を落として」

まだ夜も明けきらぬ時間に安普請の温泉宿で大声はまずいわ……。取り乱している姫様の口を押さえて部屋の奥に引っ張る。

「……見たのよー。六三郎と伍助のベッドシーンをーーー！」

やや声を落として、はらわたの煮えぐり返るような表情で姫様は言つた。

「ほ……」

「ほんとだつてばー！」

私が口を挟む前に姫様は首を振つて断言した。

「伍助……つて、誰ですか？」

「六三郎の旅の連れよ。私と別れてからどこかで知り合つたみたい姫様はすばやく水晶玉を取り出すと、表面をさすつて画像を映し出した。

ぼんやりとした画像が徐々に鮮明になってきて、布団の中で背中を丸めて眠っているらしい男の姿が見える。

姫様の気持ちが高ぶっているせいか、水晶の画像はときどきブレたりノイズが入ったりして見えにくい。

「これが伍助よ」

「……女性に不自由しなさそな男性に見えますが、同性愛者なんですか？」

嘆かわしい……。

ジパングの道徳観念はどうなっていることや。ひ。

「それがどうも伍助は六三郎が女だつてことを知つたらどうなるのかしら？？？？」

「じゃあ、更に六三郎さんが本当は男だと知つたらどうなるのかしら？？？」

「で、六三郎さんの口からはつきり聞いたんですけど、この人との関係を」

私は姫様の顔をじつと見て尋ねた。

姫様はつと一瞬黙り込み、観念したように白状した。

「実は……聞いてないの。ふたりが寝室で抱き合つてゐるのを見て、そのまま逃げ帰っちゃつた」

「……何しに行つたんですか？　この期におよんで……」

「だつて！　気持ち悪いし臭いしサイテーだつたんだから！」

まあ……。男同士のラブシーンは私もできれば見たくないですけ

「男ばかりの道場だつたから……異臭が……

「男ばっかりの道場だつたから……異臭が……」

「な……なるほどですね」

姫様は犬並に嗅覚が鋭いから……、匂いにはかなり弱いんだったわ。

「どうにせよ。六三郎が男とキスしたり寝室で抱き合つたりしてるので3回も見ちゃつたもの。3回も見たら確定でしょう？」

水晶玉の画像が六三郎さんの寝姿に変わった。

右手の横に何故か刀が置かれている。

寝ているときも、いざというときに備えて用心しているってわけかしら？

自分の道場にいるのに、すぐ用心深い人なのねえ。
……あれ？ 何かひつかるわね。

「姫様。このふたりの様子おかしいと思いませんか？」

「思つ。思つ」

姫様は強く頷いた。

「六三郎は男好き。伍助は女好きつておかしいわよね～

「いえ……。そういうことではなくて

「じつこいつ」とへ。」

「恋人同士つて愛し合つた後に別々の部屋で寝ますか？ ふつう

「え？」

「同じベッドで一夜を共にしませんか？」

「……それは」

姫様は少し考え込んだ。

「かたやしつかりと刀まで備えて眠るなんて、どう考えても不自然ですよ」

「……そうかしら？」

「腕に落ちませんね」

姫様は腕を組んで再び考え込んだ。

「……は、姫様のために私が人肌脱ぐしかないわね。」

「姫様、今度は私が行きます。直接このふたりに会って、ふたりの関係を確かめできますわ」

……そして、さっそく翌日絨毯に乗つて六三郎さんの村に来たんだけど……、死ぬかと思ったわ。この遠距離飛行……。

空を飛んでいる間は、絨毯が接着剤でくつついたみたいに体は固定されていて、たとえ宙返りをしても落ちないとわかっているけど。だからって高所恐怖症が治まるわけじゃないもの……ね。

温泉宿で出会った旅装束の女性を参考に衣装もそれっぽくして、私は村の中に足を踏み入れた。

まだ朝早いけど、六三郎さんたちがいつまた村を発つとも限らないし。

姫様の水晶玉で見た限りでは、さつきまでまだ道場の部屋で寝ていたから大丈夫だと思つけど……。

姫様から聞いていた道順をたどつて道場に向かつて歩くと、ふわっと甘い香りが漂ってきた。

キヨロキヨロと辺りを見回して香りの元を探すと、少しバラに似た白い花を咲かせている低木が見つかった。

ジャスミンと似てるけど、もつと甘いいい香りだわ。姫様が好きそうな香り。

私はもつと香りを嗅いでみようと、花をつけた低木に近寄った。すると不意に後ろからすっと手が伸びてきて、私の目の前の花を一輪手折つた。

びっくりして振り返ると、なんと！あの伍助という男が花を持つて立っていた。

……どうして？さつきまで誰もいなかつたのに。

「いい香りだ」

伍助は白い花に顔を近づけて香りを嗅ぐと、その花を私に向けて差し出した。

「……え？」

「お近づきの印に一輪」

は？と思つて花と伍助を代わる代わる見ていると、伍助は私の

手をとつて白い花を握らせた。

その手は傷だらけで、茶色っぽい血の筋があつた。
よく見ると背中に野鳥の死体を背負っている。狩りの……獲物？

> 124138 | 2976 <

「お姉さん見ない顔つすね。この村の人じゃないね」
笑いながら私の顔をじつと見た。

「え……、ええ。旅の途中でここにはたまたま……」

「へえ。女の一人旅なんて珍しいね。しかもこんな早朝に」「うつ……。結構するどいわね。この男。

「ひ、ひとりじゃないのよ。連れがいるの」

「ふーん。ど二?」

伍助は面白そうに目を細めた。

「それが……、道中はぐれてしまつて……」

「苦しい……。

「お連れさんかお姉さんかどっちかえらい方向音痴なんだな。ここ
ら辺はけもの道でもなけりやほほ一本道てえのに」

「もつと遠くでござれたのよー。」

「そんなムキにならんでも……。わかりやしたよ
わかつたといいながら、伍助の目が笑っていた。これは絶対信じ
てないわね！」

「まあ、それはびーでもこいや。そのお嬢でこんなべっぴんのお姉
さんとお近づきになれそうなんすからね。俺は伍助。お姉さん名前
は？」

「な、なんであんたに血口紹介しなきゃなんないのよつ。

「悪いけど得体の知れない男に名乗るほど安い女じゃないの

「おつ」

伍助はひゅーと口笛を吹いた。

「クールビューティだねえ。ますます好みますよ

何？　この男。六三郎さんの恋人なんじゃないの？？
これじゃ単なるスケコマシってやつなんじゃ……。
と思つて、伍助をきつと睨んだ瞬間、背後から声がした。

「何やつてんだ、伍助！　そろそろ朝飯の……」

振り向くと……、六三郎さんが道場の方から歩いてくるといふだ
った。

つと私は視線を移すと、びっくりしたよつて顔を見開いて駆け出

した。

「七重……」

「は？」

「七重！ 探したぞ！ 今までどういたんだー？」

恐ひしい勢いで突進してくる六三郎さんを避けよつと、思わず伍助を盾にしてその背後に回つた。

「おつと」

伍助は六三郎さんの両肩を押さえてその場に踏みとじめりせ、首だけで私の方を振り返つた。

「お姉さん。六さんの嫁さん？？」

「ち、違います。人違い！」

伍助が押さえていなければ今にも私に飛びついてきそうな六三郎さんは、じたばた暴れながら私の顔を見て言った。

「七重…… 一 ジゃない」

間近で見るとさすがに私が姫様ではないことがわかつたようで、六三郎さんはがっくりと肩を落とした。

「すまない……。階格好が俺の妻に似てたもんだから」

まあ、髪型とか顔立ちとか、こいつの人と比べればかなり似てる

ものね。

「いーえ……」

伍助は大人しくなつた六三郎さんを解放して、まじまじと私を見た。

「六さんの嫁さん、この人に似てるのかー。じゃあ確かにべつひんなんだな」

私はこのチャンスを活かさない手はないと敢えて聞いてみた。

「奥さん……、どうされたんですか？」

六三郎さんはまぜまぜに頭を搔きながら答えた。

「旅の途中でいなくなつてしまつて、ずっと探ししてゐるんだ……」

「やうなんですか……」

姫様！ 聞きましたか？

六三郎さんは必死で姫様のこと心配してゐるみたいですよ。

「六さん、うちのお姉さんもお連れさんとはぐれちゃつたらしつすよ」

「やうなのか？ 女ひとつでそれは大変だな。俺は六三郎。そなたはま？」

え……？

「わ、私は……」

私はアニス……つて本名じゃない！　えーと……アニス……スター
ニアス《八角》だから……。

「や……八重と申します」

「八重……」

「なんか、名前まで似てるつすね」

伍助は少し呆れたように笑った。

それから六三郎さんの厚意で、私は道場で朝食をよばれることに
なった。

……ありがたいんだけど、姫様から聞いていた通り男ばかりで、
よほど女性が珍しいのか激しく視線を感じる。

しかもみんなシャイなのが、一見お椀をかき込んでいるように見えながらチラチラとこちらの様子を伺うという感じで、なんともや
りにくいわ~。

「すまんの一、お八重さん。弟子たちがジロジロ見るから食べにく
かるわ。『じりんの通り男所帯なものでな。悪気はないんじゃ。気に
せんとどんどん食べてくれ』

師匠とみなに呼ばれている『老人』が苦笑いを浮かべて言った。

「はい……。ありがとうございます」

「お前ら変な田でお八重さんを見るんじゃねえ」

道場のリーダーらしい六三郎さんが弟子たちをギロリと睨んだ。

こんな調子でなんとも奇妙な空氣の漂う朝食が終わり、私はお礼を言つて道場を後にした。

女ひとりだと危ないだろ？とこづけで、次の村までの山道を六三郎さんが送つてくれることになり、朝のうちに出発することになったのだ。

「道中、連れの人と合流できるといいんだけどね」

「ええ……。もしできなくとも、お互に下野を田指していますから、きつとセレヒで会えます」

……てか！ わざわざ送つてくれなくともいいんだってば～～。

「あのー……。ほんとに送つていただかなくても大丈夫です。こいつ見えて、私結構旅慣れてますし（嘘）、護身術の心得もありますし（これは本当）……」

「俺の妻もそつぱりつてたけど、野盗にさらわれてたし、今も行方不明になつてる」

六三郎さんはため息をついた。

「なんで女はみんなそつ自分を過信してんのかなー。ずっと俺の側にいてくれれば危険な田に命わざずに済んだのに」

私と話しながら、六三郎さんの言葉は姫様に向かっているようだつた。

悔しそうな表情で呟く。

「心配ですね。奥さんのこと」

「ああ

「探しに行つたりしなくていいんですか?」

「心当たりは全部探したけど手がかりすら見つからなかつたんだ。闇雲に探しでもしかたないと思って、いつたん故郷の村に戻つて準備をしてからまた探しに行くことにした」

「なるほど。じゃあこれからまた探しに行くんですね」

「うふ。日本中を周つてでも探し出す

やう言い切る六三郎さんの表情はとても真摯で、姫様を本氣で心配しているんだとわかった。

「とっても……、愛してるんですね。奥さんのこと

「は? ま……まあ

「そんなに愛されてる奥さんがうらやましいですわ。六三郎さんは他の人に心が向いたことなんてないんでしょうね?」

「ちょっと鎌をかけてみた。

姫様の聞きたい言葉が聞けるかも知れない。

六三郎さんは真摯な表情で呟くよつて言った。

「……ああ。もちろんだ

そうそう！ その言葉が聞きたかったのよー。

この人はやつぱり姫様だけを愛している。

あの伍助とかいう男がなんなのかは知らないけど。

本気で姫様のことを思つてなければ赤の他人にまでこんな話する
わけないもの。

それから休憩を挟みながら夕方まで歩いて山道を越え、次の村の入り口にたどり着いた。

「本当にありがとうございます。今日はこの村で宿を取りますので」

「うん。 気をつけよ。 もし……」

六三郎さんは立ち去る前に言つた。

「どうかで七重と……俺の妻と会つよつなことがあれば、俺がずっと探してくると伝えてくれないか？ できるなら俺の村で待つて欲しいと」

「はい……。 もしあ会つできたなら必ず」

「ありがとう」

それから、六三郎さんは笑つて手を振りながら、自分の村に向けて戻る山道に入つていった。

私はほっとした胸を押さえながら、湧き上がつてくる嬉しさに微笑んだ。

どうやら姫様の泣く顔を見ずに済みそうだわ！

「お八重さん」

背後から突然声がして、私は思わず飛び上がった。

「誰つー！」

「俺だよ。伍助っす」

こせこせと笑いながら片手を上げて伍助が立っていた。
……わざとまで誰もいなかつたはずなのに、どこから湧いて出た
の？　この男。

「あなたはねー！　なんでこいつも突然湧いてくるのよ？　びっ
くつするじゃない！」

「なんでって、俺忍者だから」

「二ンジヤ……？」

知らない言葉だわね……。ジパングの魔人ジンとかそういうものなの
かしら？

まあいいわ。ついでだからこいつにも確認しておこう。

「あなたって六三郎さんとはどういう関係なの？」

「えーと。彼氏っことで」

伍助はにやっと笑つて答えた。

「何言つてゐるの。だいたいあなたたち男同士じゃない。六三郎さんは奥さんもいるしね」

私は目を細めて、思いつきり疑いの表情を作つて言つた。

「うーん。詳しい事情はいえねんだけど、そこは色々と事情があるんですよ」

事情つて……やっぱり知ってるのね。六三郎さんが女だって。

「よく分からないけど、六三郎さんを狙ってるわけ？ もうするあなたの横恋慕みたいだけど」

腕組みをして冷たい目で伍助を見る。

伍助は頭を搔きながら苦笑し、白状するよつて言った。

「まあねー。うまくすれば俺のものになってくれる約束になつてゐんつすよ。今んとこ負けっぱなしだけど」

「でしょうね。あなたのことだから六三郎さんの寝込みを襲つては追つ払われてるんでしょ？ 田に浮かぶわー」

「なかなか容赦ないっすね。おハ重さんも。まあ、そりなんすけど」

……やつた！ これで伍助からも裏が取れたわ！ 知らず知らずのうちに顔がにやつこてしまつていったようだ、伍助がまた苦笑しながら言つた。

「なんか、嬉しそうっすね。おハ重さん」

「いえいえいえ。ほんとに。お氣の毒～～

とじめを刺してしまつたのか、伍助はがっくりと肩を落とした。

「いいっすけどね……別に」

「ところで何の用なのよ~ わざわざこんなところまで来て」

伍助はにこりと笑つて私の両肩に手を置いた。

「今朝途中だつたから、改めて口説いてみよつと黙つて」

私は体を後ろに引いて、伍助の両手から逃れた。

「あなたは六三郎さんが好きなんでしょう? 他の女を口説くうなんてどういうわけ?」

「やうなんつすけじね。お八重さんの」とも眞に入つちまつたから
一

「なるほどねー。いつもやの調子で女を口説いてるんだ」

「まあね。気になる?」

「せんつせん! てか、あなたみたいな軽薄な男にまつたく興味ないから

「……ほんとやつすねー」

伍助はいきなり私の左腕をぐいっと引つ張つて自分の方に引き寄せた。

「なにすんのよー!」

「はー。これ

私の左手にあの白い花を握らせた。

「忘れ物つす

そして、ぱっと手を離して両手を挙げた。

「無理矢理やつちまう」ともどめるつすナゾねー

「何言つてんの？」の男。

「おハ重さん、六さんと違つて俺に抵抗できないから」

「抵抗するわよ。思つてきり。あなたね。そんなちぢれなこだ」とことによくなつた女に一生相手にされなこわみ

「一生つて……。そこまで言つますか？ まあ、ここに『

伍助は両手を下ろして笑つた。

「氣いつけて。俺以外の男に襲われないよう

「襲われないわよ」

「はは。じ、そこなら」

伍助は手を振りながら私に背を向けて立ち去りつとした。

「待つて」

私は一步伍助を追いかけた。

「なんすか?」

伍助は振り返った。

「これ、なんていう花?」

白くて甘い香りのバラに似た花。

「くちなし」

「くちなし?」

「そう、八重咲きのくちなし」

伍助は目を細めて笑った。

手元のくちなしの花を眺めて、ふと顔を上げると伍助の姿は消えていた。

まるで始めから誰もいなかつたかのよつこ。

帰つたら姫様に報告したいことがいっぱいある。

六三郎さんが必死で姫様を心配して、日本中を歩き回つてでも探そうとつっていること。

ホモ疑惑については、伍助は単なる片思いで、ふたりは恋人同士でもなんでもないこと。

姫様きっと喜ぶわ……。

もうしばりぐ、この花の甘い香りを嗅いでから。

もうしばりぐ、日が暮れるまで歩いたら、姫様のところへ帰るつ。

私はくちなじの花びらにそつと触れ、幸せな気分で微笑んだ。

俺が七重を野盗から救つた後、ふたりで一緒に旅をする事になつた。

七重は、物怖じしない性格なのか、知り合つたばかりの俺ともざつくばらんに喋つてくれるが、どうも訳ありの様で自分の事をあまり詳しくは話してくれない。

まあ、いざれ話してくれる時もあるだらうと無理に聞かないでおいた。

一緒に旅をしていて気付いたのだが、七重はいつもこの国の風習や食べ物につとい。

遠い国から來たと七重は言つていたし、肌の色も少し浅黒いので琉球から來たんだと当たりをつけているのだが、多分当たつているんだろう。向こうとこっちではかなり風習が違つて言うからな。

しかも育ちが良くて働いた事が無いのか、あまり体力もないらしく、どうも俺がついていてやらないと危なつかしくてしょうがない。

仕官先を求めての旅の中も七重は歩くのが遅く、予定していた場所まで歩く事が出来きず、すぐに弱音を吐いた。

「足がいたーー」

と言つ七重に、俺は、やれやれとため息を付く。

「大丈夫か？」

「もう歩けない。」

でも、俺が仕方ねえなーとおぶつてやると七重は申し訳なさそうな顔をした。

だったら最初から弱音を吐かなければ良さそうなものだが、もしかして今日はここまで野宿をしたかったのか？

とはいって、俺にも予定があるのでそつはのんびりとはしていられない。

俺は、まあ女の子の一人くらいおぶつて歩くのも修行の内かと思つことにしたが、七重が予想以上に軽いのには驚いた。

女の子ってこんなに軽いものなのか。

これじゃ確かに体力がないのも仕方が無いか。

しかしこんなに軽いのに出てこるとひむちやんと出でるんだよな。

俺の背中にむちつきから柔らかいものが当たつてくる。いかん結構ムラムラしてきたぞ。

だが、これくらいでムラムラしていくからと言つて、俺はむちりんチエリーではない。

道場の兄弟子から

「女も知らんで人が切れるか！」

と、もっともなんだか良く分からぬ事を言われて遊郭へと連れて行かれてとつぐに経験済みだ。

しかし遊郭では最近、南蛮人が持ち込んだという梅毒という病気

が流行つていて危険。そので軽々しく行くのも躊躇する。

かの天下人、太閤秀吉から

「百万の軍勢の采配を任せてみたい」とまで言われた名将大谷吉継も梅毒にかかり、関ヶ原の戦いの時にすでに目も見えなくなつていたといつ。それほどの男ですら病には勝てないのだ。

そう思つと遊郭に行くのも躊躇われて、そつ何度も足を運んだ訳じゃない。

もつとも俺も、はじめは七重の事を遊郭に売られていくのなら一番初めの客にと思つたのだが……。

しかしこうして一緒に旅をしていると、そういう心算で野盗に連れられていく七重を追いかけたと言うのが後ろめたくなつてくる。野盗から助けた俺を無邪気に頼つてくる七重に、俺も保護欲が起き立てられてきたのだ。

まあ、遊郭の客になる心算だった事はいづれ話して謝る事にしよう。

だがその時は思いの外早くやつてきた。

深夜、野宿していた俺が田を見ますと七重の姿が見えない。

一瞬、もしやまた野盗にさらわたか！ とも思つたが、さすがにそれだけの騒ぎが起こつたならその時に俺が田を見まさない訳がない。

七重が自分でこいつそりとビームかへ行つたんだらうが、まったくどこへ行つたんだ？

俺はやれやれと寝床から起き出した。

俺が気配を感じられないほど離れた場所で、また七重がさらわれる可能性もあるからな。

あちこち探し回つてみると、どこからかバシャバシャとう水がはねる音が聞こえてくる。

しかも七重らしき声もするではないか。

そして俺が、そこか？ と思つて音が鳴る方へと向かい、

「七重！」

と顔を出すと、なんと七重が滝つぼで水浴びをしていた。

「な、なななな何してんだ！？ 七重！？」

心の準備が無い状態でいきなり田の辺たりにした七重の裸体に、俺はうろたえてしまった。

ま、正直、「よつしゃー」と思つ気持ちもないではなかつたが…。

「」の状態つてまさか、俺、のれきと勘違つされてないか？

「何つて、水浴びよ。あんまり暑くて寝られないんだもの」

慌てて水の中にしゃがみこんだ七重が、少しふくされたような声で答えた。

おいおい、無用心にも程があるだろ？

まったく！ 俺が見つけたから良かったものの、もし野盗に見つかついたらまたさらわれるところだぞ！

「ひとりで危ないだるーー また野盗にさらわれたらどうするんだ

よー?」

「さりわれないわよ」

「……って、実際さらわれてただろ!? そなたは女なんだから用心しないと!」

七重は大丈夫と言うが、大丈夫なわけないだろ!?

どにどう考えれば大丈夫だつて言うんだ? 仕方がないので、七重が滝つぼから上がるまで見張っていた。

……と言つても、裸の七重をジロジロ見るわけにはいかないので(そうしたいのはやまやまだつたが)、七重が着替えるまでの間は背を向けて気配だけを頼りに無事を確認していた。

あまりにも世間知らず過ぎる。これじゃ四六時中俺が着いていいと危なっかしくてしょうがない。

とりあえず今日は良いとして、明日からはちゃんと見張つておかないとな。

だが……と、俺はふと氣付いた。それつてずっと一緒に居ると思う事か?

七重とずつと一緒に……か。

まだ知り合つて数日しか経つていないのでこんな気持ちになるなんて不思議だが、自分でもなぜか違和感を覚えなかつた。

滝つぼから上がつた七重は着物を着て姿を見せたが、頬が幾分赤い。

まあちうつとは言え男に裸を見られたんだから当然か。

見えたのは腰から上だけで、しかも七重はすぐに背を向けて水の中にしゃがんでしまったので、本当に一瞬のことだったが、予想通りの豊かな胸と濡れてつややかに光る背中はしっかりと俺の脳裏に焼きついていた。

改めて七重を見ると、濡れた髪に小さな木の葉がついている。俺は無意識にその葉をつまんだ。

俺に触れられると思ったのか、七重の体がびくっと震えた。

「……やべーな……。俺が襲つちまつかも……」

無邪気だった七重が俺に裸を見られて緊張していることに、俺も刺激されていたようだ。

思わず心の声がぼそっと出てしまった。

七重は真っ赤な顔で驚いたように俺を見て少し後ずさった。

だが俺は逆に妙に冷静になっていた。

男として七重を自分のものにしたいという欲望はあったが、それ以上にずっと一緒に居たいという気持ちが強いことに気づいた。

七重のそばに居て、突拍子も無い七重の行動に振り回されるのも悪くない。

もつと七重を知りたいし、見ていたい。

こんな気持ちになつたのは初めてだ。

「七重。俺の嫁になつてくれない？」

今ほんやりと頭の中で形になつてきた気持ちがつい口から出しきった。

我ながら不思議なんだが、何故か俺の中に躊躇とか不安とかいう

ものは見当たらなかつた。

七重は更に驚いたまん丸な目をして、更に真っ赤な顔をして俺を見た。

「何を……聞い出すのよ?」

「白状すると、そなたが売られてしまうなら最初の客にならうと思つて後をつけてた。最初にそなたを抱くのは俺だと」
七重が野盗に連れられていた時、遊郭に売られるものと思つて最初の客にならうとしていた事を正直に話した。

そして心からの言葉を口にした。

「そなたのような女は初めてだ」

いつか俺も所帯を持つことになるだろうと思つていた。
七重のような女ではなく、良き妻となるよつなしとやかな女を妻にするつもりだった。

だが、俺は妻が欲しいのではない。

七重が欲しいから、七重を妻にしたいと思った。まったく、予想外のことだったが。

「それは、私だけ? 死ぬまで私だけを愛すると誓える? アッラ
ーにかけて」

七重がこれまた予想外のことを聞いてきた。
プロポーズされた女は「はい」か「いいえ」で答えるもんだと思つていたが、条件を付けてくるとは……。
しかも、アッラーってなんだ? 琉球の神様か?

俺は懐から母上の形見のかんざしを取り出した。

「アッラーが何かは知らんが、このかんざしにかけて誓つ」

そして母上の形見のかんざしを七重に差し出した。いつか、妻にする女性に渡そうと思つて持ち歩いていたのだ。

「これは？」

「母上の形見だ。肌離さず身につけていた。上泉家の家紋が入つてこる」

俺はかんざしを七重に差し出した。

「そなたがこれを受け取つたら、今晚そなたを俺の妻にする」

「…………」

七重は真っ赤な顔のまま絶句したが、じばらぐするとそつとかんざしを受け取つた。

俺は七重を抱き上げ、そのまま草の褥に下ろした。

俺が触れるたびに七重は体を縮めるようにして震えた。野盗になんかさらわれないとあんなに強気だった七重が、俺の腕の中で小さく震えている。

優しくしないと、傷つけてしまいそうだ……。

七重を抱くのは俺だけだ。

七重に触れるのも、俺だけだ。

ずっと側について、誰にも傷つけられなによつてやらないこと

……。

七重を妻にした夜、俺は心の中で誓つた。

朝日を覚ますと七重がすでに先に起きていた。

「おひおはよっ」

「……おはよっ」

お互い朝の挨拶をしたが、どうも照れくさい。

七重は俯いて俺と目を合わせない。もっとも俺だって七重に正面から見つめられていたら目を逸らしてしまっていたかも知れないのだが。

それから俺と七重は目を合わせないまま黙々と朝食の準備をした。

そしてふたりとも黙々と飯を食べる。

ふたりとも目を合わせずに、ただただうつむいて食べ続ける。しばらくその状態が続いたが、あまりの不自然さに俺は遂に、

「つふー」と軽く噴出してしまった。

すると七重も俯いて、

「ふふふ」

と笑い出した。

七重の笑い声に俺はさらに大きく笑い、そして七重も大きく笑い

出した。

人気の無い早朝の山奥にふたりの笑い声がこだました。

ああ、俺達は夫婦なのだ。と思つた。

そして旅は続き、兄弟子の多兵衛さんの道場を訪ねた折、茶屋で一休みする事にした俺達はふたりでお茶と団子を頼んだ。

考えてみたら、女の子とこんな風に茶店で「アーティホーム」としてたのはあのときが初めてだつた。

故郷の村で付き合つていたおふみとは、強引に押し切られる形でなんとなく付き合つていていたが、稽古の合間にちょっととしゃべつたり、差し入れてくれた握り飯を食べたり、祭のときに一緒に歩いたりしたぐらいだつたしな。

そう思つとなんだかくすぐつたいような妙な気分だ。

「こ」でも七重は無邪気さを發揮し、豪快に団子にかぶりつく。黙つていればどこのその高貴な姫のよつにも見えるのに、そのギャップが面白い。

故郷の村でもおてんばな娘は居たが、七重ほど豪快な女の子は居なかつたな……。七重が住んでいた国では当たり前なんだろうか？

そんな七重を見て俺は微笑んだ。

ずっとこの言ひ口が続くものだと思つていた……。

目が覚めると道場の一室だった。

やれやれ夢か……。昨日七重によく似た八重さんという人と会つた所為だな。

しかし本当に似てたな……。

やや浅黒い肌の色といい、ぱっちりした大きな黒い目といい、同じ系統の顔立ちなのかもな……。

しまった！ もしかしたら八重さんも琉球から来た人だったかも知れないぞ。

もつと色々と話を聞いていたら七重の事は直接知らなくても何か手がかりが掴めたかも知れないのに！

くそ！ だいちゃんぽだ！

七重が姿を消してから、なすすべもなくどんどん時間だけが流れていいく。

こうしていると七重と出会つたのも、夫婦になつて一緒に旅をしたのも、もしかしたら夢の中の出来事なんじやないかと弱気になつてくる。

七重と過ごしたのはほんの一週間ほどだ。

消えた母上のかんざしと頭に焼きついた七重の面影以外何も残つていないので。

そう……確かなものは何も。

いつもなつたらやつぱり師匠が言つていた、失せ物や探し人の場所を言い当てる事が出来る人の居場所を聞き出すしかないか。

しかし、師匠も最近ぼけてきているからな……。このままだと、探し人の居場所を言い当てる人を見つけられる人を探さないといけなくなりそうだぜ。

まつたく笑い話にもならない。

俺はやれやれと布団から起き上がった。

まず早朝から弟子達の稽古をつけてその後、伍助が準備した朝飯を食べる。そして飯の後はまた稽古。昼飯を食べてその後も稽古だ。

弟子達は、

「兄弟子厳しそぎます！」
「一日中稽古じゃないですか！」
「もつと強くぶつて下さい！」
と口々に弱音？を吐いてるが構わぬじごく。

3人がかりでも伍助に遅れを取るなんて、もし俺が居ない時にまた道場破りが来たらひとたまりも無いからな。
俺が居る内に出来るだけ鍛えておかないと。

とはいって、俺も長居する訳には行かない。七重を探さなくては。

一日の稽古も終わり夕食の後、俺は師匠の部屋へと向かった。

道場破りの新九郎と戦う前に師匠から聞いていた探し人の場所を言い当てるという者達の居場所を聞く為だ。

「六三郎です。失礼いたします」

俺はそつ師匠に声をかけ、師匠からの「うむ」と言ひ返事に、ふすまを開け敷居を跨ぎ、早速本題に入った。

「師匠。以前に師匠からお聞きした、探し人の場所を探し当てる事ができるといふ者達の居る場所なのですが、思い出しましたでしょうか」

「ねえ。その事かそれは聞が良い」とよ。今ちよひじ悪こ出しでいたところじや」

「本当ですか！ ありがとうございます！」

「これで七重の居場所が分かるぞ！」

「うむ。では早速話そひ。覚えてこるひけひに躰らなへてせ、また直ぐに忘れてしまつかひの」

「おいおい。大丈夫か？ マジでボケはじめてるな……。だが今は師匠の事よりも七重の事だ。

「それでその者達はどうして居るのでしょうか？」

「確か…………。どじだつたかの？」

「師匠ー。」

「ほつほつほ。なに冗談じやよ」

「まったく師匠ほひ見えても結構お茶目だからな。心臓に悪いぜ。

「確かに……。山城の国……京の都だった……仮があるの」

「どうも頼りないな。だが今は師匠の言葉を信じじるしかない。この

常陸国から京まではかなりの道のりだが、それで七重の居場所が分かるなら易いものだ。

「師匠、ありがとうございます。早速京に向かいます」

俺は師匠に深々と頭を下げた。

「兄弟子！ 行ってしまわれるんですか！」

「いつかきっと兄弟子に相応しい武士に成つて見せますから待っていてください！」

「ずっと待っています！」

出発の日の早朝、何か言つてゐる弟弟子達に、俺は一聲もくれず師匠へと向き直つた。

「それでは師匠、行つてまいります」

「うむ。その逃げた嫁とやらが早く見つかると良いの」

「ち・が・い・ま・す！ 居なくなつたのです。逃げたのではありません！」

だが俺の抗議もむなしく、やはり師匠は俺に哀れむような視線を投げかけた。まるで、いい加減に現実を認めろよ……。とでも言つ様に。

くそ。だが断じて俺は嫁に逃げられたのではない。何故か居なくなつたのだ！

「では、これで

俺は不機嫌な表情で一礼すると師匠達に背を向けた。

「これから京都までは20日ほどか。だが急げば17、8日で着くだろう。

旅費は俺と新九郎が戦った時、伍助がかけの元締めをしていた時の儲けを拝借してきたのでたっぷりある。

俺が戦つて儲けたのだから当然の権利だ。もつとも急ぐ俺は街道沿いにある宿場に泊まらず、夜が更けても突き進み夜は野宿する心算なので旅費はかなり節約できるが、金は有るに越したことは無い。

それに探し人の場所を占うという人の報酬だつて必要だらう。俺がそう考えながら道を急いでいると、突然声がかかる。

「置いて行くなんてひどいっすね」

「ちつ！ せつかく朝早くから出発したのに、やつぱり忍者をまくのは無理だったか。

しかも伍助は先回りし、俺の進む先にある木の幹にもたれ掛っていた。追いかいたんなら後ろから声をかけろよ。わざわざ先回りするなんて嫌味な奴だな。

「なんでわざわざお前に声をかけにやならんのだ。どこの世界に自分の身体を狙う相手を自分で呼寄せる奴がいるんだよ」

俺は顔をしかめて冷たく言い放つたが、伍助はいつも通り何処吹

く風だ。

「なに言つてんすか。俺が六さんを押し倒す事に成功したら俺のものになるつて約束でしょ？ だったらちやんと俺にも声をかけて貰わないと約束が違つじゃないつか」

おこおこ。どじまで拡大解釈する心算だ。まつたぐいこまで自分勝手な奴も珍しい。だが俺が伍助に言ひ返そつと思つたその時、後ろからまた声が掛かつた。

「その話、俺も乗つた！」

俺と伍助が気配に気付かないとは……。俺と伍助が声のする方を見ると、やつぱつと言ひべきか新九郎が立つていた。

「俺も乗つたつてなんのこと？」

伍助が新九郎に問いかけると、新九郎は近づき俺を見つめながら答える。

おこおこ、かなり気持ち悪いだ。

「お前を押し倒すのに成功すれば、お前を手に入れられるなんて良い話、どうして俺に黙つてたんだ」「だ

こやこや、どうしてお前に言わなきゃならんのだ。やつぱり口を開いて口を開けようとすると先に伍助が口を開いた。

「何言つてんだよ。俺と六さんはずやんと理由があつてやつこつ話になつてんの。お前を混ぜてやる言われはねえよ」

そして五助はやつぱり新九郎に、シッシリ手を振った。

> 2 2 5 7 2 2 | 2 9 7 6 <

あー、もういいや、とりあえず五助に任せ。俺はそのまま思って後ろに立った。

「どんな理由だ言つてみろ」

「一回薬を使つた時に六さんを押し倒すのに成功しそうだつたんだがな、薬を使わずに押し倒せたら諦めて俺のものになるつて約束してくれたんだ。なにせ薬を使って押し倒してもその一回限りだからな」

「ちつ、薬は使つちやダメなのか」

新九郎はそつと舌打ちをする。

おこおこ薬を使う気まんまだつたのかよ。危ない奴とは思つていたが、こんなのと伍助と両方から狙われたらたまつたものじゃないな。

「六さんとの決闘に負けたお前が、薬を使わずに六さんを押し倒せるわけ無いだろ? 諦めてとつと帰れよ」

「ふつ。夜這いすれば問題ねえだろ」

「六さんの傍には俺が居るんだぞ? 夜這いなんてさせやしないよ」

伍助はいつも通りの余裕を持った態度で返答していくが、次の新九郎の言葉に顔色を変えた。

「だったら俺は、お前の夜這いを邪魔してやるわ」

「あ。てめえ！　何言つてやがる。人の恋路の邪魔をして楽しいのかよ」

「ああ。楽しいな」

「つむ。結構話が長引きたうだな。よし」のままふたりとも置いていこう。

俺は気配を消して気付かれない様にふたりから離れると、先を急いだ。

今日中に常陸国を出れれば良いんだが、と、俺は足を速める。だがしじばりすると後ろから声がする。

「六ぞーん。なに俺をおいてつてんすか！」

「お前なに考へてやがんだ！」

「べへっ。やつぱり追いかけてきたか。

「俺は先を急ぐんだよ。のんびりとお前らの相手なんてしていられるか！」

俺はふたりを無視して先を急いだが、ふたりはめげずに俺の後についてきやがる。

「だからここへんなつてー！」

俺は駆け足になる一歩手前の様な足取りで先を急ぐが、ふたりも負けじと、

「そりやないつすよー！」

「俺はあきらめんぞー！」

と着いてくる。

こうして、何故か俺の身体を狙う男が一人となり、俺の嫁を探す旅は続くのだった。

11・六三郎（後書き）

更新が遅くなり申し訳ありません。
六三郎の七重への気持ちを書くのに苦労しました。
感想・アドバイス等ありましたら、是非お願いします。

両手のひらが真っ赤になるほど血で濡れていた。
いつたいどこから……？ 傷口を探してみたけど、どこにもない。

やがてふと気がつくと、田の前に血だらけの六三郎が倒れている。

「六三郎！」

私は叫んで彼の体の傷口を探す。
一刻も早く止血しなければ……。

「七重……」

しゃべらないで！

六三郎の破れた着物を開いて、じくじくと血が流れ出す腹部を押さえる。

止まれ！ 血よ、止まれ！

私はイメージする。彼の血液の中の血小板が傷口に集結して堰を作る場面を。

腹部の傷口が固まつてほつとした途端に、六三郎の左胸が裂けて血が流れ出す。

どうして…？

止血をする」と、次々に六三郎の体の新しい箇所が破れていいく。
どんどん彼の血が失われる。

「のままでは……六三郎の体の血が涸れてしまつ。

「……七重……」

六三郎が血だらけの手で私の頬に触れ、何かを喋つた。
何を言つてゐるのか、まったく聞き取ることができない……！

どうしたらいいのかわからない……！

六三郎を救うためにはどうしたらいいのか、必死で考へてゐるうち、彼の体はどんどん萎んでいった。
まるで、溶けていくかのように……。

水の中に落ちた砂糖をくつように手を伸ばして、消えていく六三郎をとどめようとしたけど、私が掴んだのは六三郎のキモノだけだった。

「ダメ！ 消えないで……！」

私は叫びながら掛け布団を跳ね除けて起き上がつた。

……あれ？

気がつくといつも温泉宿だった。

障子から日差しが部屋に入ってきて、もうすっかり明るくなつて
いる。

「夢……」

跳ね除けた掛け布団を掴んで呟く。
ひんやりとした布の感触が、寝ぼけた頭を少しづつ現実に引き戻してくれようやうだった。

……なんて、リアルな夢。

いいえ、もしかしたら現実かも！――

私はあわてて卓袱台の上の水晶玉に飛びついた。

さすりながら六三郎の姿が映るように念じると、水晶玉の奥に六三郎の姿が徐々に鮮明に浮かび上がってきた。

ハシと器を持って朝食をとっている最中のよつだつた。

「良かつた～～～！ ピンピンしちゃる」

私はほつとして胸を撫で下ろした。すると、次の瞬間に……。

「あら？ アース？？」

六三郎の右横にアースが座って、同じように朝ご飯を食べていた。

やるじゃない。もう道場潜入に成功したなんて！

アースの表情は笑顔がこわばっていて、なんだか居心地が悪そつに見えた。

男ばかりの道場でジロジロ見られて気まずい思いをしているのかもね～。

アムランの城では基本的に男女別れて生活してたし、たくさんの男の中に女ひとりというシチュエーションもアースにとっては生ま

れて初めてぐらこのものよね。さうど。

「ありがとね……。アース」

高所恐怖症を押して空飛ぶじゅうたんに乗つて常陸まで行つてくれたり、男の集団に紅一点の不快さを我慢してくれたり、全部私のためだものね……。

私は水晶玉をもう一度さつと撫でて、六三郎とアースの画像を消した。

せっかく頑張ってくれているアースの口から報告を聞いたかった。水晶玉が教えてくれるのは真実の一部分だし。映像だけ見て全てがわかる訳ではないわ。

ふうとため息をひとついた瞬間、廊下の方から仲間さんの声が聞こえた。

「おはよひざいます、七重様。お田覚めでいらっしゃいますか？朝げの支度ができましたので、よろしければお持ちいたしますが

「ええ、お願ひするわ」

私は髪の乱れをさわっと直して、入り口に向かつて答えた。

するとすつとフスマが開いて、女中のお駒さんが入ってきた。
『ご飯という米を炊いた主食と豆のスープ、季節の野菜のピクルス
』といつ定番のメニューを卓袱台に並べてくれた。

「あら？ お連れ様が見えませんね」

アースがいないことに気づいたお駒さんは、首を回してキヨロキヨ口と部屋の中を探すように眺めた。

「やうなの。ちょっと早朝から出かけてるのよ。帰りは夜になるかも知れないわ……」

「そうなんですか……。じゃあ、ひとり分はお下げしといたまつがよろしいですかねえ?」

「ええ。せっかく持ってきてくれたのに、ごめんなさい……」

「いえいえ。じゃあタケからおふたり分お持ちしますね」

お駒さんは手際よくアーネスの分の食事をお盆に載せていった。一つむき加減になつたお駒さんの結い上げた髪にきれいな細工のかんざしが刺さっているのに気づいた。

木製の玉かんざしで白い貝か何かで花の模様をはめ込んでいる。

「とってもきれいね。そのかんざし」

「まあ……。ありがとうございます」

お駒さんは少しばにかむように微笑んで、かんざしに軽く右手の指を添えた。

「主人からの贈り物なんです」

「まあ、素敵ねえ!」

私は六三郎からもらつたかんざしのことを思い出した。

使い方がわからなくて一度も髪に挿したことはないけれど……。

「私もかんざしを持つていいけど、使い方がわからないの……」

包みからかんざしを取り出しお駒さんに見せた。

「あい、これはいいかんざしですねえ。鼈甲に金の蒔絵で家紋が入つてゐる。さすが七重様、相當な上物ですわ」

「やうなの？」

お駒さんは皿をキラキラとせめて大きく頷いた。

「このかたばみの家紋は……お武家さんの家紋ですよね？ 七重様のいいお人ですか？」

「え……ええ、まあ」

夫だもの……。「いい人」と言えるのよね。

「このかんざし、きっと七重様にお似合いでですよ。よろしかつたら髪に挿して差し上げましょうか？」

「お願ひしていい？」

「ええ、喜んで！」

お駒さんは頷いて、お盆を入り口のフスマの前に下ろした。
そしてキモノの袖をまくつて、私の後ろに中腰で座つて、

「失礼しますね」
と私の髪をまとめ始めた。

まとめた髪を後頭部でねじり上げ、かんざしに毛先を巻きつけてから向きを変え、髪に挿し込んだ。

「はい、できましたよ」

早っ！ 一分もかからなかつたわよー。

「す、す、……。上手ねえ、……」

鏡を見るといつもとは違つ落ち着いた雰囲気の自分がいる。城にいるときはいつもアーニスに髪を編んでもらつたり、結つてもらつたりしてたけど、こんな髪型は初めてだわ。首を捻つて角度を変えると六三郎のかんざしが見える。

八一 26499 | 2976八

「よくお似合いですよ」

「ありがと、嬉しいわ」

にっこりと笑つお駒さんに私も微笑み返した。

そして、お駒さんの手にそつと小粒のルビーを握らせた。

「いえいえ！ とんでもありません！」

お駒さんはぶんぶんと首を振つて、ルビーを返そうとした。

「いいのよ。小さなものだし。紅玉は愛を育てる石だと言われてるから、お守りに持つてて」

私はお駒さんの手をぎゅっと握つて首を振つた。

「…………ありがとうございます。大切にします」

根負けしたのか、お駒さんは嬉しそうに笑つて頭を下げた。

お駒さんが部屋を出て行つた後、私は改めて鏡を見た。

かんざしを挿した私を見たら、六三郎は何と言つだらう……。
きれいだと思つてくれるかしら?

「これをそなたに。母上以上に愛する女に出会えたら渡そうと思つ
ていたんだ」

私をまっすぐに見つめる六三郎の迷いのない表情を思い出す。

六三郎のお母様はどんな女性だつたんだろう?
きつと優しくてしとやかで、でも強い、素敵な女性だつたに違
ない。

なのに、「母上以上に愛する女」と言つてくれた……。

会つてまだ数日にしかならない私を。

そんな六三郎を、どうして私は信じきることができるないんだろう?
確かにものを求めて、いつも彷徨つている私の心。
どこにいても、だれにいても、そこは自分の居場所ではなによつ
な気がして……。

あの人なら、どこかへ飛んでいきそうな私の心を捉まえていく
れるかも知れないと思つた……。

襟足の後れ毛をそつと撫でつけながら、私はじばりく金色に輝く
かんざしの家紋を見つめていた。

アニスが帰ったのはすっかり口も暮れてまもなく翌日になつた
いつ時刻だった。

「ただいま帰りました～～～」
窓が開くと同時に弱弱しい声がして、ほんぐじゅうたんから窓
の棊に跨るアニスが見えた。
苦手なじゅうたん飛行ですっかり憔悴しきっているみたい。

「おかえり！ 無事で良かつたわ」
私は駆け寄つて、アニスを部屋の中に引っ張り込んだ。
何故かアニスは左手に白い花を持っていた。

「その花は？」

「ああ……。くちなしという花らしいです。道中咲いてたんですよ。
いい香りでしょ？」

ちょっと苦笑いのような表情で花を見ながらアニスが答えた。
確かに、甘い、胸をくすぐるような香りがする。

「ほんと。いい香りね。それはどうとお腹すいたでしょう？ お駒
さんに頼んでアニスの分の晩ご飯は置いといてもらつたから

「ありがとうございます。ふ～……」

アニスは卓袱台の側の座布団に座り、汲み置きの水を一口飲んだ。
そして、その水の中に手にしていた白い花を差すと壇を切つたよ
うに話しだした。

「やつぱり姫様の誤解でした！ 六三郎さんと伍助はなんでもあり

ません」

「やうなの?」「

「はい。あの伍助という男、……、水晶で六三郎さんと抱き合つていた相手ですが、あれはどうしようもない女たらしです！私のことも口説くつとしたぐらこですから」

「アニスは美人だもの。口説かれても不思議はないわ」

「六三郎さんがいながらですよー。」

アニスは憤慨したように首を振つた。

だらしない男が嫌いなのよね～。アニスつて、お堅いかり……。

……と思つた次の瞬間、アニスは晴れやかな笑顔を見せて言つた。

「でも、伍助は白状しました。六三郎さんのことは完全なる自分の片思いで相手にされてないって」

「相手にされてない……」

「それに、六三郎さんは私と姫様を間違えて必死で走つてきましたよ。人違いだと判ると見ていて氣の毒なぐらこ肩を落として」

「…………」

「姫様のことをとっても心配していました。ジパング中を周つてでも探し出すとも言つてましたし、姫様以外の人を愛したことなど断じてないとも言つていました」

胸の中に何かがじんわりと染み出してきて、涙が出来になつた。

「どうして、今、ここに六三郎がないんだろう？」

「……どうしてもっとしっかり私を捉まえていてくれなかつたの？」

六三郎に呪いをかけた拳句、逃げ出したのは私なの……。判つているのに自分勝手な憤りが止まらない。

「だったら、どうして多兵衛さんにキスしたり、伍助に抱きついたりしたの？」

涙が出来たのをまかすため、私はふいと顔を反らして聞いた。

「それは、姫様が六三郎さんに聞いてみてください」

アニスは落ち着いた口調で答えた。

「とにかく、六三郎さんの言葉に嘘はないと私は思いますよ」

「……じゃあ、私は勘違いで六三郎に性転換の呪いをかけちゃつたつていうことなの？」

山道で「仕方ねえな」と言しながら私を負ぶつて歩いてくれた六三郎の優しい声を思い出す。

結ばれた夜の腕枕、「七重を幸せにするためにこの剣の腕を活かしたい」という言葉を思い出す。

翌朝、恥ずかしくてお互いの顔が見れなくて、そんなふたりがおかしくて大笑いしてしまつたあの瞬間を思い出す。

「……どうしたらいいの？」

私は泣きそうになりながら泣きつむいた。

「後は六三郎さんの魔法を解いて、話しかけていいんですよ。迷つ」とじやないと思いますよ」

「アーニー、お前がやるんだよ。」

アーヴは優しく声で言った

「……………でもねこのよ…………」

私は握りこぶしに力を込めて搾り出すように呟いた。

「は？」

何を言つてゐるのかといつてアーネスは首を傾げた。

卷之三

「死了」！？

「私、解除魔法を知らないのよ～～！！」

私は全身の力が抜けたへなへなとその場に崩れ落ちた。アーネスがあるあるしながら丘寄つてくるのが見えた。

あの魔法をかけたときは、単純に六二郎の浮氣封じのつもりだったから、まさかこんなことになるとは思ってなかつたのみ……。

「……………ちょっと！姫様、解けないって……、ビーするんですか！――

? ?

「私の方が聞きたいやよーー！！！！！」

私は頭を抱えて床に沈みこむように首を振り続けた。

翌日、私とアースは長く留まっていた温泉宿を発つことにした。

結局、六三郎にかけた魔法を解除するためには、一度アムランに戻つてお母様の一族である魔族に教わりにいくしかないという結論に至つたのよ。

……とは言つものの、私はお母様方の親戚には会つたこともないし、お母様以外の魔族に知り合いもいなければ、魔族の国の場所も知らないんだけどね。

家出しておいてこんな中途半端な状態で戻りたくはないけれど、いつたん城に戻つてお父様に相談するしかない。

「一生六三郎さんを女性のままにはしておけないですしね。王様からカミナリが落とされるのは覚悟して戻るしかありませんね」
アニスは苦笑した。

「『めんなさい』……アニス。アニスに咎めがいかないように取り計らつから」
好き好んでアムランを離れたわけではないアニスを騙させるわけにはいかないわ。

全部私の我がままのせいなんだもの。

「いえ。強引について来たのは私ですから

と言つアニスに私は首を振つて見せた。

「今後もアニスには側にいてもらいたいから、私に拉致されて仕方なく、しかもずっと戻るように説得していた、ということにして。そつすればお父様はアニスを今後も私の側仕えにしてくださるわ」

アニスは納得のいかないような顔をしていたけど、最後にはしぶしぶ頷いた。

「でも……」

胸の辺りに何かがつかえてるような感覚がして、私は小さく呟いた。

「でも？」

「アムランに戻る前に……。一田六三郎に会って行きたい。謝りたいし……。聞きたい」ともあるし……。何より不安なの……。このまま会えなくなつそうだ……」

「姫様……」

私は昨日見た不吉な夢を思い出していた。
あれはただの夢ではない気がする……。
六三郎の身に何か危険なことが起きやうな……。

六三郎のぬるつとした血の感触を思い出しても震いした。

「そうですね。では、六三郎さんに会いに行きましょう。常陸の国まではじゅうたんでひとつ飛びですしね
アニスはこいつ笑つて頷いた。

「……でも、今度はランプに入つてもいいですか？」
言ひにくやうに言つて、アニスは私の顔色を伺つた。

「いいわよ」
私は吹き出しそうになつた。
昨日の長距離飛行で、もうじゅうたんはこいつだと思つてゐるのだろう。

「もう少し人気のないところに移動したらランプに入つてね

私たちはけもの道を通りて、ずんずんと山の奥深くに入つていつた。

名も知らぬ雑草が腕や足首を引っ搔いて、肌に細かな傷を残していく。

かゆみの残る傷を瞬時に治癒魔法で治し、ベール状の結界を張りながら歩くことにした。

それにしても、なんて深い縁なんだろう。

初めてジパングに降り立つたときは、見渡す限りの緑の木々にめまいがした。

どこまでも続く濃緑をこれまで私は見たことがなかつたから。そして、しつとりとした空氣とむせ返るような木々の匂い。

ぴつたりと体を包む湿氣に驚いて、何度も肌をこすつてみたのを思い出す。

汗だくなつた肌が気持ち悪くて、六三郎が眠つてゐるのをいいことに水浴びしたわね……。

びっくりした六三郎が駆けつけてきて……、あの時は恥ずかしかつたな……。

色々なことを思い出しながら黙々と山道を歩いていくと、出し抜けに数人の騒がしい気配を感じた。

ガサガサといつ草を搔き分けて走る音や、木の枝が折れる音、金属同士がぶつかり合ひ音や悲鳴などが聞こえてくる。

「ひっ……！」

「そこかっ！」

鋭い何かがドスドスドスッと木や地面に突き刺さる音がした。

え！？ なになに？ 何が起こってるの？

まさか……戦闘？？

驚いて立ち止まっているとアーニスに肩を掴まれた。

「姫様、逃げましょー！」

「いえ、逃げても逃げ切れるわけはないわ」

そう判断した私は、次の瞬間に迷わずアーニスをランプに封じ込め、
気配を消す結界を張つて騒ぎが収まるまで待つことにした。

「ぐうっ……」

押し殺すようなうめき声と人が倒れるようなドサッという音が聞
こえて急に静かになった。

「やったか？」

「おやけー」

続いて、くぐもった男たちの声が聞こえて、彼らが倒れた男？の
側に駆け寄る気配がした。

「どうめを

鋭い刃物で人の肉と骨を貫くような鈍い音と悲鳴が聞こえた。

「ぐわっ……！」

私は悲鳴を上げないように両手で口を押さえているのが精一杯だつた。

心臓が口から飛び出しそうに緊張し、体全体が震えていた。彼らに私の存在が気取られることはないとわかつていたけれど……。

「悪いなアサギ。お前に恨みはないんだけどよ。あの世で伍助に会えるといいな」

「伍助？？？」

「ムダ口叩くな。行くぞ」

また草木を搔き分ける音がして、数人が走り去つて行つたのが判つた。

彼らの気配が消えて十分に遠く離れたと判ると、私は結界を張つたままアサギと呼ばれた男に近づいてみた。

うつぶせに倒れているアサギは背中や手足のキモノが破れ、滲んだ血の量から致命傷を負つていると判つた。

私はアサギの上にかがみこんで背中からおそらく心臓に至るまで貫かれた致命傷を止血し、治癒魔法で回復させにかかりた。

もしかして……、あの夢は六三郎ではなくてこの人のことだったの？？

触れられたことに驚いたのか、アサギは体を素早く捻つて私の方を見た。
死に掛けているというのに……、どうにそんな力があつたのかしら？

瀕死のアサギの抵抗にも驚いたけれど、彼がまだほんの少年だったということにも驚いた。

ジパングの人間にしては珍しく淡い薺色の目を大きく見開いていた。

しかし、アサギの目は既に焦点が定まらず、その目に私の姿は映つていなかった。

そして、最後に一言、

「……」
「……すけ、あに……き……」

と呟くと意識を失い、また地面にドサリと倒れた。

その後はただ風が木々を揺らす音だけが辺りを包んでいた。

12・ナエマ（後書き）

第一部終了

第一部に続く

第一部は伍助が活躍します。
伍助の過去が明らかに！

今回はじよいよ六三郎とナホマが再会します。

前回は男に襲われかかるわ元力ノに変態呼ばわりされるわ、さんざんな目に遭つていた六三郎ですが、今回もやつぱりひどい目に遭います。

可哀想なのでちょっとハッピーになつて欲しくて扉絵にラブラブっぽいふたりを描いてみました。（挿絵作家が）

軽薄忍者伍助の旅の目的もわかつてきますので、「期待ください。

♪ 127036 — 2976 ♪

故郷である常陸国を出て一日前俺達は下野国に入った。

「やつと下野か」

新九郎はそう感想を漏らしたが、やつとも何も旅を始めてまだ二日目なのになに言つてやがんだ。

「お前は、無理やり付いて来ながらだらしないぞ」

「無理やつとはひでえな。せつかくの新婚旅行を

「何が新婚旅行だ！」

俺が叫ぶと、伍助が同調する様に参加してきた。

「六さん、の言つ通りです。これくらいでやつとか言つてやが
とても京までいけねえんぢやないの？」

「うせえな。てめえには関係ねえだろ」

「あるんだよ。ここの穀漬し」

「誰が穀漬しだと」

「てめえだよ。無一文の上に飯の用意すら手伝いやがらねえくせに」

「俺の金を巻き上げたのはてめえじやねえか」

「人聞きの悪い事言いなさんな。てめえが自分で金を賭けて負けた
だけじやねえか。自業自得だろ」

「ちつー。」

新九郎は大きく舌打ちしたが、匕首やら伍助の勝ちみたいだな。

まつたくこいつらは相変わらず仲が悪いな。

「どうしてお前らはそんなに仲が悪いんだ？ ちよつとは仲良くな
来んのか」

すると伍助は呆れた様な目を向けてきた。

「なに言つてんっすか。こいつは敵なんっすよ？ 道場破りに来た
のをもう忘れちまつたんっすか？」

「うへへん

そう言えばそうだつたな。

「おいおい。六三郎なにそんな奴の口車に乗つてんだよ。元敵同士
なんて燃えるシチュエーションじゃねえか」

「誰が燃えるか！」

すると新九郎が俺の肩に手を回してきやがつた。

「つれなくするなよ。ロハオ」

「誰がロハオか！」

俺は新九郎の腕を力いっぱい振りほどいた。
つて言つか、じゃあ、お前がジユリヒットかよ。

どんだけ」つこジユリヒットなんだよ。

まつたく調子が狂うが、意外にも新九郎はある意味役に立つた。

旅の初めの日、新九郎は夜になると俺に夜這いをかけようとした
のだが、伍助も同じく夜這いをかけよつとした。

寝ている俺の前で鉢合わせた一人は、とっさに飛び退いて対峙し、
譲れ、お前こそ譲れと言ひ合つた後、戦い始めたのだ。

本気でやつあつたりどつだか分からぬが、びつやぢら接近戦では

新九郎に分があるらしく伍助は距離を置いた。

だが距離がひらくと伍助は新九郎に向けて手裏剣を連射する。

深夜で視界も悪いところに飛び道具を連射されても新九郎もさばききれず身を隠すしかなかつた。

伍助が俺に近づけば、新九郎が刀を振りかぶつてやつてきて伍助は逃げ去る。

新九郎が俺に近づけば、伍助が手裏剣を飛ばして新九郎は身を隠さねばならない。

結局俺は、どちらからも襲われずに済んだのだった。
何が役に立つか分からぬものだな。

さらに道を進んだ俺達は小高い丘に立つ城を見つけた。
とは言つても最早廃城に近く今にも朽ち果てそうだったが、俺はその城の事をよく知つていた。

「おお。あれが有名な島丘城か」

「知つてるんっすか？」

「ああ。有名だからな」

だが新九郎がそこに口を挟んだ。

「どう有名なんだ？」

「なんだ？ お前も兵法者の端くれなんだろう？ どうして知らな

いんだ？」

「俺は剣一筋なんだよ。とにかく説明しろよ」

兵法者と言えば軍略にも通じていなければ行けないって言つのこと、まったくこいつは。と俺は白い目を向けたが、新九郎ぶはどこ吹く風だ。

「まあいい。十数年前この城を巡つて戦になつたんだ。しかしこの城の城主はたいした奴ではなかつたが、配下に武将に斎賀某という名将が居てな。その斎賀某の活躍で城はなかなか落ちない。そこで攻め手は一計を講じたんだ」「うむうむ」と俺の話を聞いているが、伍助はあまり楽しそうではない。

まあ忍者にはあまり興味の無い話か。
だがこの手の話が嫌いではない俺は構わず話を続けた。

攻め手はその斎賀某さえ居なければ勝てると考え、そこで城主と斎賀某との離間の策を立てた。

約束どおり攻め手の合図に合わせ斎賀某が城内に火を放つ。くれぐれもお間違ひ無い様に。という手紙を持たせた者を城内に潜り込ませ、そしてわざとその者を城主に捕まえさせてしまつたのだ。

勿論手紙の内容は嘘つぱちで、斎賀某が裏切るなんていうのは事実無根だった。

だが城主はまんまと騙され、城の守りの要である斎賀某を手打ちにしてしまつたのだ。

」つして強敵をまんまと排除した攻め手は、その後あつさつと城を攻め落としてしまったといつ。

「ほー。そんな事があつたのか」

「ああ。見事な作戦だろ」

新九郎は確かにと頷くが、伍助は相変わらず興味なさげだ。俺は伍助に矛先を向けてみた。

「お前はどう思う?」

すると伍助は肩をすくめ、ことさらおどけた様に口を開いた。

「いやー。まったく見事な作戦つてやつですね。すじいもんつすよ

だが俺は伍助の態度に違和感を感じた。

いつもどおりの伍助の口調なのだが、無理に明るく振舞つている様にも思えたのだ。

「どうかしたのか?」

「え? 別に何もありゃしませんよ?」

「いや。それなら良いんだが……」

「氣のせいだつたか?」

俺達はさりに道を急いだが、今日中に下野国を出のせぬがこ無理か……。

七重の居場所を探し当てる為、早く京に行きたいのだが気持ちばかりが焦る。

日が暮れいつもどおり伍助が晩飯の為獲物を取りに行つた。
俺はかまどの用意をする。

そんな俺を、相変わらずまったく働くことしない新九郎が見つめ満足げに口を開く。

「こうやってると新妻が夫の為にいそそと飯の準備をしている
ようだ」

「誰が新妻か！」

大体こいつはさつき、俺の事をロミオとか言ってなかつたか？
だつたらお前が女役だつ！と思つたが口には出さない。

ホモの考える事はまったく分からん。
相手にしても疲れるだけだつ。

だが俺は相手にしない心算だったが、新九郎はそうではなかつた。

「さあ、邪魔者がない内に愛を確かめ合おうじゃねえか」

と身の毛もよだつ事を言いながら、なんと俺に擦り寄つてきやがつたのだ。

しまつた！ かまどの作るのに刀を置いてたんだ。さすがに素手で新九郎を相手にするのは難しい。

「ちゅっちゅっと待て！」

新九郎は片手突きを得意とする事からも分かるとおり、かなりの怪力である。組討（寝技）になつてはちょっと勝ち目が無い。ましてや俺は今女の身体なのだ。

慌てて飛び退つて俺は逃げたが、新九郎はすかさず俺の手を掴み俺を引き寄せた。

さすがにこれはまずい。

「新九郎。落ち着けつて」といつ俺の顔にも微かに不安な気持ちが表面に出てしまつ。

伍助相手ならいつも押し倒されても撃退しているが、新九郎の腕力は伍助とは比べ物にならないし、それに伍助はどこか冗談っぽい雰囲氣があるが、こいつはマジで来てる感じがするんだよな……。

だが不安げな表情を浮かべる俺に、むしろ満足げな顔を新九郎は俺に近づけてきた。

「なに、怖がることは無い。優しくしてやるよ」

ぞわぞわっと俺の背に毛虫が這う様な寒気が襲つ。

「う……」

「う……」

「伍助——！」

俺は耐え切れずについ叫び、その瞬間、新九郎が飛び退つた。

今まで新九郎が居た場所を手裏剣が通り過ぎ、少し離れたところに立つ木の幹に突き刺さつた。

「ちー！ もう少しだったのに」
手裏剣が飛んできた方へと顔を向け、新九郎は憎憎しげに叫んだ。
が、茂みから顔を出した伍助はいつもの様に飄々としている。

「てめえこそ、なに抜け駆けしてんだよ」

「伍助！」

伍助の姿に安心して俺は思わず叫んだ。

「六さん俺がついているから大丈夫ですよ」

伍助はそう言つと、俺と新九郎の間に割つて入る。

悔しがる新九郎に、伍助の背中から俺は言い放つた。
「今度からお前も伍助と一緒に獲物を取りに行け！」

「くそ！」

と悔しがる新九郎を伍助はにやにやと見つめる。

「しかしおかげで助かつたよ」

伍助をこんなに頼もしく思つたのは初めてだ。

「いや、それほどでもないですよ」

「いやいや、ほんと危機一髪で……。って、まさか、俺が襲われる
のを茂みからずっと見てたんじゃないだろうな？」

「え？ そんな事ないですよ？」

伍助はすました顔でそう言つたが、俺は確信した。

せっぱつ、ここも油断ならぬ。

アサギという明るい鳶色の髪の少年はなんとか一命を取り留めた。私とアースは彼を元の温泉宿に運び込み、引き続き魔法で治療したけれど、かなり失血していくこの分じゃ回復には数日は必要だろうと思われる。

「どうですか？ 姫様」

布団に寝かせたアサギの体に手を当てて組織の回復を促す私にアースが尋ねた。

「うーん……。傷は全部ふさいだはふさいだんだけど

「まだ危険な状態ですか……？」

「一応今は越えてるのよ。ただ、失血してて組織の回復にまわすエネルギーが足りないのよね」

それに、さすがに一時間以上ぶつ続けて魔法詠唱していると堪える……。

私の体力にも限界が来そうだわ……。

輸血できれば大幅に回復させられるんだけど、アサギの血液はどうやら私たちや宿の誰とも適合しないタイプでそれもできない。

「この子……。ジパングの人間じゃないかも知れないわね」

「そうなんですか？」

「髪の色とこに田の色とこい、血液の型もちよつと違うのよね

改めてアサギの顔を見てみると、穏やかな寝息を立てている。

持参の薬を使って痛みを抑えたのと、傷口を完全にふさいだので、状態が安定したんだろう。

この年頃の少年にしては色白で、髪の色も白わせると田の光に溶けてしまいそうな優さを感じる。

「この子、最後に伍助兄貴って言つたのよ」

「それがあの伍助なんですか？」

アニスはちょっと驚いたように田を丸くして言つた。

「服装とかもかなり似てない？」

道場で見かけた伍助の黒装束を思い出せば、アサギの黒装束も制服と言つていいくらい似ている。

「そう言わればそうですね。……ああ、思い出した！」
出し抜けにパンと手を叩いてアニスが頷いた。

「伍助は自分のことをニンジャ……と言つてましたよ。ニンジャだからこんなに素早いのだとが」

「ニンジャ？」

……なんだっけ？ ニンジャって……。

と首を傾げた瞬間、目の前のアサギがまばたきぐらの素早さで起き上がり、私の首に右手を回して抱え込んだ。

何この力！？ これが瀕死の怪我人の力なの？？

「姫様っ！？」

両手で口を押さえて田を見開き、思わず近寄つて来ようとするアースを威嚇するように私の首を引き上げ尋ねた。

「何者だ……？　何故伍助兄貴を知つてゐる……？」

苦しい息の下しほり出すような声だった。

あ、やつぱりやつとのことでしゃべつてるのね。
これだけの怪我負つてちや当たり前だけど。

「命の恩人に対して……！」ほつ。ずいぶんな仕打ちねえ……」

「答える……。お前たちも、里が放つた刺客……なのか？」

「私たちはねえ……」

「『』の無礼者……」

説明しようとする私より早くアースの平手打ちがアサギに炸裂し、そもそも失血しているところを必死で堪えていたアサギはめまいを起こしたのか一瞬ふらついてばつたりと倒れた。

「ア……アース……！」

「あら？　『』めんなさい。つい……。大丈夫かしら？」

ぶつ飛ばした相手が重体だったことを思い出してアースは慌ててアサギに駆け寄る。

アサギは軽く気を失つたらしく、しばらく動けずにいたけれど、やがて頭を押さえながらのろのろと体を起こした。

「大丈夫？ サツキまで生死の境をさまよっていたんだもの。無理しない方がいいわよ。そ・れ・に！ 私たちは敵でも刺客でもないの。伍助って人とは旅の途中偶然会ったのよ」

まだ目を回しているらしいアサギに私はできるだけ優しく、でも断固として言った。

「兄貴と会つた……？」

「そうよ。で、あなたが“伍助兄貴”って呼びながら倒れてたから、彼の知り合いなんだと思って助けたの」

「……本当に？」

「私たちに嘘をつく理由がある？ あなたを助けて私たちに何の得があると思う？ 里の刺客だつたら仲間がとどめを刺したあなたを助ける必要はないんじゃないの？」

「……」

安心して力が抜けたのか、アサギは上体を支えていた左腕の力が抜けたその場に崩れるように倒れた。

倒れたにもかかわらず、アサギはなんとか私たちから情報を引き出そうとする。

「あんたたち……本当に、伍助兄貴と……知り合いなのか？」

アサギのしぶとせにやや呆れたのか、アーネスが腕組みをしながら肩をすくめた。

「あなたの言う伍助が二ンジャとやらで、やたらに足が速くて、女にだらしない2枚目[氣取り]だとしたらそりだわね」

「言いたい放題だけど……まさに、的確。
でも……怪我人に言つことじやないわよ。アニス……。

「兄貴は……どこに?」

「私たちが会つたのは常陸の国だつたけど、今はもうどこかに向けて出発してゐかも知れないわね」

それを聞いたアサギが起き上がる前に私はアサギの体を軽く押さえ、魔法で筋肉を弛緩させた。

「う……」

「動けないでしょ? そんな体で探しに行こうつたつて無理よ。しばらく眠つて体力を取り戻して。すべてはそれからよ」

私はそのまま続けてアサギに催眠魔法をかけて休ませることにした。

この調子じゃ回復がどんどん遅れるばかりだもの。

衰弱している上に魔法で押さえつけられているアサギは、抵抗する力もなく、深い眠りの底に落ちて行つた。

アサギは一昼夜眠り続け、私はその間魔法で栄養を送り続け、傷の回復を促進させた。

彼の顔色は日に見えて良くなり、透けるように青白く感じられた頬に赤みが感じられるようになった。

2日後の朝、夜を徹して断続的に魔法をかけ続けた私の方に限界が来て、つい、横たわるアサギの上にかぶさるようにしてうたた寝をしてしまっていた。

私の重みに違和感を感じたのか、とうとうしたまどろみの中にいたアサギがゆっくりと目を開いたようだつた。

「へ……ん？」

途端にアサギの頭にはっきりした意識が戻ってきたのか、跳ね起きるよに上体を起こした。

そして、どうやら起き上がりのうとしたものの、お腹の辺りに私が引っかかっているのに気づいて思に留まつたようだつた。

「あんた……」

アサギは無意識にそろそろと右手を伸ばし、私の髪に軽く触れた。

「ああ……気がついたのね。おはよ……」

疲れ切つていた私は体を起こすとともにせず、首だけアサギの方に向けて言った。

しかも、きつと寝ぼけていたのね。

「寝かせて～～、あと5分～～」

と、起こしに来たアニスか六三郎に懇願するような情けない声でアサギに訴えていた。

「寝かせて……つて、あんた」

アサギは吹き出して、くつくつと笑った。

「あんた、すゞい姫様だな。そんなんでよく今まで無事でやつてこ
れたよな」

「や～めてよ～。六三郎みたいに……」

「六三郎？」

「そうよ……。いつも、私にお説教するんだから……六三郎は…
…。

「そなたは女なんだから氣をつけないと!」つて……。

六三郎……？

私ははつと正氣を取り戻し、がばあつと飛び起きた。

「やだつ！ 私うたた寝してたつー？」

アサギは目を丸くして私の様子を見守り、呆れたよつて口を開いた。

「俺の上うたた寝するつて……どりごう神経してんだ

「う……じめんなさこいつ」

疲れてたのよ～～！ 自分が眠つちやつてるなんて自覚もなかつ
たし、意識を失った記憶もないのよ～～。

アニスにバレたら大目玉だわ。

「得体の知れない男の上うたた寝するなんてつー……」と。

……今朝は、早朝から薬を買ひに（また苦手なじゅうたん）町に出かけてるからいなければ。

「てか……俺に何かされるとは思わないのかよ？　あんたに乱暴した男なのに」

ポイント違うだろ……とアサギは苦笑した。
笑うと思つたよりあざけなくて、ああ、この子本当にまだ少年なんだと思ひ。

なので……、

「何もできないわよ。瀕死の子供だし」と、つい本当のことと言つてしまつた。

「おい。子供つて……、俺はもう一人前の忍だぞ。あんたみたいな女ひとりぐらごどりにでもできる」

「一人前つて、あなたいくつなの？」

「15。……つて、だからポイントはそこじゃねーって

アサギは少し怒ったように頬を赤くした。

「良かつた……。元気になつたわね」

体力もずいぶん回復して、普通の状態で会話ができるようになったアサギを見て、私は微笑んだ。

「あ……ああ」

虚を突かれたように、アサギは首を縦に振った。
それから、急に表情を硬くして尋ねた。

「……どうして俺を助けたんだ？」

1／10秒ほどどう答えようかと考えたけど、別段取り繕う必要はない、後でアサギの記憶処理なり何なりいつでもできるのだと思ついた。

「伍助は私の知り合いと旅をしてくるのよ」

「兄貴が？」

「ええ。伍助が刺客……？ に襲われたところを彼が助けて、それ以来一緒に旅をしてるみたいなの」

「そうなのか……」

よほど意外だったのか、アサギは考え込むように視線を下に向けた。

「で、知り合いの知り合いの知り合いだから、なんか縁を感じて助けることにしたのよね」

「……」

アサギはまた呆れたように口をへの字にして私を見上げた。
な……なによ。その救いようのない愚か者を見るかのよつな田つきは。

「ふつ」

じつと見返す私の表情がよっぽどおかしかったのか、アサギは再び吹き出した。

「もつ……勘弁してくれよ。胸の傷が痛えよ……」

「失礼ね！ 勝手に笑つて何言つてるのよ！」

怒鳴つたところでアサギの笑いは収まらない。またくもつ！ 元気すぎるでしょ！ この怪我人は！

「命の恩人にずいぶんいい態度よねつ！ あなたは」

「……悪い。くくつ」

謝りながら、「痛え」と目に涙を浮かべて爆笑してゐる……。ひとしきり笑つた後、アサギは、

「……ありがてえけど、俺を助けたらあんたらも危なくなるとは思わなかつたのかい？」

と急に真剣な顔をして言つた。

「思わなかつたわね。それにあなたも危なくないわよ。完全に死んだと思われてるから」

「確かに……どどめを刺されたのは覚えてる」

「あなたは奇跡的に（魔法の力で）助かつたのよ。普通なら（絶対）

死んでたもの

心の中で括弧を付け足して私は言った。

アサギはしばらく無言で私の顔を見つめていた。何を考えているのか、その表情から窺いることはできなかつた。そして、よつやく口を開いた。

「俺はアサギ。あなたの名前は？」

「な……七重」

「七重か……」

アサギは私を見つめたまま掛け布団の端をぎゅっと握んだ。

> 227037 — 2976 <

「世話になつたな七重。俺はもつ行く。あんたたちを危険な世間には含ませたくない。恩を返せなくて申し訳ないけど……」

そして立ち上がり、窓の方に歩いて行つた。
いつも通り窓から抜け出そうとしているんだろう。まだ完全な体じゃないのに……。

「待つてアサギ。見て欲しいものがあるの」

私はその背に声をかけた。

アサギはとつと振り返つて私を見た。

「アサギ、私の目を見て」

言われるままにアサギは私の目をじっと見つめた。その動きは自分の意志を手放した木偶人形のようだった。

私はゆっくりとアサギの前まで近づき、歩みを止めたところで彼の目の前で両手を打った。

アサギは気を失い、床の上にドサリと崩れ落ちた。

あと3日は彼を行かせるわけにはいかない。

このまま行かせては、アサギは伍助の元にたどり着くことすらできなかっただろうから。

伍助と新九郎が足を引つ張り合つた結果、平穩に旅を続けていた俺は下野国を通り過ぎ武藏国にたどり着いた。

京までの道のりを考えればまだまだだが、国を超えるところのは一つ節田を通過した様で気分が良い。

「よしー、武藏だー!」

「武藏って言つたつて京まではまだかなりあるじゃねえか」

道の脇に立つ「こゝれより武藏国」と彫られた古びた石碑を通り過ぎ叫んだ俺に新九郎が茶々を入れてきやがつた。

折角気分良くしてゐるつてのこ、まったくひねくれた奴だな。

「順調に進んでいるんだからいいだろ。ぶつくて言つたらついてくるなよ」

だが俺の言葉に新九郎は動じた様子も無く、いや、むしろ俺に言い返されたのが嬉しい様で唇を右上に歪ませ皮肉な笑みを浮かべている。

相手をして欲しくて突つかかつてくるつて子供かよ。

しかしふと気付けば、こいつ時は新九郎を牽制する伍助が会話を入つてこないな。

後ろを歩く伍助を振り返ると、俺の視線にも気付かず、いつに無く深刻そうな表情で俯きながら歩いていた。

「どうした伍助？」

「え？ 何でもないですよ？」

俺が声をかけた瞬間、顔を上げいつも通りの口調で話す伍助だったが、やはりさつきの表情は気にかかる。

「そうか？ かなり深刻そうな顔をしてたじやないか

「いやー。実は俺はそろそろお暇をせて頂こいつかと思いやしてね

「なんだって？」

あれだけ俺に執着していた伍助の突然の言葉に俺が驚いていると、新九郎が肩をまわして來た。

「それは俺達一人の仲を認めると受け取つて良いんだな

「ちげえよ」

伍助は冷たい目で新九郎を睨み、俺は肩にまわされた新九郎の腕を振り払つた。

だが新九郎は余裕な態度でにやつと笑つた。

「まあどうにじろお前が居なくなつたら六三郎は俺のもんだがな

そうかしました！

いくら女になつたからつて剣や組討の接近戦主体に鍛えた俺は、

飛び道具なんかでの戦いを主体に鍛えてきたらしい伍助に夜這いされても撃退出していった。

しかし、俺と同じく接近戦主体に鍛え、しかも人一倍腕力の強い新九郎に夜這いされて、力ずくで組み敷かれてはやばいんだった。

それになんだかんだ言つても伍助は手加減してたっぽいしな……。一度薬を盛りやがつたけど。

「何を言つてるんだ。仲間じゃないか。これからも一緒に旅を続けよう」「うせめて新九郎が居なくなるまではと、俺は伍助を引き留めたが、伍助は俺の考えを見透かした様に片目を瞑つて見せた。

「いやー。離れていても仲間は仲間ですよ

ちつ！ 駄目か。だがどうにかして引き留めないと俺の貞操の危機だ。

「でも、どうしていきなり別行動したいだなんて言つんだ？」

「覚えて無いっすか？ ここ俺と六さんが会つた場所の近くっすよ

「そう言えばそうだったかな。お前が追つ手とか言つに追われてたんだっけ」

本当は場所まではまったく覚えていなかつたが、とりあえず口を含ませた。

「おーおー。物騒な話じやねえか

「だから別行動するって言つてんだろ」

「いやいや。ちょっとまて」

うーん。追つ手に追われている伍助と一緒に居ると、伍助の居ない事を幸いに襲つてくる新九郎と一緒にいるのどどしが危険なんだろうか。

だが俺の考えがまとまらないうちに伍助は

「じゃあ。俺はこれで！」

と右手をあげた。

「おひ。わざと行け！」

じつして伍助は新九郎からの暖かい見送りの言葉を受け、道をそれで林の中へと姿を消した。

> 27116 - 2976 <

行つてしまつたか……。

しかしこれは今夜から新九郎の夜這いには気を付けないとな……。

俺がそう考えていると、突然俺の尻に新九郎の手が這い背筋がぞわりと泡だつた。

「てめえ！ なにしゃがるー！」

「思つたより柔らかい尻だな。俺はもうひょっこりかりした尻が好きなんだが」

「お前の尻の好みなんか知るか！」

くそ！ 夜に襲つてくるかと思つたら早速かよ！

俺は新九郎から逃げる為、伍助を追う様に林の中へと足を踏み入れた。

やつぱり伍助を連れ戻すか、いつそのことこのまま新九郎を撒いてしまうか。

俺はとにかく走り続けたが、新九郎は離れず追つてくる。

「いい加減観念しやがれ！」
「誰が観念するか！」

しかし伍助が林に入つてから俺もそれほど間をおかずに追つたはずなのに、さすが忍者と言うべきか中々伍助に追いつかない。

伍助も林に入つてからは駆け出したみたいだな。

だが、さらに俺が新九郎に追われながらも走り続けると、前の方から男の声が聞こえてきた。

伍助か？ とも思つたがどうやら別人らしい。

俺が足を緩めて木の陰に隠れると、追いついてきた新九郎もさすがに雰囲気を察したのか襲つては来ず横に並んだ。

木の陰から顔を出すと、なんと伍助と伍助と同じ様な服を着ている数人の男達が争つてはいる様だった。どうやら早速追つ手が現れたらしい。

「3人も追つ手を送り込んだのにまさか返り討ちにするとはな

「へつ！ 3人程度で俺を殺れると思ったのか」

「伍助が3人の追っ手に追われてた時って、俺と伍助が始めて会った時の話か？」

「それだと伍助は3人の追っ手に殺られかけていた筈だが、伍助ははつたりをかましている様だ。」

少しでも相手がびびってくれたら隙が出来るかもしれないし、相手に隙が出来れば戦うにも逃げるにも有利になる。

だが残念ながら伍助の目論みは上手くいったとは言い難い。

「だから今度はこうして6人で来たんだろうが」と男達の中でも格上らしい奴が言い、その言葉に伍助が小さく舌打ちをした。

まあ実際は3人でもやばかったんだから、6人相手じゃ話にならないだろうな。

男はいつも飄々としている伍助が表情を変えたのが嬉しいのか。楽しそうに笑う。

「そんな顔をするな。お前が寂しくない様にちゃんとアサギを先にあの世に送つておいてやつたんだからな」

「なんだと！」

「恨むんなら自分を恨みな。お頭に逆らつておいて手前の弟分が無事ですむとでも思つてやがったのか？ アサギが死んだのは手前の所為なんだよ！」

「くそ……！」

おいおい。なんだかかなり酷い話になつてそうだな。

これはさすがに捨てては置けないが、今はまだ飛び出すべきじゃないだろう。

以前伍助は2人相手なら勝つていたし、俺や新九郎は伍助の様な忍者じゃないが伍助に引けは取らないはずだ。3人対6人なら勝算は高いだろう。

だが以前伍助を襲つた奴らより一人一人が今回の奴らの方が強い可能性もある。

ここはぐつと我慢して奴らの注意が完全に伍助に向いた時に後ろから切りかかるべきだ。

俺がそう考えて身を潜めていると思いがけない所から声が上がつた。

「それは聞き捨てならんな！」

なんと新九郎が木の陰から奴らに向かつて姿を現しやがったのだ。

まさか伍助が殺られそうつて時に新九郎が手助けしようとするのは意外だったが、それよりもこの段階で姿を現すのはもっと意外だつた。

駄目だ。こいつは馬鹿だ。

こうなつたら俺だけでも隠れておこう。

相手も今新九郎が姿を現したのに、さらにもう一人隠れているとは思つまい。

思わぬ男の出現に身構える男達に向かつて、新九郎が啖呵をきつた。

「1人相手に6人がかりでも男らしくねえところを、弟分まで殺すとは許さねえ！ 僕が相手だ！」

おお。意外と男氣があつたんだな。
と俺が思つていると新九郎の顔が、俺が隠れる木の方へと向いた。

「そうだろ。六三郎！」

「なに！ もう1人居るのか！」

新九郎、死んでくれ……。

あまりの馬鹿馬鹿しさに脱力しそうになつたが、相手を勢い付かせる訳にもいかない。

俺は今更ながらも、腕を組みあえて堂々と姿を現した。

「ああ。まつたくだ。聞き捨てならん」

「くそ！ まさか伍助に仲間が居たとは。お前ら油断するな！」

男は身構えながら後ろに立つ男達に声をかける。

隠れておいて後ろから襲う作戦が駄目になつた以上、もう全力で戦うしかないが一応伍助に確認しておこう。

「伍助。何か聞き出す為に1人くらい生かして捕まえた方が良いか？」

「全員殺つちまつてかまやしゃせんよ。どうせここにひとりも言われた事をやつているだけで、詳しい話なんか聞いてやしねえんっすから」

伍助は吐き捨てる様に言つたが、自分を殺しに来た相手にもかかわらず、微かに哀れんでいる様に聞こえたのは氣のせいか？

だが今はそれを深く考えている暇は無い。

「よしー」と叫ぶと、俺は男達に向かつて突進した。

「こいつらが伍助と同じ技を使うなら距離を置かれては面倒だ。一気に突っ込んで接近戦に持ち込む必要がある。

しかし敵もそれは分かったもので、俺の突進に飛び退る。

「ぐわっ！」

男達のうち1人が叫び声をあげて倒れた。

見ると胸に手裏剣が刺さつている。俺の突進に男達が逃げる方向を予測した伍助が放つたらしい。

これで後5人。

俺達は奴らの手裏剣を警戒し木々に身を隠しなりを潜めている。

そして奴らも姿を隠した。

いくら忍者でもこんな森の中じゃ地面の草木を踏まずには進めな

いし、そうすれば音が鳴る。

そしてそれはこっちも同じ事。お互い耳をすませて位置を探りあう。

だが突然前方の茂みが大きく揺さぶられ、ガサガサと大きな音が辺りを支配した。

何かしてくるのか？と思つた瞬間背後に殺氣を感じ考える前に身を伏せた。

カツカツと寸前まで俺が立っていた場所を走り抜けた手裏剣が木の幹に突き刺さった。

ちつ！一人が大きな音を出して他の奴が移動する足音を紛らわせる作戦か。

どうやらこんなところでの戦いは忍者である奴らの方に一日の長がありそうだ。

ちょっと不味いか？

ガサッと俺の左前方で音が鳴る。どうやら新九郎も襲われて身を伏せたみたいだな。

だが不意にドサッと上から男が降つて來た。

その背には手裏剣が刺さり、その手裏剣が致命傷なのか落ちた所為かは分からないがすでに事切れている。

そうか。

奴らは森の中の戦いに不慣れな俺や新九郎を狙つてくるが、伍助はその俺達を見張つて、俺達を狙う奴らを逆に狙つてゐるという事

か。

とにかくこれで後4人。

よし。伍助の意図が分かつた以上、こつちも動くか。

間違いなく敵の罠だが、あえて音が鳴る茂みに向かって俺は走った。

奴らは知らないだろうが俺は着込み（鎖帷子）を着ている。
着込みは刺す物には弱いので手裏剣を完全には防げないがそれでも
1・2回くらいなら耐えられるだろう。

俺は頭を守るように身をかがめながら突進する。

「があ！」

俺の背後でぐぐもつた声が聞こえ、その後何か重いものが地面に
落ちる音。

どうやら俺を狙つた男をまた伍助が仕留めたらしい。

後3人。

俺は音が鳴る茂みへと突き進み、伍助の援護のおかげか結局手裏剣の攻撃を受けないまま茂みへと近寄る。

しかしガサガサという音は鳴り止まない。

俺は直感的に茂みを迂回して音が鳴る茂みの裏のさらに後方に回りこんだ。

するとやはり男が紐を片手に身を伏せていた。

茂みに隠れていたのならあそこまで俺が近づいてたのに逃げもせ

ず、平氣で音を鳴らし続けられる訳がないのだ。

「うわ！」

俺の出現に驚いた男は飛び跳ね逃げようとするが、俺は一気に距離を詰め奴の胸に突きを食らわして仕留めた。

後2人。

茂みで音を鳴らしていた男を俺が倒した為、辺りは静寂に包まれた。

だが暫くすると微かに草木を踏む乾いた音がするかと思つと、遠ざかっていく。

「六さん！ 奴ら逃げる気つすよ。追わねえとー。」

足音を消す必要が無くなつたのか、音が鳴るのを気にする様子も無く伍助が俺に近寄つてきた。

「いや。逃げる奴まで殺らなくていいだひつ」

俺の言葉に奴らを追いかけていた伍助の足が止まつた。

「本当に良いんですかい？」

「ああ。無駄な殺生はしたくないからな

しかし伍助は不満そうだ。

「確かに前の弟分を殺した奴らだ。憎いのは分かるが……」

「いや、なんとも思ひぢやいねえと血やあ嘘にならぬつすナビ、奴らにそれをやれつて命令をした奴がこるつすからね」

「じゅあ、ビヒトあこつ等を追ねつとしたんだ?」

俺はもう終わったのかと茂みから顔を出し歩いてくる新九郎を横目に見ながら口を開いた。ビヒトあこつも無事だったか。

すると伍助はまだ気付かないのかと、う風に肩をすくめた。

「だつてあいつ等を逃がしたら、六さんも敵だつて報告されてうちの里の奴らに六さんも狙われるつすよ」

しまつた……。

俺は伍助の言葉にがつくりと肩を落として天を仰いだ。
ビヒトあこつ等を追ねつとしたんだ。

「どうであんたら伍助兄貴とは常陸の国のどじで会つたんだい？」

私の魔法で更に丸一日、合計3日間熟睡させられたアサギは、日常生活を送れるまでに回復していた。

あと3日もすれば体力もずいぶん回復して、軽い運動ぐらいならできるようになりそうだ。

……旅に出て暗殺者と立ち回れるほどには回復しないかも知れな

いけど。

まあ、アサギからすれば当然の質問よね。

彼は伍助を探して危険な目に合いながらここまで来たんだし（事実死にかけてたし）。

でも、なんて答えたらいいのかちょっと躊躇してしまった私とア

ニスはアサギの質問に顔を見合わせた。

アニスはともかく、私は「私として」伍助に会つたわけじゃないのよね。

魔法で変装してアサギぐらいの少年の姿で伍助に会つてるから…。

…。

「伍助と会つたのはアーニーじゃなくて八重なのよ。詳しきは八重に聞いて」

私はにっこりと笑つてアサギの丞先がアニスに向くように仕向けてた。

アニスはぎょっとしたよつて手を剥いて私を見た。

「教えてくれないか、八重ちゃん。俺はどうしても兄貴に会わなくちゃならねえんだ」

アサギがピュアで真摯な眼差しをじっとアースの方に向ける。

「え……ええ

彼の熱意に打たれたのか、アースは少し困ったような表情で頷く。

「私が伍助さんと会つたのは常陸の国のかな道場なの」

「道場？」

「ええ。ただ、同行者の六三郎さんという方が道場を出て旅に出られる予定だったので、今も同じ道場にいるかどうかはわからないわね……」

実は水晶玉で確認した結果では、六三郎たちはずつ既に道場を出てるつてわかってるよね~。

ただ、偶然にもこっち方向に旅してきてるみたいなんだけど。

「……そういえば、その六三郎って人は七重さんの何なんだ？ 知り合いでだつて言つてたけど」

アサギはちらりと私を見て、それからつと目を逸らした。
あらぬほうを見て俯いてるので表情がわからないんだけど、なんとなく決まり悪そうに見える。

あら？ なんだか不思議な態度ね~。

でも、私もなんとなく六三郎と自分の関係をアサギに話すのは照れくさいんだけど……。

後でアサギの記憶を操作するのであれば、ここで嘘をつく必要はないかな。

「えーっと……。一応……ね。“夫”とこうじて

私の答えを聞いたアサギは、頷いてぼそっと呟いた。

「……そうか

あらう？ なんか気まずい雰囲気になっちゃった……？

アサギは神妙な面持ちで何か考え込んでるみたいだし、私は照れも手伝つて次に何を言つべきか迷つてしまつたし、アニスも私の前に口を開くのは控えようと思つてゐるみたいで、私たちの出方を待つてゐる。

アサギが何故命を狙われているのか、おそらく伍助も狙われているんだろうし……。だとすれば当然六三郎も危険なわけよね？

それを思えば、アサギに色々と聞いておきたいことはあるんだけど。

「あんたたちは何者なんだ？ 身分のある女が一人旅なんてするもんじゃねえだろ？……？」

やや長く続いた沈黙を破つて、遠慮がちにアサギが口を開いた。

「ういう質問をあらかじめ予想していたのか、動じる様子のないアニスが淀みなく答える。

「確かにそう思われても不思議はないわね。姫様と私はさる事情があつてこの国を旅しているの。詳しく説明することはできないけど。その事情のために今城に帰ることはできないのよ。ただし、誰かに

追われてゐるわけでも命を狙われてゐるわけでもないから、私たちと一緒にいることであなたが危険な目に遭うことはないわ

「 もの事情……か」

アサギは納得がいくようないかないような表情になつた。
ので、もうふっしゃけてもいいかなーと本筋のことをお詫びして、
したわ。

（繰り返すけど）記憶処理はこつでもできるしね。

「意に沿わぬ結婚から逃げ出しあってきたのよ」

「姫様！」

「余計なことを……」とアースが非難めいた眼差しで私を睨んだ。
私は「いいからいいから」とアースをなだめるように言つて、

「それでこの国に来て出会つた六三郎と結婚したのよ」

と付け加えた。

「…………ふうと。つまり六三郎つてのは意に沿つ相手だつたわけか」

アサギは少しおかしかつて笑うような表情になつた。
もしかしたら呆れてる？

一国の姫が城を飛び出して異国のビンの馬の骨とも知れない男と
簡単に結婚したって。

まあ……、他人にどう思われてもいいけどね~。

「そういうわけ。で、あなたたちはどうして命を狙われたの？」 伍

助が里を抜けたのはどうして?」

「おらの事情はすっかり話したのだから、アサギも少しは心を開いてくれないかしら?」

そう思つて聞いてみると、アサギは肩を竦め、私と同様いたつて簡潔に答えた。

「俺と兄貴が狙われてるのは抜け忍だからだよ。悪いが、兄貴の事情は俺が話すわけにはいかねえ」

「抜け忍……?」

「忍者の仲間から抜ける」とだ。裏切り者と見なされて殺される

「なるほど、事情はわからないけど、あなたたゞこひ殺されるとわかつても仲間を抜ける理由があつたのね」

「……そうだ」

六三郎はその事情を知つて伍助を同行させてるのかしら?
まあ、あの人、あまり物事を深く考えないとこころがあるから、襲

われてもなんとかなると思つてるのかも知れないけど。

今のところ、追つ手が常陸の国にたどり着いた様子はないみたいだし……。

「アサギさんと伍助さんは兄弟なのかしら?」

アニスが首を傾げて尋ねた。

「うーん。それはないわね。

アサギの髪と目の色はジパングの人間にしてはかなり淡い。はつきり言つて異国人としか思えないくらいだもの。

伍助も髪は茶色い方だったけど飛び抜けて目立つほどではないし、顔立ちもアサギとはかなり違う。

“兄貴”と呼んでいるものの、おそらく血のつながりはないんじゃないかしら。

「俺は……捨て子だから、兄貴の親父さんに拾われて、兄貴とは兄弟同然に育つたんだ」

「……そうだったの」

「兄貴は強えが、さすがに一人じゃ難しい。このままじゃ追っ手にやられちまうかも知れねえ……」

アサギは居ても立つてもいられないといつよつに呟いた。

「大丈夫よ、六三郎がいるから。あと、なんかもうひとり怪力大男も一緒だし」

安心させようと思つて言つたつもりなんだけど、アサギは私をきっと睨んで言つた。

「忍者は人殺しのための訓練を受けてるんだぜ。その辺の素人が束になつたつて勝ち田はねえよ」

私もちょっとムキになつて答えた。

「六三郎はその辺の素人じゃないわよ。剣の達人なんだから。ひとりで五人まとめて倒したりするし」

嘘は言つてないわよね。初めて会つたとき、六三郎は野盗五人を切り捨てていたんだもの。

……まあ、五人中四人は寝てたけどね。

「本当かよ？」

「本当よ。だから、アサギはもう3日はここで療養して傷を治しない。はつきり言って今追いかけても行き倒れになるか、よくして伍助たちに合流できても足手まといになるだけよ」

「今まではつきり言われてはぐうの音も出ないのか、アサギはやや憮然とした表情で黙り込む。

アニスは苦笑して私とアサギを代わる代わるに見ている。
ま……言い過ぎかも知れないけど、本当のことだものね。

「伍助と六三郎も心配だけど、アサギにも死んでもらいたくないのよ。せっかく助けたんだし。命を粗末にするのは許さないからね」

「……強引で、勝手な姫様だな」

むくれた表情のままアサギは咳いたけど、怒つているというよりは呆れているように見えた。

アサギがいくら焦つても最低あと3日は十分に栄養を摂つて、それから傷の治癒も施しておかないとね

最大限頑張つて魔法を使えば、完治……は無理だけど、多少暴れても傷が開いたらはしなくなるだろう。

……私の体力に限界が来るかも知れないけど。ふう……。

アサギが隣の部屋で寝入ったのを見届けてから、私とアースは水晶玉で六三郎たちの様子を見ることにした。

意識を集中して、映し出したい人のことをイメージする。普段なら大して消耗する魔法ではないんだけど、1時間おきにアサギに治癒魔法をかけているのですぐに堪えてるのね。安定した映像を映し出すまでにいつもより時間がかかってしまうたわ。

「ふうへ。やつと映った」

「大丈夫ですか？ 姫様」

「うん……。ちょっと疲れてるかな」

水晶玉の中には、六三郎と伍助、それから、何故だか仲間になつているらしい道場破りの大男が映つていた。

三人はかまどを囲んで、何か話しながら食事をしているようだ。

「六三郎さんたちは無事のようですね。良かったですわ」

アースも心配だったのか、元気な六三郎たちの様子を見て、ほつと安心したような笑顔になつた。

「剣の達人がふたりと優秀な二ンジャがいるんだものね。たとえ追手が来たとしても返り討けにしちゃうわよね」

どちらかといふと希望観測的な言葉だつたけど、そう信じたい。

あの夢が正夢だとは思いたくな……。

「それにして、じつじつこの道場破りは一緒にいるんでしょ、うへ。」

「それは謎だわね。もしかしたら、伍助と同じで六三郎に一田惚れしたのかも知れないわね」

私はふふっと笑いながら冗談を言った。

ふざけて言つたつもりだったけど、案外それが真相だったりして……。まさかね。

六三郎たちの無事を確認すると、私は改めて水晶を撫でて、故郷のアムランをイメージした。

ビスマリマー。私の魔力の元を映し出したまえ。お母様の生まれた魔族の国を私に示したまえ。

……水晶は一瞬雲の中を通り過ぎたような映像を映し出し、虹色に光ったかと思つと、次の瞬間には真っ黒になつた。

「ダメだわ……。やつぱり水晶では探せない」

「何を探しておられるんですか？」

アニスは真っ黒になつた水晶を覗き込んで尋ねた。

「お母様の生まれたところ。魔族の国を映すことはできないかと思つて……」

「……ああ」

「でも、無理みたい。きっとイメージが抽象的過ぎるのね」

「どうなんですか」

「うそ。やっぱりお父様に教えてもらひしかなせり。……」

簡単には教えてもらえない気がするけどね……。

黙つて城を飛び出してきた私に激怒してるだろうし。

お見合い相手のシャルルカン王子をほつたらかして姿を消しちゃつたから、シャブワとの関係に問題が発生してなければいいけど。（マハネがいるから大丈夫だと高をくくつてたんだけどね）

それにもしても、人の気持ちって不思議なものね。

六三郎に会つてからというものシャルルカン王子のことを思い出すこともなくなっていたわ。

こんなにすんなり、むしろマハネと王子が幸せになつていたらいなと思えるなんて。

ほんの2ヶ月前にアムランにいた私が別人みたい。

「大丈夫ですか？ 姫様？ ずいぶんお疲れのようですけど。……」

はつと我に返ると、心配そうなアーネスが正面から私の顔を覗き込んでいた。

「大丈夫よ。この2ヶ月で私はずいぶん変わったなあ……としみじみ思つてただけ」

たつた2ヶ月の間に結婚して、男と女がどんな風に結ばれるのかを知つて、その結び目がどんな風にほどけていくのかを知りそうになつてる……。

六三郎は私を探してくれている。ジパング中を歩いても見つけ出すと言つてくれていると聞いたわ。

だけど、本当の私を知つても、六三郎は私を好きでいてくれるかしら？

私のために、ジパング中を周つて追いかけてきてくれるかしら？私が六三郎に呪いをかけた魔女だと知つても……。

伍助への追つ手を撃退した俺達は、急いで森を抜け隠れるのには丁度良い洞窟を探し当て、そこで改めて伍助の話を聞く事にした。

焚き火を付けて俺達はその周りを囲む。

「どうしてこんなところで休むんだよ。夜の間も休まず先に進んだ方が良いだろ」

「馬鹿か？ 忍者相手に夜に戦う心算か。見つからない様に隠れながら少しづつ進んだ方が良いんだよ」

おいおい早速ぶつかるなよ。

「新九郎も伍助もいい加減にしろ！」

「こいつが俺の事を馬鹿って言いやがったんじゃねえか」「だつてこいつが馬鹿なんですよ」

二人は指差しあつて俺に訴える。

まあ新九郎が伍助の危機に飛び出した事で一人が仲良くなつて、手を組まれたらやばいと考えていたので俺にとつては悪い状況じゃないのだが……。

女を男一人で挟んで、翻るとはよく言ったもんだ。
さすがに新九郎と伍助の二人がかりで迫られては俺も手も足もない。文字通り翻られてしまう。

とはいって、さすがに毎回口論されてはうざつかる。

「いいから黙れ！　話が進まないだろ！」

新九郎は舌打ちし、伍助は「へいへい」と返事する。

まったく！

一人の態度は反省していると思えないが、ここでそれを追求していくはそれこそ話が進まない。

「それでどうして追われているんだ？　前は上役の女房に手を出したから追われているって言つてたが、それにしてはお前の弟分にまで手をかけるとは尋常じやないぞ。もう俺達も狙われているんだ。正直に話して貰つからな」

俺がそう言つと伍助は言い逃れるのを諦めたのか、それとも俺達を巻き込んだのを伍助なりに責任を感じたのか、いつになく神妙な顔で語り始めた。

伍助は関東一帯で活動する忍者の里で下忍の子として生まれた。

そこで生まれた者は男は男なりに、女は女なりに忍者として物の役に立つ様に小さい頃から訓練される。

里には多くの子供達が居たらしい。

忍者は少数の上忍が多数の下忍を束ねる形で成り立つが、はつきり言って上忍にとって下忍は消耗品だった。数は多ければ多いほど

いい。

伍助は里で生まれたが、捨て子を拾つてくる事も多く、時にはさらつて来る事もあった。

伍助の弟分とういアサギは捨て子だったらしいが、伍助が色々と面倒を見てやつているうちに、すっかり伍助になつて、「兄貴、兄貴」と言つて慕つていたらしい。

伍助は下忍の子なので裕福ではなかつたが、それでも親が里に居る分他の捨て子やさらわれて来た子などよりは暮らしあは良く、特に不満は無かつた。

というより、ずっと忍者の里で暮らして下忍は上忍に従うものだと教えられて育つた伍助に、環境に不満を持つなど夢にも思わない事だつたのだ。

それどころか

「今日の俺の働きは良かつたと、上の方々に褒められたぞ!」

そう言つて上機嫌になる父の姿に伍助も、いつか自分も「上の方々に褒められる下忍」になると、訓練にはげみ任務につく日を夢見ていたのだった。

だがある日、伍助の父は任務に失敗して敵に捕まり処刑されてしまつた。

伍助は父を失い涙を流したが、それでも任務を遂行する為には危険はつき物であり、父が亡くなつたのは父の技量不足の為。心のどこかでそう考へてゐる部分もあつたのだった。

伍助は父の様な失敗はしないと誓い、さらに熱心に訓練に明け暮れ里でも一、二を争うまでの忍者に成長した。

そして数々の任務をこなし、子供の頃からの望むおり上方々からお褒めに預かる事も多くなつた。

だがある日、特に難しい任務をこなしその褒美にと伍助は上忍の屋敷にまで招かれた。

こんな事は滅多にはない。

伍助は今まで見たことも無い』馳走を振舞われ夢見心地で居たが、廁へと行き部屋に戻り襖の前まで来ると上忍達の話し声が聞こえた。
「まさかあやつの息子がここまで手だれとなるとは……」

じゅやうあやつとは、伍助の父の事らしい。伍助はつい聞き耳を立てた。

上忍と言つても実は血筋により下忍達を束ねる身分といつだけで、実際技量において優れていふとは限らないらしい。

上忍たちは襖の前で伍助が聞いているのに気付かず話を続けた。そして伍助は父の死の真相を知つたのだった。

「それでお前の父親はどうして亡くなつたんだ？ 任務で亡くなつたんじやなかつたのか？」

焚き火の明かりに照らされる伍助の顔を見つめながら俺は聞いた。

「六ちゃん。ひょっと前に島丘城の話をしてたじやないつすか」

「そういえばそんな話もしたな」

下野国に入つたところで新九郎に話してやつた謀略によつ落とした城の話だ。

「あの時に偽の書状を持つて城に侵入して捕まつた奴つて居たじやねえつか」

「ああ、居たな」

「その捕まつた奴つてのが俺の親父なんつすよ」

「何だつて！」

「偽の書状を持つた奴をわざと捕まえさせて仲間割れを起さす。まったく見事な作戦つてやつなんでしょつがね。やらされる方にとつちやたまつたもんじやねえつか」

「伍助……」

それで島丘城の話をしている時、伍助の機嫌が悪そつだつたのか

……。

「俺の親父はそんな捨て駒に使われるなんて思つてもいやせんでした。でも親父が教えられていた書状を渡す相手が違つていやした。いや渡す相手の名前はちゃんと教えられていやしたが、そいつが居る部屋の場所が嘘を教えて忍び込み、全然違う相手に書状を渡しちまつたんつすよ」

そこまで言つと伍助は一瞬黙り込み口元に笑みを浮かべたが、そ

の笑みはどこかまがまがしく見えた。

「城の奴らは親父の事を、書状を渡しに来て部屋を間違えた間抜けつて言いながら殺したらしつす」

伍助の声はむしろ楽しげにすら聞こえた。自分の父親が死んだ理由のあまりにも馬鹿馬鹿しい。

「俺だつて命を捨てる覚悟がいる危険な任務つてのが有るのは分かりやす。実際そういう任務だつてこなして来やした。ですがね。死ぬと分かっている任務つてのは話が別だ」

その時、焚き火にくべた木の枝が乾いた音をたて弾けた。

「世間ではね。忍者は任務を遂行する為には命を捨てるつて言われているらしいっすね。まったくかつこいい話じやないっすか。かつこ良過ぎてヘドが出ますよ」

俺は伍助の言葉に微かに罪悪感を感じた。

実際俺が何かした訳じやないが、俺も伍助が言う様に忍者の事を自分の命を顧みない冷徹な奴らだと考え、そして伍助の事を「忍者らしくない奴」と思っていたのだ。

「俺は決めたんですよ。誰にも命令されねえ。好き勝手に生きてやる。里に縛られるなんて真つ平だつてね。だがお頭だけは生かしちゃおけねえ。あいつだけは俺の手で殺してやる。そう誓ったんつす」

火に照らされ浮かび上がる伍助の顔は、いつもの飄々としたおちやられた物は鳴りを潜め、静かな決意が感じられた。

だが里からやつてきた6人の追手にもてこずる様じや、話にならないと思うんだが……。とは言えず、俺は控えめに聞いてみた。

「大丈夫なのか？ 里にはかなりの人数が居るんだろう？ お頭つてのを倒すのも難しそうだが」

「ええ、さすがにまともに全員とやりあう心算は無いっすよ。どうにかしてお頭と一騎打ちに持ち込みたいんですけど、さすがにお頭ともなると血筋だけで無能って訳じやない。里のお頭として恥ずかしくねえ様について子供の頃から村の手だれ達に特訓を受けてて、そう簡単に勝てる相手じやねえ。だからお頭の側近の上忍の女房に近づいて何か有利になりそうな情報を探るつとしたんつすよ」

「なるほど……」

しかしそれでもすでに伍助の裏切りがばれている以上、情報を引き出すのは不可能。お頭とやらを狙うのは難しいと思うんだがな……。

「3人でやれば何とかなるだろ？」

突然の声に俺と伍助は驚いて新九郎を見つめると、新九郎は舌打ちしそうな顔になりそっぽを向く。
「どうやら照れているらしい。

「どうせ俺も六三郎も狙われているんだから、3人でやつちまつた方が良いじゃねえか」

どうやら伍助の話に、またもや新九郎の「男氣センサー」が発動したらしきな。

俺が苦笑しながら伍助の顔を見ると、伍助は意外にも真面目な表情で新九郎の横顔を見ていた。

「おいおい。まさか新九郎に惚れたんじゃないだろ? そいつに惚れたら色々と大変だぞ。

まあ根っからの女好きの伍助が新九郎に惚れる説は無いか。純粋に感謝しているんだろう。

だが実際どうしたものかな。

相手は多勢。

しかも逃げながら飛び道具を投げてくるんじゃ、俺や新九郎は不利だ。

多勢を相手にする時は奇襲で敵の大将を倒すってのがセオリーだが、そのお頭の周りには側近とやらが守ってるんだろう……。

「ん? そう言えば、側近って上忍って奴らなのか?」

「伍助。お頭を殺るつてこいつよつ、里を潰して良いか?」

「え? そりゃそれが出来りやそれに越したこたあありやせんが、そんな事出来るんつか?」

「いや、とこひつよつ、その心算でやうなこと手も足も出ない」

「勝てるんなじ向でも良こが、それでどうせやるんだ?」

「下忍を束ねる上忍達はたいした事ないんだろ?」

「ええ。全員つて訳じやないですがたいした事ありやせん。出来るつて奴にしたつて、まあ俺や六さんに比べりや屁みたいなもんでさ」

「俺の名前も入れるよ」

新九郎は不満げに口を挟んだが、ややこしくなりそつなので話を進める。

「その上忍を狙おう。里に入り込んで上忍達を切つていけば下忍を束ねる奴が居なくなつて里は混乱するはずだ。そうすればお頭とかいう奴を狙う隙も出来るだろ」

「上忍を狙つたら配下の下忍が立ち塞がつて邪魔するつすよ？」

「俺や新九郎が忍者の相手が苦手なのは逃げながら飛び道具で攻撃されるからだ。上忍の前に立つ塞がるつていうんなら敵じやない。立ち塞がらずには飛び道具だけで攻撃して来るつていうならその間に上忍を切つてやる」

「なるほど……」

「で、どうやって里に近づくんだ？ 向こうにも警戒しているだろ？」

「それは伍助に聞くしかないな。伍助。里を抜け出して来たんだつたら抜け道とか知ってるんだろ？」

「いやー。それが、一応味方のふりをしつつ上忍の女房に手を出して情報を集めてたんつすけど、丁度任務で里の外に出ている時にそれがばれてそのまま逃げたんで、抜け道を通つて逃げたとかじやねえですし、抜け道なんてのも知らないんつすよ」

伍助は「へへつー」つとばかりに舌を出した。

駄目じゃねえか……。

「どうするんだ？ 六三郎」

「うーん。さすがにそれは予想外だつたな……。

「どうにかして里に近づけないか？」

「いやー。見つからずに近づくのは中々難しいわよ」

やつぱりそつか。どうしたものかな？

俺が考え込んでいると新九郎がじれったそうに口を開いた。

「里は逃げねえんだから、突っ込んできや良いんだよ。もし敵が邪魔して立ち塞がりやがつたらそんときや立ち塞がる奴らを全員切つてやる」

強引だが、確かに俺達が里に突入するのを防ぐには敵も逃げてばかりは居られないか。

しかし田立ち過ぎるよな……。

出来ればこいつそりと里に入つて、上忍の屋敷を狙つて倒してまた姿をくらまして。つてのを繰り返して敵の戦力を削つて行きたいんだが。

だがグダグダ考えて居ても仕方が無いか。

「よし！ とにかく里に向かおつ。里に着くまでに何か思い付くかも知れないし、里に着いてからも暫くは抜け道が無いか探そう。見つからなかつたら新九郎のいうとおり突っ込むしかない」

「よし！」

「分かりやした」

こうして俺達は、伍助の敵であるお頭を倒すべく、忍者の里へと向かったのだった。

「アサギがいないっ！？」

早朝、なんとなく嫌な予感がして布団を跳ね除けるようにして起き上がり、隣の部屋に駆け込むとアサギの姿が見えない。

無人の部屋には無造作にたたまれた布団が部屋の隅に寄せられている。

とつぐに時は越えてるし死ぬことはないけど、記憶操作もしてないし、あのまま六三郎たちに合流されるとアサギの口から私たちのことが六三郎に知られることになってしまつ……。

「姫様、どうしたんです？ 血相変えて」

驚いて目を覚ましたらしいアニスが一つの間にか私の隣に立っていた。

「アサギがないの！」

「…………あら？」

「まだその辺にいるかも知れないから、私探してくるわねっ！ アニスはここで待つて！」

と言つなり、外出着に着替えて、私は宿を飛び出した。

万一アサギが帰つてくるつもりでちょっと表に出ただけなら、私

たちがいないとそれこそ本当に行つてしまつかも知れないし（今、既に行つてしまつてゐるのかも知れないけど）、アニスには待機してもらつたほうがいいわよね。

宿を飛び出して、常陸国方向に向かう獸道を奥へ奥へと走つて数分もすると……、

「あ～～～！ 私つてバカ！！ 水晶玉見てくれればよかつた！！」

と自分の間抜けさ加減に気づいてがっくりと脱力してしまつた。

息を切らせて、体中から汗をにじませながらも、アサギの気配を感じることができないかと神経を研ぎ澄ます。

……誰かがここを通つた気配が残つている。

草の上を踏み歩いた後の新しい青臭さが漂つている。

ちょっと待つて！ でも、アサギとは限らないのよね。

この辺りの村人かも知れないし……、それどころか二ンジャの追手という可能性もなくはないわ。

私は用心深く気配を封じる結界を周りに張ると、改めて深呼吸をし、青臭い匂いの後を辿つて進んだ。

10分も歩いたどうか？ 滝水が流れ落ちるよつた音と共に、涼しい粒子が肌に当たるのを感じた。

この辺りには滝があるんだわ……。

草木を掻き分けて水音のする方を見ると小さな滝と小川が見える。

そういえば、滝で水浴びして六三郎に覗かれたことがあつたわね。

。

まあ……、わざと覗いたわけじゃなさそうだつたけど。

そんなに昔のことじゃないのに、なんだか懐かしい思い出のよくな気がして胸の中に切なさが広がつた。

「一度と会えない……訳じゃないの?」

六三郎と交わした会話や歩いた景色を思い出しながら歩いていると、滝の音がだんだん大きくなっていた。

じゅうやう、すぐ先にわりと大きな滝があるらしい。

六三郎との記憶で意識のほとんどが占められていたせいか、ほとんど無意識に私は目の前の藪をぞうと搔き分けた。

急に視界が開けて、小さな池ぐらいの滝つぼの中で滴り落ちる滝の流れを浴びている素っ裸（？）正確にはフンドシ（？）とかいう下着を身につけただけ）のアサギが飛び込んできた。

「あやあああああ～～！～～！」

いきなり全裸（に近い姿）で現れたアサギを目にした私は、心の準備ができていなかつたせいで絶叫してしまったわ。

それにして、山の中で私の声の響くこと、響くこと。

「うわっ……」

その絶叫に驚いたアサギも連鎖反応的に悲鳴を上げて、ザブンと水の中に沈み込んで身を隠した。

……が、「ちょっと待てよ。何も隠れる必要はないだろう」と思つたのか5秒後くらいには頭までずぶ濡れになつた状態で水から体を出して立ち上がつたけど。

「姫様？」

全身からボタボタ滴をしたたらせながら首を傾げ、一ひらに近づ

いてくる。

「な……、なんて格好なのよつー」

田の前のアサギの姿を払いのけるように手を振つて後ろを向いた。

「どうしたんだよ?」

「いいから服を着なさい! 服を!」

「いや、まだ服乾いてないし……」

「はあ?」

「だから、服洗つちまつたし。今乾かしてゐるから

「はあ……」

答えながらアサギがどんどん近づいてくる気配がわかる。

「姫様、よくここがわかつたな」

「それよつつ! 何してるのよ? なんで黙つて出て行つたりしたの! ?」

「いや、別に出て行つたわけじゃねえんだけど……」

ザツと音がして、アサギが水から上がつたのが判つた。
それから木の枝に引っ掛けたらしい着物を下ろして、パンパン
と叩いて水氣を切るような音がする。

ドスンと私の横に腰を下ろす。

「ほり、これでいいか?」

横田でちらりとアサギを見ると、腰から下に着物を被せて寝転がつている。

まだ上半身は露わだつたけど、まあ……男の上半身が裸だからってどうつてことないわね……。

「……いいけど」

なんとなくまだ照れくさい気がして不機嫌な顔のまま、アサギの横に腰を下ろした。

アサギの胸や腕にはまだ襲われたときの傷跡がくつきつと残っている。

完全に塞がつてはいるけど、この跡が消えるまでこまもつしづらくな時間がかかるわね。

そんなに長い間、一緒にいることはできないけど……。

それにしても、意外に逞しい体つきだったのね。

さんざん包帯とか替えて見てるのに、気づかなかつたわ。

六三郎と比べてもかなり筋肉質な感じ。

やっぱリジパングの人間とは体型も少し違うような気がするわね

。

「出て行つたんじやねえよ。まだ、ちゃんと礼も言つてないし

木漏れ日が眩しいのか、左の手のひらで底を作るよつて田の上を覆いながらアサギが言った。

「世話をなつたしや……、なんか礼できぬかと思つて

いつの間に持つていたのか、右手には赤い実でいっぱいになつた桶を持つていた。

「これは……？」

「グミどバライチゴだ。甘酸っぱくて旨い」

「あ、ありがとう」

「まあ……、桶は、宿のを失敬しきまつたんだけどよ」

私たちにお礼をしようと、わざわざ探しに行つてくれてたんだ。アサギの顔を見ようと視線を運ぶと、左手のひらで手を覆つて照れくさそうに顔を隠していた。

……乱暴そうだったけど、いい子なんだな……。

しばらく無言の時間が続いて、ちよつと氣まずくなつたころ、アサギが赤い実をひとつ手に取つた。

「食べてみなよ」

そして、私に差し出した。

「う……うん」

私は赤く柔らかいイチゴの実を受け取つて口に入れた。

口中でじわっと酸っぱさが広がつて、その後甘みが残る。野性味の強い不思議な味。

「酸っぱいけど、甘いね」

アサギは口元で笑って、目から手のひらの底を外し頭上高い緑の枝を見つめた。

日の光がアサギの目に差し込んで、淡い褐色の目の色が琥珀のように輝いて見えた。

目に透ける髪の色も赤みを帯びて銅色に揺れている。

「きれいね」

「何が？」

「アサギの目と髪の色」

「俺の目と髪が？」

アサギは眉根を寄せて険しい表情になつて私の方に首を向けた。

「こんな鬼みたいな色が？ 嘘言つなよ」

と黙つて、ふいつと顔を背けた。

「ほんとよ。琥珀みたい。キラキラしてる」

「いいかげんこじりよー。」

アサギはがばっと状態を起こして私を睨んだ。

「」の髪のせいで嫌われてきたのに……。きれいなわけねえだろー。」

「嫌われてきた??」

私は驚いて目をパチクリさせた。
つまり、外国人に対する差別のようなものがアサギを苦しめてきたということ?
彼の目と髪の色のせいで……。

しまつた……。無神経なこと書いつちゃったわね……。

「「めんなさ」」

私は反省して、小さく謝った。
だけど、こんなに素敵な色なのに、それをアサギが知らないなん
てもつたといいな……。

「でも、私は好きよ。アサギの目と髪の色」

「……」

アサギは険しい表情を和らげて……とこより、悲しげな表情にな
なつて、ふたたび空を仰ぐように寝転んだ。

「……俺が捨てられてたのは、この髪と目の色のせいなんだ」

「え?」

「ここから聞こえてくるのが鳥のさえずりが響く。」

アサギの心境をよそに、少し無粋なくらい賑やかなさえずりが。

「里に近い山奥に俺は捨てられてた。置手紙もなく。ボロ布にくる

まれて「

まばたきを忘れたよつて田を見開いたまま、空を見つめてアサギが続ける。まるでひとつ」とのよつて。アサギ

「手のひらに青い石を握つてたんだとさ。浅葱色の。それでアサギつて呼ばれるよつになつた」

アサギは着物を裏返して、縫い付けてある鮮やかなライトブルーの石を見せた。

小指の爪ぐらいの大きさの橢円の石。
これは……ターコイズ？

「ターコイズね」

「ターコイズ？」

「ええ。私の国では旅の守護石と言われているわ。持ち主の身代わりになつてその身を守る石と」

「そうなのか……」

アサギは改めてターコイズを見つめた。

「この石は上忍に一度取り上げられたんだ。それを伍助兄貴がこつそり盗み返して隠してくれた。俺がものがわかるようになつてから親の形見だつて渡してくれたんだ」

「やうだつたの……」

伍助つてちやらんぽらんな男だと思つてたけど案外いい人なのね。アサギが命を懸けて追いかけるぐらい慕つている相手なんだし。……それでも、やつぱりちやらんぽらんなよつな氣はするけど。

「里じや俺はずつと嫌われ者だった。赤い髪と目のせいで鬼の子つて言われてよ。悪いことが起こるとみんな俺のせいだと言われた。その度に伍助兄貴がかばってくれて、兄貴だけが俺の味方だつたんだ……」

口の堅いアサギが自分のことを話してくれている。
おそらく思い出したくもないような記憶を思い起しづしながら。

「私も……嫌われてたわ」

ほとんど無意識だつたと思つ。

アサギの告白に相槌を打つように咳いてしまつたのは。

「……え？」

アサギはびっくりしたよつて振り向いて私を見上げた。

「私も他の人とは違つてたから……。ずっと陰で悪く言つられてたの」

アムランの姫として表ではちやほやされていても、陰では「魔女」とか「魔物の血を引く姫」と言つられていたわ……。

だから、シャルルカン王子も最終的にはマハネを選ぶんぢやないかつて……どこかで判つてた。

私の地位や外見に惹かれて近寄つてきた他の王子たちの中には、私の魔法を見たとたんに手のひらを返すような態度をとつた人たちもいた。

私を本当に一人の人間として認めてくれてたのは、お父様とマハネと……アースだけだったわ。

「姫様を嫌う奴がいるなんてわからねえな」

アサギは上体を起こしてまっすぐに私を見て言った。

「きれいだから、妬まれてるんだよ。それしか考えられねえ」

「それは違うわよ」

私は苦笑した。

私が魔女だということを知つたら、アサギはどう思つのかしら？
でも、アサギなら私の気持ちがわかるかも知れないわね……。
頭の片隅でそんなことを思つていると、アサギの声に引き戻された。

「姫様見たとき天女ってこんなのかと思つた」

言葉が、止まつた。

「この子、六三郎と同じことを言つたね。
あどけない目で、真剣な顔で。

「ほんとに優しくしてもらつたのは、生まれて初めてだ……」

アサギの大きな目が一瞬切なそうに細くなつて、再びまっすぐに私を見た。

「ほんな暮らしがあるつて夢に見たこともなかつた

言いながらアサギは着物に縫い付けてあるターコイズをちぎり取つた。

「……これが誰かを守ってくれるところなら姫様たちを守るよつて元気なやつだ。

アサギは私の右手を取つてターコイズを握らせ、その上に自分の手のひらを被せた。

「ダメーー！」両親の形見でしょ？　これはアサギが持つてなさい！」

私は首を振つて、手を引きターコイズをアサギに返さうとした。だけど、強い力で握られていて、アサギの手を払うことができない。

「俺を捨てた親に未練はねえよ。俺の命は姫様にもらつたようなもんだ。俺がずっと側にいて姫様を守れたらいいけど、それはできねえ」

「アサギ……」

「姫様たちのことほ忘れねえ。俺のこれまでで、一番……、なんて言つか……」

アサギは一生懸命言葉を搜してこりみだつた。
強い、強い力で私の手を握りながら。

「……そう、一番、幸せな時だった……。ありがとう」

アサギは初めて見せる優しい表情で微笑んだ。

そして、ターコイズを握らせた手を私の膝の上に置くと、立ち上がり、まだ濡れたままの着物を着た。

何故なの？ 催眠魔法をかけられたよつて、ただ、アサギを見上げることしか出来ない……。

着物を着終わると、アサギはゆっくりと、3歩歩き出した。そして、一度だけ振り返って泣きそうな目で私を見た。それは一瞬の表情で次の瞬間には切なそうな微笑みに変わっていたけれど。

「……アサギ」

引きとめようとして声に出して呼ぶ前にアサギは駆け出していて、あつという間に姿が見えなくなっていた。

幻を見ていたのかと思つぐらこアサギは「気配」と完全に消えていた。

右手のひらに、硬い、青い石だけを残して。

俺達は伍助の里へと向かつて行った。

本当だつたら見つからぬ様に隠れて進みたいところなんだが、何分相手は忍者で俺と新九郎は侍だ。いくら伍助の先導があるつて言つても隠密行動で勝てるもんじやない。

と言うわけで、いつその事俺と新九郎は街道を堂々と進んでいた。当然忍者の里からの追つ手に見つかる訳だが、俺と新九郎に注意がいつているそいつを伍助が仕留めるつて作戦だ。

まあ前回忍者と戦つた時に伍助がやつた作戦の応用だな。

俺と新九郎は並んで街道をどんどんと忍者の里へと向かつて行った。

「ひつして2人で歩いていると、新婚旅行の様じやねえか」

「誰が新婚か！」

万一一きなり手裏剣でも飛んでくるかもと神経を張り巡らせながら歩かないといけないといつのに、またぐこいつは図太いんだか馬鹿なんだか、馬鹿なんだらうけど。

新九郎が伍助の手伝いをしてやつひと言い出したのには見直したが、やつぱりこいつ馬鹿だしな……。

いかんいかん、俺の方こそ関係の無い事に意識が向いてしまった。集中しなければ、と思っているとちょうど、左手に気配を感じ反射

的に身をそらせると、田の前を風を切る音が通り過ぎて、俺の右に生えている木に突き立つた。手裏剣か。

そして間もなくその左手の茂みから「ぐう」とこづくべもつた声が聞こえてきた。

「おーい。やつたか？」

と声をかけると、茂みから

「くーい」

と返事が返ってきて、伍助が姿をあらわした。

「結構順調みたいだな」

「やつすね。里の奴らは型どおりに動く奴が多いんで動きを読むのは樂つすからね」

「確かにお前が言つていた様にみんな左側から攻めてくる奴らばかりだな」

「里では相手の左側から攻めろって教えられてるんすよ。利き腕と反対側から攻めると相手の反応が遅れるからって」

「しかし同じ攻め方してたらばれるに決まってるじゃねえか。そいつら馬鹿なんじゃねえか？」

と新九郎は呆れたように言った。

里の奴らもこいつにだけは馬鹿とは言われたくないだらうな。と俺が思つていて、案の定伍助が新九郎に反論した。

「命の取り合いの戦いってのは本来一度きりなんだ。色々手を出したり、効果的な方法一つを熟練した方がいいんだよ。俺が前もつて

教えて置いたから知つていいるだけで、俺が言わなかつたらお前も知らなくて引っかかるつたかも知れないだろ」

「ああ？　俺がそんなもんに引っかかる訳ねえじゃねえか」

「後からならいくらでも言え……」

「どうした？」

伍助が途中で言葉を切つたので聞いてみると、伍助は「どうやらまた1人来たみたいっす」と茂みの奥に姿を消し、俺と新九郎は顔を見合させた後、何事も無かつたかのようにまた街道を進みだした。

結構せわしないな。それだけ忍者の里に近づいたって事かな？

だがいつまで立つても左手から手裏剣は飛んでこず、それどころか伍助の「なに！」と言つ叫び声が聞こえてきた。もしかして裏をかかれたか！

「伍助大丈夫か！」

俺と新九郎は急いで左の茂みに分け入つた。

そして伍助を探すため視界を巡らすと、伍助が15、6歳ぐらいの少年と抱き合つているのが見えた。

まさかお前もそつちの趣味が合つたのか！

くつ！　どうも伍助が俺が元男と知つておきながら執着するのはちょっとおかしいと思つていたら両刀だったのか。だつたら心は男

で身体は女の俺は、伍助から見たら一粒で一度美味しい状況なんだな。

「生きていたのかアサギ！」

「兄貴の方こそ無事だつたんだな！」

> 29320 | 3597 <

ん？ アサギ？ 聞いた覚えがあるぞ？ ああ、確かに伍助の弟分つて奴か。ずいぶんと赤い髪だな。こりや追っ手も見つけやすかつただろうな。追っ手の奴らが殺したとか言つてたが、どうやら生きていたのか。まあ良かつた。

「お前が伍助の言つていた弟分つていつアサギか？」

「ああ、そうだけど。あなたは？」

「俺か？ 俺は六三郎つて言つんだ」

するとアサギは探る様な目で俺を見直した。

「あなたが六三郎か……思つたよりなよつとしてるな

なんだ？ どうも引っかかる言い方だな。まあ子供相手に怒つても仕方が無い。それにそれよりももっと気にかかる事がある。

「やうだが、どうして俺の名前を知ってるんだ?」

「俺は姫様……七重さん助けられたんだ」

「なに!? 七重に助けられただと……どうこう事だ!」

俺はアサギの両肩を掴むと前後にゆすって問い合わせたが、そこには伍助が割って入った。

「六せん、そんなにしてちや言えるもんも言えねえですよ。アサギなにがどうなつてんだ? 詳しく聞かせろ」

「兄貴がそう言つながらいけど……」

アサギは渋々つて言つ感じで頷いた。

「うして俺達はアサギに詳しく話を聞く事になつたが、こんなとこりでたむりしていたら追つ手に見つかってしまう可能性がある。」

追つ手の奴らは俺達に刺客をやられながらも、俺達が里に向かって進んでると報告をしていてるみたいなので、その裏をかいて面倒だが少し道を引き返し、そこで改めて街道横の森に分け入つてアサギを取り囲んで座つた。

「それで、どうしてお前が七重に助けられたんだ?」

だが俺の問いかけにアサギという奴は、むすつと黙り込み返事をしない。なんだこのガキは? 伍助の弟分つて事じやなかつたらしくしているところだぞ。

だがここいつから七重の居場所を聞きださなくてはならない。ここは大人になって我慢しようじゃないか。

「どうした？　お前、七重に会つたんだろ？」

するとアサギはむすつとした顔のまま胡散臭げな目を向けて来やがつた。

「姫様の言つてた感じじゃもつとしつかりした奴かと思つてたんだけどな。あんた本当に1人で5人とか倒したのか？」

姫様？　なんだそりや？

「ああ、5人だつたら七重と初めて会つた時に倒した。それよりも姫様つて七重の事か？」

するとアサギは、へつ！　と、小馬鹿にした様な笑いを漏らした。

「あんたそんな事も知らないのかよ。八重さんが七重さんの事を姫様つて呼んでたんだ」

八重さん？　俺が思わぬ人の名前が出てきた事にびっくりしていると、同じ事を思つたらしい伍助が割り込んできた。

「アサギ、八重さんがどうして六さんの奥さんと一緒に居るんだ？」

兄貴分の伍助に聞かれてはアサギも応えるしかなく、渋々と言つた感じで事情を話し始めた。

「なんで七重さんと八重さんが一緒にいるかなんて知らねえよ。俺

が2人に助けられて気付いたら初めから2人一緒に居たんだし。八重さんは七重さんの事を姫様って呼んでたから、八重さんは七重さんの侍女なんかじゃねえのか？」

「七重が姫？」

確かに世間知らずとは思っていたが……。まさか七重が姫とは……。

「さつきからそう言つてるだろ。なんか気に入らない奴と結婚させられそうになつたから八重さんと一緒に逃げてきたみたいな事を言つてた」

「そんな話聞いてないんだが……」

琉球から旅してきたつて思つてたんだが、そこの領主の姫君で政略結婚させられそうになつたのを逃げ出したとか？ しかも八重さんが一緒つてどういう事だ？ 僕と七重が旅していた時に八重さんはどこに居たんだ？

「あんた本当に姫様の旦那なのかよ？」

アサギは少し首を傾げて疑わしげな目で俺を見てきやがるが、断じて俺は七重の夫だ。なんだこのガキはさつきから俺に突つかかってぐるな。

「お前だつて七重から俺が夫だつて聞いてんだる。お前こそ追っ手にやられたんじゃなかつたのかよ。本当にアサギとか言つ奴なんだろつな」

「何言つてやがんだ。兄貴が俺を見間違つ訳無いだろ。それに俺が助かつたのは七重さんに助けられたからつてさつきも言つたろ。兄貴を追つて下野に差し掛かつたといひ追つ手にやらうれそつになつた時に姫様に助けられたんだよ」

それだ！

「じゃあ、七重は下野に居るつてんだな！」

俺はアサギの肩を掴んで前後に強く揺さぶりながら聞いたとアサギは、

「あ……あ……ああ」とガクガクしながらも答えた。

「よし！ 下野に行くぞ！」

「いやいや、なに言つてやがんだよ。」¹まだ来とつて引き返すわけねえだろ

「馬鹿やつー！ 里は逃げないけど、七重は逃げるんだよ！」

「逃げるんだつたら諦めろよ」

新九郎は呆れた様に言つたけど、諦めるわけがない。

「言葉のアヤだ！ 誰が逃げられてるか！」

「でも、どうして七重さんは六さんには会つてこないんすかね？」

「後、八重つてのはなんなんだ？ 前に会つたときはその八重つていうの事は知らないふりしてたつてのはなんなんだよ？ おかしいんじやねえのか？」

くそ！みんなで寄つてたかって！ いつがせやつと七重の面場所が分かつて焦つてんだよ！

「だからそんなもん、会いに行きや全部はつせつかんだよ。」

「いや、だから今から戻すのはめんどくさいぢやねえか

「めんどくさいとか言つ問題じやないだろ。馬鹿やつ——。」

ダメだこいつ等話にならねえ！ 僕はいても立つてもいられず七重の元へと走り出した。我ながらいつもの自分らしくは無いと思つけど、やつと七重の居場所が分かつたつてのこと、冷静でいられるか！

「おこ！ 六三郎！」

「六さん！」

奴らは俺の背に声をかけるが、俺はその声を振り切つて七重の元へと走り続ける。「うなつたら俺一人でも行つてやる！』

七重待つて居ろよ！ 今行くからな！

だが街道を下野に向かつて走り続けていると、ゾクリと背に冷たいものが走った。

追つ手か！ しまつた！ 伍助の援護が無いんだった。

俺は追つ手を振り払おうと走り続けたが、追つ手の気配はどんどん近づいてくる。やはり忍者にスピードでは勝てないか。

どうする。迎え撃つか？いや、どうせあいつ等は影から手裏剣を投げてくる事しかしない。足を止めて迎え撃つてもしょうがない。だが身を隠す物が無い街道を進むよりはマシと街道をそれで森の中に分け入り、木々の間を縫う様に走り抜けた。

殺氣を感じ身を屈めると、頭のあつた位置を手裏剣が通り過ぎ、木の幹にカカツ！と突き刺さった。

俺は懸命に逃げ続けたが、追つ手は諦めず俺を追い続ける。

はあはあ。じいっ等しつじ過ぎるぞ……。

俺は足が止まりそうになるのを必死に堪え走り続けたが、次第に足は鈍り手裏剣を避けきれなくなってきた。

手裏剣を避ける動きも鈍り、ビショ！と手裏剣が俺の腕を掠め切り裂いた。

七重……折角お前の居場所が分かつたというのにこんなところド…くそつ…！

だがそれでも走り続けると不意に木々が途切れた。いや、途切れたのは木々だけじゃない。地面もそこで途切れ、足元には崖が俺の行く手を塞いでいる。

なんだと！

だが俺の動きが止まったのを絶好のチャンスと追つ手が放った手

裏剣が俺の背に突き立つて、俺は前のめりに倒れた。崖の下を流れる川へと……。

「七重————！」

俺の声は崖にこだまし、水面に叩き付けられそこで俺の意識は途絶えた。

アニースが敷いてくれた布団に横たわってぼんやりと天井を見上げていた。

アサギが去つていってから、突然どつと疲れが押し寄せてきて寝込んでしまったのよね。

団扇と呼ばれるジパングの紙製の扇でゆっくりと扇いでくれながら、アニースが言った。

「姫様が魔法の使いすぎで体調を崩されるなんて初めてのことですね。心配ですわ」

「うーん……まあ、魔法自体は自然の力を変換して発動させてるんで体力とかは使わないんだけど……」

とアニースには話しているものの、実は私自身も魔法のメカニズムをよく理解していなかつたりして……。

幼い頃、魔法を教えてくれたお母様によると、魔法でもつとも重要なのは信じる力なのだそう。

人は自分が呼吸できること、まばたきできることを疑つたりはない。

そんな気持ちで自然の力を自分の力のように使う力を私たちは魔法と認識しているのだとか……。

「ただ、一晩中魔法を使い続けていると、集中力は酷使するわね。睡眠時間もなくなるし。そういう理由では体力を消耗することになるわ」

「なるほど。夜なべしてじゅうたんを織るよつなものですか?」

「やうね。それ近いかも」

確かに肩凝りとかあるし、ずっと座つてたから足腰もなんか痛みを感じたりするものね。

「……アサギは、六三郎さんたちに会えるんだじょうかねえ」

アニスはゆつたりと团扇を動かしながら、ちらつと私を見た。

「へん。どうかしらね……。会える……んじやないかしらね」

六三郎たちは微妙にこっち方向に向かっているよつだし、そりはアサギの頑張り次第かも知れないけど……。

「姫様」

「な……なあに?」

「アサギの記憶操作するの忘れてましたよね?」

「あ……ああ、それね」

「ひ……。痛いところを……。

でも、別れ際のアサギの言つたことや表情を見れば、とっても彼の記憶を消す気にはなれなかつたのよ……。

「アサギはね。いつ言つてたの」

あのときのアサギの泣きそつた微笑が脳裏に浮かんだ。

「姫様たちの」ことは忘れない。俺のこれまで一番幸せなときだつた……つて

「やうなんですか？」

「だから、できなかつたの。アサギが、私たちといった時間を大切に思つてくれることがわかつたから。とても彼の記憶を消すことはできなかつた……」

「そうですねえ……」

アニスは卓袱台の上の布の上に置かれたターコイズを眺めた。
大粒のターコイズには石を貫くような穴が穿いていて、もともとはネックレスの一部だつたんじやないかと思える。
おそらくアサギのお母様が身につけていたものなんじやないかな
……。

「私もそれでよかつたと思いまますよ」

アニスは目を細めて淋しげに微笑んだ。

「ただ……、私たちのことがアサギから六三郎さんたちに知れることになりますね」

「やうねえ……」

「六三郎さん、混乱するでしょ「ねえ。姫様が私『八重』と一緒にいる」とも、六三郎さんの居場所を知つていて別行動している」と

「も

「や、そつねえ……」

「いつそアサギと同行した方が面倒がなくてよかつたんじゃないですか？」

「かも……知れないわね」

私はアニスから視線を逸らしあらぬ方を見て答えた。

「姫様」

「な……なあに？」

「まさか、この期に及んで、六三郎さんに会わずにアムランへ帰ろうと思つてるんじゃないでしょうね？」

「…………」

いや、そんなことは……、思つてはいよいような氣もしないでもないような氣がする……？

「ダメですよ、そんなことしたら。アサギから話を聞いたら、六三郎さんは姫様が敢えて自分を放置してるとて思つてしましますよ。そうしたら絶望のあまりハラキリするかも知れません。ジパングの戦士はすぐハラキリして自害するらじじですから」

アニスは神妙な表情で私にこじり寄るよつて言つた。

「……ハラキリ……」

それは困るわ！

アムランへ帰るといつても、一度と六三郎に会わないうつもりで帰るんじやない。

ただ……密かに問題解決して、何事もなかつたかのように戻れないかな／＼／＼と思つてゐるだけ……。

「アムランに帰る前に、六三郎さんと会つて本当のことをちゃんと話すべきですよ」

アニスはきつぱりと言つた。

私だつて判つてる……。それが道理だつてことは……。

掛け布団の端をぎゅっと握り締めた。

「……だけど、私が魔女だつて知つたら……六三郎は？」

「え？」

「六三郎は……私を嫌いになるかも知れない。自分を呪つてあんな目に遭わせたひどい魔女だと思つて……」

アムランにいたとき、お父様の後妻の継母や親戚たちも私を恐れて嫌つていた……。

ふたりの継母は表ではいつも私の機嫌をとつていたけど、「あの女は魔女だから、いつどんな目に遭わされるかわからない。怒らせないよう、関わらないようにしなさい」と自分の子供たち（つまり私の兄弟姉妹）に言つていたもの。

私に求婚してきた王子たちも大方は、心の中は私の魔法を利用し

ようとしているか、魔法を目にしたとたんに私のことを化け物のように恐れるかどちらかだった。

北の大陸では魔女狩りが行なわれていて、多くの魔女たちが虐殺されると聞いてるし……。

目や髪の色が違うだけで、鬼……という魔物呼ばわりされるこのジパングで、魔法を使える私はどう思われるんだろう？

しかも、その魔法を使って、自分を呪った女だとしたら……。

「それは大丈夫ですよ」

アニスはまた団扇を優雅に動かしながら、優しく微笑んで言った。

「六三郎さんなら大丈夫です。あの人は姫様が魔女だらうと受け入れることができます。六三郎さんは……、自分が女になつた事実にもちゃんと向き合つてている。……もちろん動搖はしておられますけど。女の体で道場破りにも立ち向かつていきましたし、伍助という厄介者を抱えてそれも放り出したりもしない。まあ……これは、多分に成り行き的な部分があるんでしょうけど」

「…………」

「六三郎さんは強い人です。今までの人を見ていて、私、そう思いました。彼は何からも逃げ出すことをしなかつた。あんな状況でも姫様のことを諦めてはいない。心から姫様のことを大切に思つているんですね……。最初は異国のどこの馬の骨とも知れぬ男と思つてましたが……、今は、姫様が六三郎さんに惹かれた訳が判るような気がします」

「…………」

アニスが心からそう思つてくれているのが判る。

最初は六三郎のことを良く思つていなかつたアーネスが、こんな風に言つなんて……。

「姫様も、六三郎さんの気持ちに答えないといけませんよ。体が治つたら、ふたりで六三郎さんに会いに行つて、謝つて、本当のこと話をしましよう。それに、アサギも伍助も命を狙われています。危険な状況の中に姫様を連れて行くのは本意ではありませんが、姫様の力があれば彼らを助けてあげられるかも知れません」

「そうね……。わかつた」

私は逸らしていた目をアーネスに戻し、しっかりと向き合つた。

「私も……頑張らなきゃね！ なんのためにアムランを飛び出してきたのか、すっかり忘れてたわ！」

魔法で体力を消耗することはないとアーネスには話したけど、実は精神力はしつかり消耗されていくのよね。

(まあHPは削られないけどMPは削られますって感じ?)

精神力を消耗すると、交感神経に負担がかかります。そうすると体に疲れを感じるようになり、血流が悪くなり、イライラしたり不眠になつたりしてしまうのです。

幸いなことにここは温泉宿。

温かい温泉にゆっくり浸かって、リラックスしながら血行を良くすれば神経の疲れの癒えも早くできるのよ。

……ということで、不眠気味の私は真夜中の温泉で少し神経を休めるにじみでした。

こここの温泉は、入浴後肌がぴりっと引き締まるような感じがして
気に入ってるのよね。

観光客も多いんだけど、私はいつも人除けのまじないをかけて入
つてるから、私が入浴しているときには浴場は無人になる。
雨季にもかかわらず、ここここ3日は晴天で、今日は明るい満月
が夜空に浮かんでいる。

それにしても、本当にジパングは不思議な国。
何日も続けて雨が降つていたり。

針のように細い葉の高い高い木がびっしりと山を囲んでいたり。
晴れた日でも森の中を歩くとしつとりしている。

私は湯氣に包まれてよりしつとりした空氣を楽しむように頬や腕
を撫でつけた。

慣れないからジパングの人たちのように長くお湯に浸かるこ
とはできないけど、温泉ってなんか気に入っちゃったのよね。

凝つた首筋をさすつて後れ毛を撫で上げると、結い上げた髪に挿
した六三郎のかんざしが当たった。

ここに六三郎がいて、一緒に温泉を旅できたら楽しいだらうな
。 。 。

初めて会ったときの六三郎は顔に似合わずおどけていて、野盗の
ひとりかと思つたりもしたわね。

「お嬢さん。悪夢は終わりました。白馬のお殿様が助けに参りました」

こんなふざけたことを言う人に会つたことなかつたなあ……。
野盗を次々に切り捨てて、開口一番これだもの。

確かに、六三郎なら何があつても大丈夫かも。

「琉球ってどんなところなんだ？　じつちはずいぶん違うんだろ？」

街道を歩きながら、六三郎は尋ねてきた。

「……そういえば、琉球とかいう国出身といつことになつてゐるよね。私。

「そ……そつねえ。六三郎は琉球について何か知つてるの？」

「うーん。正直あんまり知らないな。本州からずいぶん離れた南の島国つてぐらいしか」

「そつなの？」

「じゃあ、適当にアムランの話をしてもボロは出なさそつね。

「ここみたいにたくさんの緑はないわ。雨もほとんど降らないし。砂漠があつて乾いた大地の上に低い草木が生えている。石で作られた城や寺院があつて、褐色や黒、白い壁のものがあるわ。市場では果物や香辛料、織物や宝石が売られていて賑やかなのよ」

「へえ……。想像つかないけど、楽しそうだな」

「行商人から外国の話を聞くのが楽しいわ」

ジパングの話を知つてる行商人は少なかつたけどね。

4つの季節を持ち、家屋は黄金できていて、水と緑豊かな国。人々は美しく礼儀正しく、人肉を食べる習慣がある……（これは信じてなかつたけど）とか言っていたわ。

「やつこえざ、 いの国には黄金でできた城があるわ。このは本当
？」

「黄金でできた城？？」

六三郎は首を傾げた。

「やつこえざ、京には鹿苑寺とこゝ金色の寺院があると聞いたことが
あるなー」

金色の寺院！？

「京？ 行つてみたい！ いじから遠いの？」

私は六三郎に飛びついてしまっていった。

六三郎は苦笑しながら答えた。

「七重の足じやひと月はかかるよ」

「えー」

「でも、七重が好きそなところだ。かつての日本の都で、華やか
できれいなものがいっぱいあるわ。じよよ」

「えー！ 絶対行きたい！」

「絶対つて……」

六三郎は呆れたよつて、でもちよつと楽しそうに笑った。

「そうだな。すぐには無理だけど、こつか行こう。

私の力を持つてすればすぐに行けるんだけどな。

仕方ない、六三郎には私の魔法のことは秘密だから。

でも、金色の寺院があつて華やかできれいなものがいっぱいある国なんて、行かないわけにはいかないわよ！

よし、京ね。覚えたわ！

「京も……、行ってみたいな……」

湯面でぴちやぴちやと手のひらを振つて滴を飛ばしながら呟いた。温泉でちょっとのんびりしたら、アニスと一緒に京に行くつもりだつたんだけどね。

こりこりあつて……すっかり忘れてたわ。

六三郎のことを思い出しながら漫かつていたらすっかり長湯しきあちやった……。

気がつくとなんだか頭がぼーっとして、首を振るとめまいでする。

あらり……いけない。もうそろそろ上がること……。

私はようようと立ち上がりつて脱衣所の方へ歩いて行こうとした。その、瞬間……。

「痛つ……」

一瞬背中に激痛が走り、宙に浮いたような浮遊感を感じた。

(七重———)

六三郎！？

同時に、六三郎の呼ぶ声が頭の中に響いた。

説明がつかない何かの力が働いたのか、六三郎の命が危険に晒されていることが瞬時に伝わってきた。

何故と聞かれても、それはわからない。

ただ、彼が死にかけている、それは確信できた。

背中に刺し傷を負つて、水に流れされ今にも息絶えそうな六三郎の姿が不意に私の脳裏に浮き上がってきたから。

すぐに、六三郎のところへ行かなければ……！

私は慌てて浴衣を羽織り、魔法で空飛ぶじゅうたんを引き寄せて乗り、六三郎のいる崖下に向かつて全速力で飛んだ。

ただ、ひたすら、間に合ひごとに祈りながら……。

六さんが逃げた奥さんを追つて行つちまつた後、残された俺達は顔を見合させていた。

「行つちまつたか。…… しうがねえな、追つか。里の追つ手がやつて来たらやばいからな」

「ちつ！ めんどくさい事しやがつて」

「あんなのほつときやいいんだ」

新九郎がめんどくさい事しやがつてこるのはともかく、アサギはやつぱり不満そうだ。

どうやら六さんの奥さんとなんかあったっぽいな。まさか奥さん

に手を出したわけじゃないだろうが。

だが、今はそんな事を詮索している場合じやねえか。

「いこから行くぞ！ いへり六さんでも一人じや危険なんだよ」

しかし愚図るにこつらを促して六さんの後を追おつとした瞬間、いつちに近づいてくる追つ手の氣配を感じた。

くやー、ちつそく来やがったか。今六さんを追つたら後ろから殺されちまつ。先にこつちを始末するしかない。

「追つ手が来たぞ！ とつあえずアサギは隠れているー」

とほこつもの、やーいだしたもんかね。こつもほ司令塔の六

さんが奥さんの事でとち狂つちまつて行つちまつたし、アサギは戦力にならねえ。新九郎は馬鹿だしな。

仕方がない。六さんは居ねえけど、とりあえず六さんが立てた作戦通りでやってみるか。

「よし！ 新九郎囮になれ。その間に俺が追っ手を倒す

「アホか！ 誰が囮になんかなるか！」

「六さん居る時にやつてた作戦だろ！ さつきまでやつてただろうが！」

「なんだと！？ あれは六三郎との『テート』ではなかつたのか！」

駄目だ予想に寸分たがわづ馬鹿だ。しかしこいつが囮になつてくれないと、さすがに多勢に無勢で無策で戦つちゃ勝ち目は無い。

「とにかくさつきと同じ様に、街道を歩いてくれ

こうしてさつきと同じ様に新九郎を囮に、奴に気をとられている追つ手を俺は始末していった。多勢と言つてもアサギを抜いた俺達より多いってだけで、実際追つ手は4人だけだつたしな。

そして追つ手が新九郎に気をとられている間に2人倒す事ができ、後の2人は俺一人で倒すのは訛なかつた。自慢じやねえが俺は里で1、2を争う技能の持ち主だつたからな。

「ずいぶんあつけねえ奴らだつたな

「殺つたのは全部兄貴じゃねえか

「なんだと。俺が囮になつてやつたからだろ」

どうもアサギと新九郎は相性が悪いか。まあアサギはみんなから仲間はずれにされていたせいだ、自分の味方と思つた奴には異常に肩入れするところがある。

俺と新九郎の仲が悪いのを察して、新九郎に牙を向けてるつて訳か。とはいってもここでいがみ合われちゃ今はちょっと面倒だ。こはたしなめておくか。

「おいおい。アサギあんまりけんか腰になるな

「でもよ兄貴」

「いいから黙れ」

とりあえず今は強引にでも黙らせる。とにかく早く六さんを追わなくちゃなんねえからな。

俺は新九郎とアサギと共に六さんの後を追つた。

だが今は六さんに追いつくのが先決だ。このふたりの速度に合わせてられねえ。

俺は新九郎達を後に急いで進む。

だがいくら追つても六さんに追いつかねえ。六さんはなんだかんだいつも女の身体だ。いくら先に行つたとしても、俺が全力で追いかけてるんだ。もう追いついても良い頃なんだが……。

俺はそこで足を止め、新九郎とアサギが追いついてくるのを待つ

て2人と合流した。

「どうしたんだ兄貴？　あの六郎つてこのを追いかけるんじゃなかつたのか？」

「それが、そろそろ追いついてもおかしくねえんだが、姿が見えねえんだ」

「もうと先に行つてゐんじゃねえのか？」

「いや、俺の脚ならとっくに追いついてるはずなんだ。それが一向に追いつかない。もしかしたら六さんは別の道に行つて、いつの間にか追い抜いちまつてるのかも知れない」

「なんだと。じゃあ、どうするつてんだよ」

新九郎は苛立つた様に言つたが、俺だつてどうじよつか迷つてるんだよ。とは言つても面倒だが、引き返しながら探すしかないのか？

「しょうがない。戻りながら六さんを探そづ」

「わーー、じゃあとひとと手分けして見つけようぜ」

「そうだな」

という訳で俺達は手分けしてつて言つても、さすがにまだ半人前のアサギを1人にする訳にはいかない。

「新九郎。アサギを頼む」

「おーおー。こんなガキのお守りなんてまつぱりめんだぞ」

「俺だつてこんな奴御免だね！」

「一々手間を取らすんじゃねえよ。いいから頼んだぞー。」

アサギを新九郎に押し付けた俺は、あちこち六さんを探したが全然見つからない。だがそこに新九郎とアサギとは別の人間の気配を感じ反射的に木の陰に身を隠した。

俺が身を隠していると里の者らしき2人、注意も散漫に俺が隠れる木を通り過ぎ里の方に向かつて駆け抜けていく。

「ずいぶん油断しているな？」と俺はその後を追つた。すると油断しきつている2人は走りながら会話を始め、こっちまでその声が漏れ聞こえてくる。

「声に聞き覚えがあるな。確かに重三シゲソウと長治チヨウジだったか……。まあ上に取り入つてばかりで嫌な奴だつたな。」

しかしあの2人、何の警戒もしてやがらねえ。里の質も落ちたもんだぜ。だが今はそれがありがたい。

「伍助の仲間らしいあの女みたいな奴を始末したから、後は伍助ともう1人か」

「ああ、あの崖から落ちたらひとたまりも無いだろう。意外と楽なもんだつたな。この分じゃ残りの2人も訳ないだろつよ」

「なに!? まさか六さんが？ おい！ しゃれになんねえぞ！」

ブチ切れた俺は、反射的に棒手裏剣を長治の背から心臓と重三のふくらはぎに向けたて続けに放つた。

「ぐわつー。」

「あやあー。」

2人とも転倒し長治はそのまま動かなくなる。そして足を引きずつて逃げようとする重三の怪我をしていない方のふくらはぎにて、逃げられない様にとせりて手裏剣をお見舞いしてやった。

「ひいいー！」

両足が動かなくなり、のた打ち回る重三に俺はゆっくりと近づく。色々と聞き出さなくいやなんねえから、精々怖がらせてやらないと。

「よつシゲ久しづりだな。今なんて言つてた？　俺の仲間を殺つたつて言つてたか？」

俺の問いかけに重三はのた打ち回るのを止めて、両手を地面につき尻餅を付く様な格好で俺の問には答へず、睨んできやがる。結構いい度胸しているじゃねえか。

その度胸がいつまで持つか。俺はさらに近づきながら棒手裏剣を力いっぱい重三に向かつて投げつけ、手裏剣は重三の右手の甲を突き抜け根元まで突き刺さった。

「ぐがつー。」

「いいから答へろよ。」

しかし見上げた根性な事に、重三は俺に投げ返そうと言つのか、手の甲の手裏剣を抜こうとしたが、根元まで刺さった手裏剣は簡単

には抜けない。

痛みにくぐもつた声をだし手裏剣を抜くのを諦めた重三は、またも俺を睨んで問いかねばならない。まったく無駄な事を。

「馬鹿か！」

今日は重三の太腿に向けて力いっぱい手裏剣を投げつける。今度は太腿に根元まで突き刺さった。おそらく骨まで達しだろう。重三は痛みにのた打ち回つた。

人の仲間を殺つておいて、手加減して貰えるとか甘い考え起してるんじゃないだろうな。

「いいか？ シゲ。お前はどうせ喋つちまうんだよ。俺はお前が喋るまで何本でもお前の手と足に手裏剣を投げ続けるぜ？ お前は何本まで耐えられるんだ？ 5本か？ 10本か？ 20本は耐えらねえだろ？ どうせ喋つちまうんだつたら、ひとつと喋つちまんな」

だが重三はまだ口を翻ひつとはしない。だーー！ めんどくせえ！

「い、い、か、ら、しゃ、べ、れ、よー！」

俺は一文字一文字口に出す「」とに、至近距離から手裏剣を力いつぱい投げ、重三の手足に叩き付けた。手裏剣はすべて根元まで刺さり骨を貫通する。

「ひいいーーーー！」

俺は悲鳴を上げ地面をのた打ち回る重三にしゃがみ込んで微笑み

かけた。

「なあ。お前後何年生きるんだ？両手両足が不自由になつてずっとはつて暮らす心算か？今なら傷の手当をすりゃ治るんだぜ？」

微妙にもう手遅れっぽい氣もするが、俺の思いやりある忠告に重三はやつと口を割り、六さんを追い詰め谷底に落とした事と、その場所を聞きだした。まったくこの程度の事に意地になつて口を噤むんじやねえよ。

話を聞き出しからこなもつ重三には用はない。

その場に捨て置いて元来た道を引き返したが、まあ運がよければ生き延びるだろ？

しばらく走つているとこに向かっていた新九郎とアサギに会流した。そして重三から聞き出した話を2人に説明する。

「どうやら六さんは追つ手の奴らに追われて、谷底に落ちたらしい」

「なに！？ 六三郎は大丈夫なんだろうな！」

新九郎は俺の襟首を掴み食つて掛かるが、俺はその手を振り払つた。まったく馬鹿力で締め上げやがつて。

「俺にそんな事分かる訳ないだろ！とにかくその場所まで行くぞ

俺達はとりあえず六さんが落ちたといつその場所まで行つた。だが……。

「結構高いな」

下の方に川が流れているのは見えるんだが、相当な高さだ。これじゃいくら上手く川に落ちてもかなりの衝撃を受けちまうだらう。気絶ぐらいしているかも知れない。

「……から落ちたらさすがにひとたまりもないんじゃねえの？」

「縁起でもねえ事言うんじゃないよ。泣かすぞこのガキ！」

まつたくこんな時までいがみ合いやがつて。仲良くしようとは言わねえけど、せめて静かに出来ねえもんかね。

「下は川になってるんだから上手く川に落ちてれば、助かっている可能性もあるだろ。下まで行くぞ」

とは言つものの、もう口が暮れるか。夜に月の明かりすら届かなそそうな谷底にいくのは危険か。それに周りが見えないんじゃ折角下に下りても六さんを探せねえ。それでも谷底の手前まで行きそこで日が昇るのを待つ事にした。

とても寝ては居られないでの、3人とも起きて焚き火を囲んだ。アサギが俺と仲の悪そうな新九郎に突っかかるのはともかく、六さんに突っかかるのに違和感を感じていた俺は、アサギに言葉を向けてみた。

「つつても、まあ当たりはついている。六さんの嫁さんに助けられて、結構入れあげているっぽいからその関係だろつ。

「おい。お前七重つて人となんかあつたのか？」

「別に……なんでもねえよ」

とはいものの、いつもだったら俺から視線を外さないアサギが、視線を泳がせあからさまに怪しい。まあ惚れたんだろうな。

それでも、惚れた相手の旦那が自分が勝てそうも無い男らしい奴なら諦めもついたが、女みたいな奴だったので、我慢なら無かつたつてどこか。六さんの凄さは一緒に戦つてみねえと分かんねえ仕方ねえか。実際女みたいどころか女だし。

一度六さんの戦いぶりをみれば、こいつも六さんを見直すんだろうけど。その為にもとつと六さんと合流したいんだが……。

そして俺達は、朝になつて谷底に入つたが、どこにも六さんの姿が無い。やつぱり、下流の方まで流れちまつたか。

「よし。もつと下流にまで行つてみよう

と俺はみなを促したが、新九郎はすでに無言で、さすがにアサギも口を噤んでいる。

しかしいくら探ししても六さんの姿を見つける事は出来なかつた。口を割らしたシゲの言つ事を信じりや、手裏剣は間違いなく六さんに当たつてるし、崖から落ちた事も考えりや自分で動いて移動しているとは考えられねえし……。

「そ！ 俺が巻き込んだ所がで六さんが……！」

俺が唇を噛み締め、血が出るほど拳を握つてると、新九郎が思いの外静かな口調で口を開いた。

「ひなつたら、やることあ決まつてゐだろ。六三郎のあだ號ちこ、

お前が言つていたその里とか言つのことひどく行くぞ」

「新九郎……」

「里への抜け道なんざ探してらんねえ。正面から突っ込んでやる」

新九郎……まさか死ぬ心算か。だが新九郎まで死なせる訳にはいかねえ……。

……俺一人で突っ込むか。俺がそう考えていると、アサギが遠慮がちに口を挟んできた。

「里への抜け道なら……。俺知ってる……」

「なんだと! ?」

「俺……みんなに仲間はずれにされて、人気の無いところに行く事が多かつたから……。それで洞窟を見つけて、その洞窟が里の外まで続いてるんだ」

「なに! アサギ、それは本当か!」

「ああ。本當だ」

「よし! そこから潜入して里の奴らをやつづけてやる! セー!」

「ああ、やつてやる!」

俺達は六さんと俺の親父の仇をとるべく里へと向かつたのだった

日暮れが近い薄紅のこじむ空を空飛ぶじゅうたんで飛ばしてきた私は、眼下の急流を皿にして心臓が止まりやつになつた。

……こんな流れの中を……六三郎が……。

だめだめっ……呆けてはいられないわ！

まだ彼は生きている……

弱々しいながらも六三郎の気配は途切れてはいない。

私はアサギを探したとき以上に神経を研ぎ澄ませ、広範囲にわたって六三郎の気配を探つた。

本来は水晶玉という媒介を使って相手の姿を映し出すんだけど、今はそんな場合じゃない！

直接私の頭の中に六三郎の映像を描くように集中する。

温泉に浸かっていたのはせと、緊張と、疲労のあまり激しい頭痛に頭が割れそうになる。

「へつ……」

意識が遠のきやうなつて声を上げる。

「んな……頭痛ぐらいで、氣を失つてゐる場合じゃないわっ！

頭痛に耐えながら皿をつぶると、からうじて皿に引っかかるて流れずにはいる六三郎の姿が飛び込んできた。

皮肉にも女であることが幸いしたのか、仰向けに浮いている六三郎は意識は失つてゐるものそのほど水を飲んでいないようだ。

……良かつた！ これなら、助けられる……はず……

音速を超える勢いで下流を目指して私はじゅうたんを飛ばした。

「六三郎……」

それから一分と経たないうちに六三郎を発見できた私だけど、瀕死の彼を目にしたら声を上げずにはいられなかつた。
両目に涙がにじんでくる……。

いけない！ 泣いてる場合じゃないのよ……

自分を奮い立たせるようにパンと両頬を叩き、じゅうたんの高度を水面ぎりぎりまで下げて六三郎の体をつかまえた。
それから落ち着いて両脇に腕を通して、気合を入れて一気に引き上げる。

「…………しよう……と……」

も……持ち上がらない……！

人間の体つてこんなに重いものだつたの……？

思い直して半重力の魔法を使い、六三郎の体重を半減させる。
それでも、ずいぶん重く感じたけど、着物が水分を吸っているのと六三郎の意識がなくてぐつたりしている分、余計に重く感じるのね。きっと。

「六三郎……」

やつとの思いでじゅうたんに引きずり上げ、改めて六三郎の顔を見るとい、血の気が引いて唇が紫色になつてゐる。
息を……していない？

私は自分自身の心臓が凍りつきそつになるのを感じた。

そんな……！ 嫌よ……！
にじみかけていた涙が溢れて頬を伝つた。
そのとき、頭の中で、誰かの声が響いた気がした。

『死ナセナイ』

自分自身の奥底から聞こえてくるような声だつた。
私の魂が私自身にそう叫んでいたのかも知れない。

さうよー、死なせないわ！ 死なせてたまるもんですかっ！

私はぎゅっと口を閉じて、六三郎の肺に意識を集中する。

水分子を分解して追い出し、酸素を送り込む。

急速にではなく、ゆっくりと……。

肺と脳が酸素を受け入れられるよつと。

心臓はまだ動いている。

脳細胞の損傷もほとんどない。

後は、傷口を探して……。あつた！

背中に2箇所鋭利な刃物が突き刺さっている。

不思議な形の刃物だ。四芒星の形……？

ヘビのものらしい出血毒が塗られているみたい。血が固まるのを邪魔しているから、傷口の小さいのわに出血が止まらないのね！

私は再び魔力を駆使して止血をし、血液を浄化しながら田に付いた洞窟に滑り込んだ。

乗つてきたじゅうたんを敷いて六三郎を横たわらせ、血液の浄化を続けると、今度は六三郎の体ががたがたと震えだした。

水中で血圧が下がりすぎていて、低体温症を引き起こしているんだわ。

私は六三郎の濡れた服を脱がせて、自分の体温で彼の体を温めようとした。

すると……

「なによ、これっ？」

着物をはだけてみると、六三郎の胸は、*トニー・寧子*のやつに幅広の包帯のようなものでぐるぐる巻きになっていた。

もちろん、包帯？ はぐつしょりと濡れていってぴったりと体に貼りついている。

「そりか……。胸を隠すために……。それにしても邪魔つけねえー

私は遠慮なくかまいたちの魔法で包帯を引き剥ぎ、六三郎の体から剥ぎ取った。

すると白く艶のある豊かな胸が露わになった。

まるで少女のものとしか思えないような瑞々しい乳房に目を奪わ

れる。

！――！

……そうだった……。

今の六三郎にはバストがあるんだつたわ……。

それにしても、きれーな体ねえ……。

女性らしい豊満な肉体……といつのではないけれど、無駄のない
しなやかな少女のような体型だ。

それで、出るところはしつかり出てるつてといが……。

～～～～～～～ん……。複雑な気分だわっ――

六三郎の濡れた着物をすべて脱がせ、私も浴衣の前を開き、六三
郎の上に覆いかぶさるように肌を重ねる。

やつぱり、冷え切つてゐわね……。

幸い私には温泉で温まつた余熱があつたから、六三郎の冷たさに
凍えることはなかつたけど、できれば洞窟の中ももつと暖かくして
おきたいな……。

と思つたとき、田の前をコウモリが横切つてこくのが見えた。
よし。

「あんた、仲間と一緒に薪になりそつた乾いた枝をいっぱい集めて
きなさい」

私はコウモリに暗示をかけて、薪を集めてくるよい命令した。
コウモリはふらふらと洞窟の奥に入ったかと思つと、十数匹の仲
間を引き連れて洞窟を出て行つた。

3往復ぐらいで「コウモリたちが十分な薪の量を集めている間に、私は六三郎を温めながら自分の血液を六三郎の体の中に送っていた。アサギのときはできなかつたことだけじ、ありがたいことに私と六三郎は血液の型が一緒だつたのよね。

「これで、アサギのときより格段に早く回復できるはず……」

そう思つて口元に笑みを浮かべると、次の瞬間に洞窟の天井がぐにゅりと揺れて見えるよつなめまいを感じた。

いけない……。だいぶん疲労してゐるわね～……。

「コウモリたちが積み重ねた薪に火をつけると、ほとんび闇の中だつた洞窟がほの明るくなり、岩肌まではつきりと見えるよつになつてきた。

すっかり日が暮れたのか、我に返つたコウモリたちは獲物を求めて夜の闇に飛び出していつたよつだつた。

私は再び六三郎に体を重ねて、彼の腕や首筋をさすりながら温めていた。

六三郎は長いまづげを伏せて、今は呼吸も落ち着いている。
冷えた体さえ温まれば、多少のだるさや痛みは残るだらうけど、
ほぼ通常の状態に戻れるはずだ。

「ふふ……。なんだか、いつもと逆ねえ」

以前六三郎と体を重ねたときはいつも六三郎が上だつた。
私は六三郎の腕に抱き締められ、彼の体に包まれるようにして、
草の褥の上で星空を見上げていた。

男のときから六三郎の体は細くしなやかだったけど、やっぱり女の体とは違うわねえ……。

もつと硬くて骨っぽい感じだったのに。

今はわき腹や腕に残る紅色の刀傷さえ色々っぽく見えるほど、女の体だわ。

……私と比べると、だいぶん胸は小さくし、凹凸のない体だけどね……。

ずっとこのまま……元に戻らないのかしら?

息が止まるかと思うぐらい、強く私を抱いた六三郎にはもう戻れないのかしら?

細いけど力強い腕。頬に触れるとときどき硬く短いヒゲが当たつた。

男の人なんだなあ……って、いじばりやく思つた。

もう、あんな風に……抱き締められる」とはなくなりやうのかしら?

そう思つと、また涙が出てきた。

全部、私がやつたことなのに……。
六三郎を信じられなかつたから……。

崖から落ちる瞬間、私の名前を叫んだ六三郎を。

感極まって六三郎の背中に腕を回しきゅうと抱き締めると、ぼんやりと意識を取り戻し始めたらしい彼が目を開いた。

「ひ……ん」

「六三郎！」

私は顔を上げて、目を開けたり瞑つたりしている六三郎を見た。そして、とひそかに彼の名を呼んだもののはつと呟いた。

どうしよう……。無我夢中で何も考えず助けたけど……。私、六三郎になんて言えばいいの……？？

この状況を、どう説明したらいいの～～？？

「なな……え？」

六三郎は今度こそはつきりと目を覚ましたのか、急に起き上がりつて、そのはすみで一緒に起き上がってしまった私の肩をがっしりと掴んだ。

「七重なのか！ 本当に？？」

「え……ええ……」

「七重！」

一瞬のためらいもなく六三郎は私を抱き締めた。

死に掛けていた人とは思えない、そして女とは思えないような強

い力で。

背中に置かれた指が、私の髪や額中を撫でる。

その手の温かさに、彼が死の淵から逃れたのだと、間違いない。命を取り留めたのだといつ実感が湧いてきて泣きそうになる。

「六三郎……よかつた……」

「七重……」

六三郎がまた抱き締める腕に強く力を込める。少し息苦しいぐらいに。

「これは……夢なのか？」

「……夢じゃないわ。ほんとのことよ」

「崖から落ちて……極楽浄土にいるんじゃないのか？」

「崖から落ちたのも本当よ。でも、流されずに崖に引つかかっているあなたを見つけたの。それで、すぐに助けることができたのよ……」

六三郎は目を閉じてしばらく私の頬や首に頬ずりをした。まだ湿った彼の髪が私の頬や首筋をくすぐる。

「七重が助けてくれたのか……」

「……うん

今度は私の頬に両手を添えてじつと私の顔を見る。そして、目を細めて笑う。

こつもの……六三郎の、あの笑顔だ。

「本当に七重がいるんだな？ 田が覚めると消えてしまつ。いつも
の夢じやないんだな？」

「本当に」

「七重……」

六三郎はまた私を抱き締めた。わいせよりも一層強い力で。

「ちよつと……放してよ。六三郎。苦しいわ……」

六三郎は頭を振つて私の首に顔を埋めた。

「放すと七重かへいつまうかも……」

「七重くも……行かないから」

「七重？」

不意に六三郎が何かに気づいたように私の耳元で言つた。

「俺たちなんで裸なんだ？」

本来なら感動の再会……つていうムード満点の場面なんだけど、何故か薄暗い洞窟でセミヌードの女ふたりが向かい合つているという妖しさ満点のシチュエーションになってしまっているのよねえ……

。。

一命を取り留めた六三郎が思いのほか元氣なせいもあって、さつさまでのシリアルなムードが一転して妙な空気が漂っている……気がするるのは私だけかも知れないと……。

「おわあっ――――！」

六三郎は次の瞬間、はつとしたように自分の体を見下ろして、さらには大声で叫びながら腕で胸を隠して後ろに飛びのいた。

何……？　さっきまで生死の境をさまよっていたとは思えない、このイキのよさは……？
てか……。あれ？？？

「ん？？？」

六三郎も気づいたのか、恐る恐る自分の胸から腕を外し、改めて胸元を見る。

……胸が……ない？？

「ハ、これは……」

信じられないといった表情でしきりに自分の胸を上下させつつしている。

「戻ってる……男に」

「……どうして……？？」

魔法をかけた私自身も信じられなかつたわ……！

だつて、張本人の私が解呪魔法を知らないし……、時間の経過で解けるような性質の魔法じやないはずだから……。

でも、道理でさつき抱き締められたとき女にしては異常に力が強いと思つたのよね……。

「どういうわけだ？？今までのは夢か？俺は女になつた夢を見たのか？伍助も新九郎も……夢なのか？」

六三郎はまだ自分の胸をさすりながら咳いている。

「……夢じやないわ。全部、本当のことよ。六三郎が……女になつてしまつたのも。伍助や新九郎や……アサギと出会つたことも……」

私は浴衣に袖を通し、前を合わせながら言つた。

六三郎はこれ以上ないといつぱりいの驚きの表情を浮かべて私を見た。

「どうして知つてゐるんだ？七重」

「…………」

どう説明しようかと考へがまとまらなくて黙り込んでしまつた私の両腕を六三郎はがしつと掴んだ。

「どうしてなんだ？お前は琉球の姫なのか？八重さんは俺のことを知つていて道場に来たのか？どうして俺のことを何もかも知つてるんだ？どうして、俺の元からいなくなつちまつたんだ？」

七重！

これまでの疲れと温泉ののぼせと、ここに来て魔法を駆使しそぎたせいか一瞬強いめまいがした。

力が抜けて崩れ落ちる私を六三郎が慌てて抱きとめる。

「どうした？ 七重？ 大丈夫か？」

「…………ごめんなさい」

知らず知らずのうちに頬を涙が伝っていた。

「七重？」

「私の…………せいなのよ」

「七重のせい？」

私は六三郎の胸に顔を埋めた。
涙が、今は温かい六三郎の胸を濡らす。

「私が呪ったの…………。六三郎が女になるよう……。初めて六三郎に抱かれたときに……。六三郎の妻になつたときに……」

「呪い……？」

六三郎は私を抱きとめながら、信じられないといった声を上げた。

「呪いつて……そんなファンタジーじゃあるまいし……

「でも、現に六三郎は女になつたでしょ？」

「ま……そ、そりやそつなんだが」

『うーん』と唸りながら六三郎は頭を搔いた。

「だとしたら、そもそも七重はなんで俺を呪つたりしたんだ？ 本当は俺のことが嫌だったのか？ だから俺から逃げちまつたのか？」

「違ひわ

私は首を振つて六三郎を見た。

「六三郎が……好きだつたから

「はあ？」

「だから……六三郎が、他の人を好きになつてその人に触れたときに女になるよつ呪つたの……。私以外を愛せないよつこ……」

「ええ??」

六三郎は頭を抱えた。

「待て、ちょっと待て……」

そして何かを考えながらしきりに首を振つた。

「……それつて、もしかして、俺が浮氣したら女になつてしまえつてことか……？」

私は頷いた。

「おー！　俺は浮氣なんかしてないぞー。」

「したわよ」

「知らん… 断じて身に覚えがない…！」

「多兵衛さんとキスしてたじゃなーの？！　それからあの伍助つて男とも…！」

私はついカーッとなつて、六三郎の胸を突き飛ばすよつと押し退けて怒鳴ってしまった。

「な、ななんで知つてるんだ…？」

にわかに焦りだした六三郎がどもりながら聞いた。
やつぱり！　身に覚えがあるんじゃないの…！

「見たのよ。この田代」

「誤解だぞ！　あれは井戸端なんだ！　おふみの奴が俺についてくるつてしまこにから。……つて、多兵衛さん？」

「おふみって誰よ？」

「おふみは……昔の元カノで……。も、もちろん今は何の関係もないぞ！　それに多兵衛さんがどうして出てくれるんだ？」

どこまでもしらばつくれる氣？

私は見たんですからね！ 六三郎と多兵衛さんが道場でキスして
るのを！

「酔っ払って多兵衛さんと道場に行つたときに、心配して見に行つ
たら、六三郎が多兵衛さんにしがみついてキスしてたのよつ！ 六
三郎の方からキスしてたわ！」

「はああああ？？？」

怒鳴つたせいか息が上がつてきて、私ははあはあと荒い呼吸をし
ながら六三郎を睨みつけた。

六三郎はしかめつ面のまま首を傾げ、しきりに何かを考えている。

「記憶にないぞ……。あの日は……飲みすぎた……」

「聞きたくないわよつ！ 言い訳は

「言い訳じゃないって。本当に覚えてないんだ。それに、そのとき
はきっと七重の夢を見てた」

「だから言つて訳は……」

「じぶしを握つて振り回そとする私の両手首を握つて、六三郎は
真面目な表情で私の目を見つめた。

「本當だ。前も寝込みを襲つてきやがつた伍助に抱きつこつまつた
ことがあつたが、あのときも七重の夢を見てた」

「信じられない！」

振りほどこうとしても振りほどけない……力が、強くて。

「本当に！ 第一男同士なんて気持ち悪くて耐えられんぞ、俺は。 寝ぼけてでもなきやキスなんてできるか！」

「だつて……じゃあ、なんで女になっちゃったのよ？ 情欲を持つて別の人と触れたときに発動する呪文なの……」

六三郎は上を向いてまた少し首を捻った。

しばらく考えてから、『わかった！』とばかりに晴れやかな表情で私を見た。

「別の人を七重だとと思い込んでたからだ！ 僕は酔っ払って寝ぼけて、多兵衛さんを七重と間違えたんだ」

「…………え？？」

「それしか考えられん。男にムラツとくるなんてあり得ん。吐き気がする」

六三郎は本当に気持ち悪そうに顔をしかめた。

…………ことは、勘違いで発動しちゃったの……？あの魔法……

「な……なんで今は男に戻ってるの？」

「…………それはわからん」

本人もまじまじと自分の体を見ているけど、私にも訳がわからな

い。

どんな理由があつて魔法が解けたのかしら？

「本当に男に戻つてゐるのかしら？」

「フ―――ん」

左手首を掴んでいた右手を離して、私の背中に回すままじゅうたんの上に仰向けに寝かせる。

そして、そつと私の上に体を重ねながら肩にかかつた浴衣を引き下ろして開いていく。

「……この男……。

男に戻つたと思つたら……これ？？

「確かめてみる？」

手を細めて微笑を浮かべながら、私の首から鎖骨の辺りまで撫でるように指を這わせる。

私は思わずびくっと反応してしまい、六三郎を睨みつける。

「ほつ……他に聞きたいことがあるんじゃないの？」

「俺がちゃんと男に戻つたかどうか確かめてから聞かせてもいい

言ひながらどんどん六三郎の顔が近づいてきて、その言葉が終わるところには耳たぶに彼の唇が触れたのがわかつた。

夢にまで見た七重が今俺の前に居る。しかも体が男に戻っている！
「これはやつぱりいつも通り夢なのか？　だとしたらやつぱりいつも通り良いこと」ひで目が覚めるというオチか？

いややつはせん！　今日は最後まで行かせて貰うぞ！　だが夢ならば急がなくては、グズグズしてては朝になってしまつ。折角七重と再会できたと思つたら目が覚めて目の前に伍助が居た。なんていつ夢オチはもう飽きたんだよ！

七重は聞きたい事があるんだじゃないかと言つてゐるが、俺の夢なんだつたら意味はないだろ。今はもっと重要な事があるはずだ！

「俺がちやんと男に戻つたかどうか確かめてから聞かせてもらひ

俺はそつと七重の耳たぶを唇で啄ばんだ。

そしてそのまま首筋に唇を這わせ、肌蹴かけていた七重の衣をさらりと肌蹴させ肩を露出させる。そしてその肩にも唇を沿わせた。

「駄田よ……六三郎……あ……」

小さくあげた七重の抗議の声を無視し、俺はさらに七重の体の下へと唇を滑らせていく。そして胸の膨らみに強く吸い付き、赤い印をつけた。そしてさらに俺の唇は下へと向かい……。

どれくらい身体を重ねていたのだろう……。

パチパチと音を立てて燃える焚き火が七重の肌に落ちひる影を揺らしている。

覆いかぶさっていた七重のほてつた身体から身を離した俺は、彼女に視線を向けたままその横に肘を付いて寝そべった。

そしてその手を握る。七重から視線を外せば、触れていなければ、またどこかに消えてしまうのは無いかと思ったからだ。

改めて思う。夢ではなかった。本当に七重が目の前に居るのだ。今感じた七重の体の温もりが夢のはずが無い。七重の手をさらに強く握り締める。一度と失わない為に。

しかしそうなるとさつき七重が言っていた事も全部本当で、俺が女になっていたのも呪いの所為だったというのも本当という事か？ とても信じられる話ではないとも思つたが、事実俺の女は体になつていた。

信じるしかないところとか……。

……まさか七重にそんな能力があるとは。色々と変わっている娘だとは思つては居たんだが……。
だがそうなると改めて聞きたい事が色々ある。

「俺に呪いをかけたって言つのは分かったけど、その……七重は……？」

七重はいつたい何なんだ？ まさか物の怪の類なんだろうか？？
……などという疑いが頭を過ぎつたものの、何と聞いたものやらわからない。

俺の思惑が読み取れたのか七重は少し苦笑しながら言った。

「心配しないで。私は人間よ。特別な力を持っているだけ……」

「そうか……」

七重の言葉に俺はそう言って、握っていた七重の手に口付けた。さすがに人間じゃなくて魔物とか言われると少し考えたが、ちゃんと人間だというなら問題ない。いや、たとえ七重が魔物だったとしても、七重でありさえするのなら……。

「私が……怖くないの？」

「どうして俺が自分の妻を怖がらなくてはいけないんだ？」

俺はそう言って七重を見詰めた。七重も俺を見詰め返し、俺たちはしばらく見詰め合つた。

「…………ありがとう。六三郎」

しかしそれはそうとして、確かに男を女に変えたりつて大変な力だな。七重みたいな力を持つている人間が大勢居るしたらどうでもない話だ。

「七重が住んでいた琉球ではみんな七重みたいな力を持っているのか？」

「私みたいな力を持つている人間ばかりじゃないわ。……私だけだつた。それに……」

「それに？」

「『い』めんなさい。六三郎が誤解したみたいだし、私も誤解されたままの方が都合が良かつたから黙つてたんだけど……。実は私は琉球から来たんじやないの」

なんだつて？ いやまあ確かに七重がいつ西からつていつ言葉から、俺が勝手にやう思つていただけで、七重から言に出した事では無かつたが。

「じゃあ、どこから来たんだ？」

「もつとまつと西の国」

「琉球よつ西つて言ひとび、朝鮮か？」

「もつと」

「中國？」

「こべ、もつと西」

「じゃあ……インドか？」

「もへん」

「わしがして、南蛮か？」

「それは行き過ぎ」

俺の言葉に七重は首を振り続ける。世界つて三國（日本、中国、朝鮮を含む？）、インド（他は南蛮だけじゃなかつたのか？）ずっとそう思つてたんだが。

「なに？ ジャあどこだ？」

「えーっと……アラビア」

アラビア？ なんだそれは？ そんなマイナーなところは知らん。しかしそう言つては七重が傷付くかもしれんな。七重の故郷なんだし。夫として妻の面子は守らないと。

「アラビアか……。えーと、確か知つていたと思つただけど、ビニウ辺だつたかな？」

「良いわよ。氣を使つてくれなくとも……。日本じゃあまり知られてないみたいだし。インドと南蛮との間辺りよ

「すまん。しかしそんな遠くからやつて來ていたとは……。どうやらつて日本に來たんだ？ 大変だつたらつ。しかも八重さんも一緒つて聞いたけど」

「ええ。アニー……八重は私の侍女なの。別に騙すつもりは無かつたんだけど、ちょっと六三郎の様子を見に行つて貰つたの」

「やつだつたのか……」

それで、俺と会つた時に八重さんは七重の事を言わなかつたんだな。しかしそうなると、アサギが言つていた七重はどこかのお姫様つて言うのも本当だつて事か。まあ折角本人が目の前に居るんだ、

聞いてみるか。

「じゃあ、アサギが言つてたんだが、七重はどこかのお姫様つて事か？」

「そうなの。私が住んでいたアラビアと言うのは国の名前ではなくてその地域全体を現す名前で、アラビアの中に沢山の王国があるんだけど、私はそのなかの一つの王国の王女なの」

「王国の王女！？ ジャあ、あれか。日本で言つと、將軍様の娘とか、そういう事なのか？」

「ええ。そういう事になるかもしないけど、アラビアは広いけど一つ一つの国は日本ほど大きくないから、日本で言つと藩のお姫様くらいじゃないかしら」

「そうなのか。それでも大変な事だな。仕官を求めて旅をしていた浪人の俺が、知らずとはい一国の姫を嫁にしてしまっていたとは驚きだ。

「でもそれが、どうして日本に來たんだ？ お姫様ならなんら不自由は無かつただろう」

「そうでもないわ。不自由ばかり、結婚相手すら自分では決められないんだもの。だから逃げ出してきたの」

「ふむ。なるほど。それで日本に來て理想の男である俺と出会つたという訳か。つまり俺はそのアラビアとかいう国の男たちより上で、世界レベルでいい男という訳だな。

だがまあその呪いとやらも解けたみたいだし、七重も居る。七重に呪いをかけられたのは何か誤解があつたみたいだが、その誤解も解けた。これで何もかも元通りで明日からまた七重と一緒に仕官探しの旅だ！

「よし！ とにかくこれでやっと元通りだ！ これからはお前を離さないぞ！」

俺がそう言つて改めて七重を抱きしめると、七重も俺を抱きしめ返してくれる。その体の温もりを再確認する様に俺は強く抱きしめた。

「……苦しいわ六三郎」

「すまん。少し我慢してくれ」

すると七重も力を強め精一杯抱きしめ返してきた。俺達は互いに強く抱きしめあつていたが、不意に七重がケホケホと咳き込んだ。

「あ、いかんさすがに強すぎたか」

俺は慌てて抱きしめていた力を弱めると、今度は優しく胸に抱き寄せた。

「馬鹿。私を殺す気なの？」

七重はそう言つて俺の胸に顔を埋める。俺は七重の長い髪に指を絡ませる。七重とのまどろんだ時間を楽しんでいたが、こうもしてばかりではない事を思い出した。

「やうだ……。伍助と合流しないとな」

「……そうね」

本当は七重とは一時たりとも離れたくは無いが、さすがに忍者との戦いに七重を連れて行くわけには行かない。不思議な力を持つているらしいが、それでも何があるか分からぬからな。

「七重はここで待つて居てくれ。すぐに片付けてくる」

「え？ ちょっと待つてよ。私も行くわ」

七重はそう言って起き上がろうとしたが、俺は胸に押さえ込んだ。俺だって七重とは離れたくないが、万一の事ががあればそれこそ永遠に七重を失ってしまう。

「駄目だ。危険なんだぞ。お前はここで待つていいんだ」

「でも……」

「いいからーー！ お前はここで居るー！」

七重は心配そうな顔で俺を見ているが、ここは断固として連れて行く訳には行かない。いくら七重に不思議な力があるとしても、相手は忍者だ。不意打ちとかされてその力を使う間もなくやられてしまう事もあり得るだろ？。

「分かったわ……。でもその前に六三郎に渡したい物があるの

「ん？ なんだ？」

「これよ

七重はそう言つて自分の指から指輪を抜き取り俺に差し出す。手ここつて見ると金で出来ていて何やら複雑な模様が彫つてある。

「ありがとう。大事にするよ。だが……小さくて俺の指では入りそうに無いな。紐を通して首にかけておくよ」

「いいえ。大丈夫。その指輪は身に付ける人によつて大きさが変わるので。ちょっと嵌めてみて」

そうは言つてもとてもじやないが俺の指には入りそうに無いんだが……。だが七重が言うのだからと、一応やってみるかと言う積もりで指輪の小さな穴に左手の薬指を向けた。そして入らないに決まつているよな。と思いながら指を進ませると、あれ？と思つ間に指輪に指が通つてしまつたのだった。

「どういう事だ？ なんかスルッと入つちまつたぞ？」

「だから言つたでしょ。身に付ける人によつて大きさが変わつて

「あ、ああ。そうか。しかし不思議な指輪だな」

「それはあなたの事を守ってくれるお守りよ」

「お守り？」

俺はそう言つて指を目の前にかざし、改めて指輪をマジマジと見詰めた。日本では見た事も無い模様が刻まれているくらいで、特に変わった感じはしないんだが。

「ええ。だから肌身離さず持つておいてね」

「分かった。ずっと指にはめて置くよ」

「そうしてちょうだい」

「じゃあ、俺は伍助のところに居る。お前は危険だから動くんじゃないぞ」

「でも……アニス、八重を呼んで来ないと。心配してくると思うし、もちろんおいていく訳にも行かないんだから」

「それもそうだな……。って、あれ？ そういうえば、俺とお前は2人きりで旅をしていたよな？ その時、八重さんはどこに居たんだ？ ずっとこっそり追いかけてきていたのか？」

「いえ、実は……八重も一緒に旅をしていたの」

「一緒にって？ どうに陋たつて書いたんだ？」

前に会った時の感じでは、八重さんには忍者みたいな能力はなさそうだった。いくらなんでも普通の女性に後を付けられていたら気配で分かりそうなものなんだが。

「私が持っているランプの中に潜んでいたの」

「ランプの中？ 人が？」

「どうやってランプの中に人間が入るんだ？？」

もしや物の怪は八重さんの方だったのか！？

「魔法のランプなのよ。今度六二郎も入つてみる？」

おいおい。

「いや……俺はいい」

最早とてもじゃないが話に付いていけない。

女にされた上、ランプの中に閉じ込められたんじゃたまつたもんじゃないぞ。

俺の表情から何かを読み取った七重は苦笑すると、身を翻す。

「じゃあ、八重を呼んで来るわ。2人でここ待っているから！」

七重はビンからか絨毯を取り出ると、それに座った。いやいや、いきなりくつろいでどうする。と思つていると、その絨毯がふわりと宙に浮く。そして猛スピードで洞窟を疾走し姿を消す。

…………やはりこれは夢なのか？　俺は思わず叫び声をつねつた。

キツネにつままれたような顔をした六三郎を置いて、アーネスの待つ温泉宿へ急ぐ。

何も言わずに露天風呂から飛んできちゃったから、さうとアーネスはすぐ心配してゐるはず……。

まずはアーネスに会つて、こいつやつら六三郎たちに合流しなきや。

朝まだき、淡いブルーの空を風に吹かれながらじゅうたんで飛んでいた。

強い風が髪をはたいてなびかせる。

まだ体に六三郎の匂いが残っているのを感じる。

それにしても……どうして六三郎はいきなり男に戻つたのかしら？？？

時間の経過で自然に解けるような魔法ではないはずなのにねえ……。

…。

ま、このまま元に戻つてくれてるんならアムランに戻る必要もなくて万々歳なんだけど。

私が魔女だと知つて六三郎はどう思つたのかしら……。

意外に動じる様子もなかつたし、それで私のことを忌み嫌つとう感じもなかつた。

「お前を離さないぞ!」と言つてはいたし、六三郎の私への気持ちに変化はなかつたみたいだつたな。

それより私が姫だつていうことの方が六三郎にはインパクトがあつたみたいで、そっちの方をしきりに気にした氣もあるし。

「ふつ……」

甘い疲労感が全身に残っていて知らず知らずのうちにため息が出る。

……それというのも……、くつたくたの私に六三郎が濃厚プレイをしかけてくれたおかげで~~~~~！

昨日の夜六三郎にされたことを思い出すと思わず顔が赤くなる。いつもは、もっとソフトな感じだったといつか……、あんな激しくなかつたわよね？

遠慮なしにやられるとあんな感じだとこいつことのかしら……？

なんだか、体の中が変わっているような気がする……。

六三郎の一部が体の中に残っているような……。

たぶん、しばらくしてなかつたせいよね？？　この違和感は。

体に染み込んでいる六三郎とのひとときを思い出しながらじゅうたんを飛ばしていると、こつの間にか下野の温泉宿に戻ってきた。

例によつて窓をぐぐって部屋に入ると、一睡もしていなかつたらしいアースが立ち上がりて駆け寄ってきた。

「姫様！――」

「『）めんなさい、アース……、実は……』

「無事でよかつた～！　突然いなくなつてしまわれて、ビijoを探し

てもいらっしゃらなくて……。生きた心地がしませんでしたよ……。そんな浴衣のまままでいたいどこに行つてたんですか！？

胸を撫で下ろしながら心配を一気に吐き出すようにアーニスが言った。

「『めんね』

私はアーニスの両手を握った。

「六三郎が崖から落ちて死にかけてたの」

「ええ？」

アーニスの表情が驚きでいっぱいになる。

「それがわかつたもんだから着るものもとりあえず飛んでいっちやつたのよ」

「さうだつたんですか……。で、六三郎さんは……？」

「大丈夫、助かったの」

「それは一安心ですね」

とつあえずほつとしたよつとアーニスは少し微笑んで見せた。

「……でね。いろいろ話したの……。私が魔法を使えることとか、私のかけた魔法で六三郎が女になっちゃったこととか……」

握ったアニスの手を離して、卓袱台の前の座布団の上にゆっくりと腰を下ろした。

続けてアニスも隣の座布団に腰を下ろす。

黙つたまま、じつと私の顔を見て。

「アニスの言うとおり……六三郎の浮氣は誤解だつたの。多兵衛さんとキスしたときも、伍助に抱きついたときも、私の夢を見てたんだつて……。寝ぼけて……私だとと思い込んでたんだつて……」

「まあ……それは……」

『災難でしたね……六三郎さんも』と言いたげにアニスは苦笑した。

「やうなの。それでね。私が魔女だつて話や本当はアムランつていう遠い国から来た姫なんだつて話もしたの」

あのとき、六三郎はただただ驚いた顔をしていたな。
黙つて田をつぶり、私の手の甲にキスをした……。

「六三郎に、『私が怖くないの?』って聞いてみたのよ……」

アムランでは魔法を使える私を恐れている人がたくさんいたから

……。

「そしたらね……。『どうして俺が自分の妻を怖がらなくてはいけないんだ?』……って」

アニスは小さく何度も頷いていた。多分アニスも無意識だつたん

だらう。

「不思議ね……。私が魔女でも姫でもなんでも、関係ないみたい……六三郎にとつては」

わざと呆れたように笑つて見せると、優しく微笑んだアニスが言った。

「六三郎さんが……姫様の運命の相手なんですね……」

「え？」

いきなりちょっと怒ったように表情をかえて腕組みをしながらアニスが続けた。

「本当は嫌なんですからね。こんなジパングなんて異国の貪^{くわ}之侍が姫様の相手なんて。まあ、確かに六三郎さんはイケメンだし、剣の腕も確かですけど」

「アニス……」

「……でも、ありのままの姫様を丸ごと愛してくれる人でないとね。いくら王様でも殿様でも姫様は渡せませんからね。仕方ない。六三郎さんには男に戻つてもうつてせいぜい出世してもらわないと……」

「……」

「あっ、のことなんだけじね

やうそ、言つて忘れてたわ。一番大事なこと。

「男に戻つちやつたのよ。六三郎」

「え? ? ?」

「いつのまにか、男に戻つてたの」

「わうなんですか? ? ?」

そのことに関しては、呪つた私も不思議でしうがないんだけど、
事実六三郎は正真正銘男の中の男だつたものねえ。（そのことは
自分の体で確認済みだし……）

何度も言つけど、あれは時間の経過で解けるよつた魔法じやない
んだけどな……。

「じゃあ、めでたしめでたし。大団円も近い……つて」とですか?」

「うへへへん……」

なんかひつかかるんだけど……。

「伍助の追つ手をなんとかすれば、そう……かしらね」

「ああ、わういえば。そんなこともありましたね」

すっかり忘れてたの……？ アニスつたら。

まあ、アニスにとつては伍助なんてただの端役なんでしょうけど
……。

「六三郎には事が片付くまでアニスとふたりで大人しく待つて
ようと言わてるんだけど……」

「姫様は大人しく待つておられる気などござりない……ですよね？」

「当たる」

ふうーーーとため息をついてアーネスは肩を竦めた。

「そうだろうと思つてましたよ。でも、確かに六三郎さんたちの命が危険にさらされてるわけですしねえ。もちろん姫様の安全が第一ですけど。姫様の力で彼らをサポートしてあげる必要があるかも知れませんね」

「うんうん」

「だけど、くれぐれも注意してくださいよ。もう一度言いますが、姫様の安全が第一なんですからね。彼らを狙っているニンジャとかいう連中は訓練された殺し屋の集団でしょう？？？姫様にいくら魔法が使えるからって、そんな連中との戦いに直接姫様が巻き込まれるのは避けるべきですよ。しつかり作戦を練つてサポートしますよね」

「うん。わかった」

さすがの私も二ンジャと正面から対峙したら危ないかも知れないけど、ここは私の得意な幻覚魔法の出番だと思うのよね～。

一度に何十人にも幻覚を見せることは難しいけど、5～6人ぐらいいずつならなんとかなるし。

結界の中で詠唱すれば攻撃される危険もないわけだし……。

「もちろん私もついて行きますからね」

当然といった表情でアニスは言った。

アニスが一番足手まといな氣もするけど……、まあ、じゅうたんに乗つて移動するときにはランプに入つてゐるだろうから、そのまま戦いが終わるまでランプで大人しくしてもらつとけばいいわね……。

「わかつた。でも、その前に少し休憩させて～～～」

私は大あくびをして隣の部屋に敷いてあつた布団の中に潜り込んだ。

「時間は大丈夫なんですか？」

「大丈夫大丈夫。じゅうたんで追いかければ六三郎たちなんて逆に追い越しちゃうわよ。アニスも休んでおいた方がいいわ」

「……そうですね」

「じゃあ2時間後にまたね～～～」

呴いた次の瞬間に私は眠りの中に落ちていた。

夢の中。

私はお母様の形見の銀の小箱を開いていた。

中から虹の光が花火のように次々に飛び出してくる。

飛び出した光は流星になつて、夜空を回るよつと流れている。

きれい……。

赤や青、緑、黄、紫、様々な色の流星がぐるぐると回る。回り灯籠のよつと。

キラキラと回転する七色の光の中を私は誰かと歩いている。

誰かと手をつないで……。

誰なんだろう?

知っている顔なのに、思い出せない。

誰かが流星を捕まえよつとして手を伸ばす。

私は声を上げて笑つている。

オレンジ色の光を捕まえた誰かは指の隙間からそれを私に見せて微笑みかける。

彼の笑顔を見ているだけで私の心は満たされる……。

彼? つてことは男なのね。この人。

六三郎???

違う……。六三郎じゃない。

会つたことのない人。

でも、知つてゐる気がする。

彼に手を引かれて光のアーチをぐぐる。

アーチの向こうにもうひとり誰かがいる。

彼は私の手を放して駆け出し、その人の手にオレンジ色の光を握らせる。

誰なの？ この人たちは？？ 誰？

「姫様。姫様！」

はつと田を覚ますとアニスに揺すられて起こされているといふだつた。

「時間になりましたよ。支度しましょつか？」

「うん……」

不思議な夢見だつたせいか、まだ頭がぼうつとしている。

あれ？ どんな夢だつたんだろう？

「アニス……。変な夢見た」

虹色の光がキラキラ……キラキラ……。

「またですか？ 姫様はほんとへに寝起きが悪いんですね」
荷物をまとめながら呆れ顔でアーニスが言ひ。

「なんだか知つてる人……いや、知らない人が出てきたような気がする……」

掴もうとする端から消えていく夢の余韻。

思い出したい氣もあるけど……無理、思い出せない。

今日はキモノよりも着慣れて動きやすいガラベーヤ（アーラブの婦人服。丈の長いワンピースのよつな服）を着ることにする。

金貨を数枚卓袱台に置き、お世話になつた宿を名残惜しい別れの気持ちで眺める。

またいつか……、今度来るときは六二郎と一緒に来れるわね。きっと。

「行きましょ！ 今日は飛ばすからアーニスはランプに入つてね」

七重が何やら複雑な模様の四畳ほどの大さの敷物に乗つて飛び去つた後、しばらく茫然としていた俺は我に返つて改めてこの状況について考えた。

全く、とんでもない話になつてゐるな。七重が戻つて来たのは嬉しいが、それがまさかこんな不思議な力の持ち主だつたとは……。

だが、七重は七重。俺の愛する妻だ！ ノープロブレムだ！

俺の体も男に戻つた事だし、後は伍助の里の追手を片付ければ万事解決だ。そして改めて七重と土官探しの旅に出るのだ。

そうなると残る問題は、伍助と新九郎だな。どうやつておいてけぼりにするか。まあ、女好きの伍助は俺が男に戻つたんだから去つて行くだろう。すると問題は新九郎の方だな。男の俺に新九郎はむしろ大喜びだ。

そうだ！ 七重が男を女に変える力があるなら、新九郎を女にして貰おう。そしたら女好きの伍助と男好きの新九郎でちょうどいいぞ。我ながら名案だな。

2人には末長く幸せに暮らして欲しいものだ。人里離れた山奥で人目につかない様に。

そうと決まれば、さつそくあいつ等と合流しよう。だが洞窟から出てみれば、見覚えのない風景が広がつていた。

「ここはどこだ？」 そうか。俺つて里の追手に手裏剣でやられて、崖から落ちたんだったな。自分自身死にかけたって言うのに、居なくなつたはずの七重の出現や、その後のとんでもない話なんかの所為で、すっかり忘れていた。

とは言つても、七重が運んでくれたのか崖から落ちたならもっとと川辺近くのはずだが、あたりに川は見当たらない。しかしそう遠くまで運ばれた訳ではないだろうと耳を澄ますと、はたして水の流れる音が聞こえてきた。

山で道に迷つたなら、川筋に沿つて動くのがベターだ。少なくとも迷つた挙句、同じところをグルグルと回る事は回避できる。問題は、その川を下るか上るかどちらの選択をするかだな……。と考えながら、水の流れる音を頼りに足を進める。

だが川にたどり着くと、はたして川辺をうろついて伍助や新九郎、そしてアサギの姿が見えた。忍者でいつもなら俺の気配にまつ先に気づくはずの伍助も、他の奴らと同じく、俺の気配に気づかず、水面や川辺に意識を集中して見渡している。

「おい！ お前らこんなところ何をやつてるんだ？」

背後から声をかけた俺に伍助達は振り返り、驚いた表情を向けてきた。

「何をそんなに驚いているんだ？ まるで幽霊を見たみたいに」

「なんだよ。ガセネタかよ。六三郎。お前が崖から落ちて死にかけているって、ここつが言いやがったんだよ」

新九郎はそう言つて親指で、伍助を指差した。指された伍助はバツが悪そうに頭をかいている。

「おかしいなー。六さんを殺つたついづ追手を捕まえてちょっと痛い目にあわせて白状させたから、嘘は言つてないと思つたんすけどね」

ふむ。その追手は嘘は言つてないんだがな。崖から落ちて死ぬか、少なくとも大怪我をしていいのはずの俺がピンポンしているのだから、騙されたと思つても当然か。七重の不思議な力で俺の怪我が治つたと説明するのは面倒とは思いながらも、言わない訳にもいかないと口を開く。

「いや、崖から落ちた時に負つた怪我は、妻の七重が治してくれたんだ」

「え？ 奥さん見つかったんっすか？」

「なに！ まさか俺より、その女をどるんじゃないだろ？」

「姫様が近くにいるのかー？」

おい。お前ら、俺の怪我が治つたという事はスルーかよ。そう思つていると、伍助が近寄つてきて俺に耳打ちしてきた。

「でも、奥さん見つかっても女の体のままじゃ、まずいんじやないつすか？」

「ふつ！ 何を言つた忍者のくせにその眼は節穴か！ よし、男に戻つた俺の体をとくと見せてやろう。俺は、両手で着物の襟を持ち一気にはだけさせた。

「見ろ！ 伍助！ これが俺の体だ！」

俺の突然の行動に、さすがの伍助も驚いた表情になる。

「ははは。分つたかもつお前に襲われる事もないのだ！」

だが、勝ち誇った俺の笑いに、伍助は打ち伏しがれる事もなく、むしろ俺に抱きついてきた。

「それは、今度からは合意つて事つすね！」

突然抱きついてきた伍助に、俺は怒鳴った。

「ちょ。お前何を言つてるんだ！ 誰が合意か！」

「でも、今まであれだけ拒んでいたのに、いきなり裸を見せてくるなんて、やっぱり女の体じや奥さんに愛想を尽かされて、もう俺の物になる覚悟が出来たんじゃないんっすか？」

「女の体？ こいつは、何を言つてるんだ？ と思つて自分の体を見下ろすと、俺に胸に有つてはならない見慣れた物が付いている。

「なんだ!?」

と叫びをあげた俺は、慌てて胸を隠す。女の様に裸を見られて恥ずかしいというより、男じやない体を見られたくないという思いから反射的な行動だつた。

なんだと！ 僕の体が女に戻つてると……だが、確かにさつきまで男に戻つていたはず……。七重と肌を重ねた感触もしつかりと残つていると言つのに……、どうしたことなんだ！？？

そして他の一人に目をやると、アサギは顔を真つ赤にし茫然とな

り、新九郎も目を見開いて驚いている。

「ろひ六三……郎。お前女だったのか？」

「いっにはどう思われても平氣なのが、女だったのか、と言わ
れ反射的に弁解をした。

「いや、俺は本当に男なんだ。それが不思議な力の所為で、女の体
になってしまつただけなんだ！」

「そんな話、信じられるか！　お前は俺を騙してたんだな。男の純
情を踏みにじりやがって！」

新九郎は俺から顔を背け唇を噛んでいる。別にこいつに悲しまれ
ても平氣だが、やはり男と信じて貰えないのは氣分が悪い。

「いや、騙してなんかいない！　俺は正真正銘男だ！　それにこの
体だっていつかはちゃんと男に戻る！」

「本当なのか？」

新九郎の言葉に、奴の目を見て口調を落ち着かせ、改めて口を開
く。

「ああ。本当だ。俺は間違ひなく男だ」

そして鋭い視線の新九郎と見つめ合つ。その新九郎が突然動いて
俺を抱きしめた。

「六三郎！　俺はお前を信じるぞ！」

「新九郎！」

女の体にもかかわらず、俺は男だという言葉を信じて貰えた嬉しさに、思わず俺も新九郎を抱きしめ返した。新九郎はさらに俺の腰を抱きよせ、その為俺の体は少し上に反り返った。

「六三郎……」

そうつぶやいた新九郎は、上を向いた俺の顔に自分の顔を寄せてくる。

「新九郎……」

俺もそれに応えて目をつむり……。って違うわ！ ドゴッオつと、新九郎の顔面に頭突きをかました俺は、慌てて新九郎の腕の中から脱出した。

あぶなかつた……。思わず状況に流されるとこらだつた。さすがに素面でこれをやつてしまつては、七重に弁解できん。

「六三郎。せつかく良いところだつたのに、いきなり何をする」

俺に頭突きをされ鼻から血を流す新九郎は、その鼻を手で押されながら文句を言つてきたが、俺も言い返す。

「何をするは、じつちのセリフだ！ お前こそ、じさくをこまぎれて何をする」

そこに、にらみ合ひ俺と新九郎の間に伍助が割つて入つてきた。

「崖から落ちたと思つたら無傷で帰つてきて、嫁が見つかったとか、いきなり裸を見せつけるとか、いつたいどうなつてんっすか？」

「いや！ セツキまでは確かに男に戻つてたんだ……！ 七重と……、いや、とにかく七重と会つたときに男に戻つてたんだ。くそつ、なんでもまた女の体に戻つちまつたんだ……」

万事解決だと喜んでいたのに、結局ぬか喜びかよ！

喜んでいた分失望は大きかつたが、以前と違つて俺の女性化の原因はわかつてゐる。七重の不思議な力のせいだ。つまり七重と再会したときに、今度はちゃんと男に戻してもらえばいいことだ。失望はしても絶望する必要はない。

七重が帰つてきて、つかの間とはいえ男に戻れた事で、俺もちょっとテンションが高くなつていたが……、とりあえず冷静に事情を説明しようと。

俺は、

「みんな落ち着いてよく聞け」

と前置きをし事情を説明した。そして一通り説明を終えるとアサギ以外の二人は俺の話を信じきれないらしく、懐疑的な視線を俺に向けてくる。

「お前らが信じられんというのも仕方がないが、本当の事だ。大体七重に不思議な力がなかつたら、そもそも俺が女の体になんてなつてない」

「確かにそうなんでしょうがね……」

普段、何事にもあまり動じなさそうな伍助だが、さすがに今回は歯切れが悪いな。まあ実際その目で見ないと信じられない様な話だ

しな。この後七重も合流するつて言つたから、その時に分かるだろつ。おつとそつ言えば、

「新九郎。お前男が好きなんだよな」

俺の問いかけに、新九郎は心外そうな口調で言つた。

「今更何を言つてやがる。当然じやねえか」

「いや、だつたらお前七重の力で女にならんかと思つて。そしたら女が好きな伍助とお似合いじやないか」

「馬鹿野郎！ 男と男のぶつかり合ひに血が滾るんじやねえか！

気持ちの悪い事言つてんじやねえ！」

いや、お前の言つている事の方がよっぽど気持ちが悪いが。そう思つていると伍助も不満の目を向けてきた。

「六さん。いくらなんでも勘弁して下さいよ。いくら俺が女好きでも女だつたら何でも良いつて訳じやないんですよ」

「でも、俺が元男でも気にしないつてお前言つてたじやないか」

「そりゃー。六さんは美人つすから。こいつが女になつても美人にやなりそうにないつしょ」

と、伍助は新九郎を親指で指差した。

駄目か。せつかく名案と思つたのに仕方がないな。諦めるか。

まあ、あんまりこじで無駄話をしていくてもしようがない。全員集まつたんだ。七重との旅も早く再開したいし、ひとつと問題を片付けよう。それにはまず忍者の里への侵入だな。

「まあ、とにかく早速これから忍者の里に侵入しよう。前にも言つ

たが、とりあえず里への抜け道を探し、それが見つからなかつたら危険だが正面突破しかない」

俺がそう言つと、伍助が拳手をして口を開いた。

「あ。それだつたらアサギが知つてゐるみたいつすよ。なんでも里の森を一人でぶらついてる時に見つけた洞窟が、里の外まで続いているらしいつす」

「ほう。それは都合がいいな。じゃあ、そこから侵入しよつ。そこはここから近いのか?」

俺はアサギへと顔を向けてそつ言つたが、当のアサギは何やら顔を赤くしてぼさつとしたまま答えない。つて、そうか。俺の女の体を見たからか。女好きの伍助ですらもう興奮状態から立ち直つてゐるのに、やっぱりまだ子供だな。

「アサギ! なにぼけつとしてるんだ。その洞窟はここから近いのか?」

俺が再度問い合わせると、アサギははつとした顔をして俺の顔を改めて見たが、すぐに皿をそらした。そしてそらしたまま俺の問い合わせに答える。

「その洞窟はここからあんまり遠くない。でもその洞窟は結構長くて、今から行つても里に出るまでには夕方になるかもな」

「そうか……。まあいい。とにかくその洞窟に行こう。里への出入り口は嚴重に見張られてても、アサギしか知らない抜け道なら里の中とはい奴らも無警戒のはずだ」

「そんで、里に入つたら上忍達を狙い撃ちつすね」

「ああ。下忍のまとめ役である上忍をやれば里は混乱するはずだ。それに下忍達は上忍を守らうとするだろうが、その為には俺達と上忍の間に立ちふさがる必要がある。逃げながら手裏剣を投げられ続ければ手も足も出ないが、目の前に立ちふさがるって言うなり、俺や新九郎に分があるからな」

すると俺の言葉に新九郎は指をパキパキと鳴らし、笑みを浮かべて言った。

「やつと、すつきつと戦えるぜ。逃げる敵を追いかけるのは性に合わねえんだよ。今までのうつぶんを晴らさせて貰うぜ!」

「よし！ その意氣で頑張ってくれ」

俺は意氣込む新九郎にそう声をかけると、改めてアサギに視線を向けた。

「お前は、里まで案内してくれるだけで良いからな。里の中に入りさえすれば、伍助の案内で十分のはずだ。お前は危険だから洞窟の中で隠れている」

「何を言つてんだ！ 俺もあいつ等に殺されかけたんだ。俺だつて戦うぞ！」

アサギは俺の言葉に、俺の裸を見て恥ずかしがっていたのをすっかり忘れた様に食つてかかるが、アサギのいう通りにしてやる訳にはいかない。

「お前、忍者としてはまだ半人前なんだろ？ そんな奴が戦いに参加しても足手まといになるだけだ。悪い事は言わないから洞窟の中でじつとしている」

「嫌だ！ 足手まといになんかなるかよ！ 俺がやられそうでもほ

つておけばいいだろ！」

ちつ！「」のガキが、全く自分の事しか考えていやがらねえ。

「いいか？お前になんかあつてみる。伍助が悲しまないと思つて
るのか？伍助がお前を見殺しにすると思つてるのか？俺は身を
挺してまでお前を助けようとなんて思わんが、伍助はお前をかばう
だろうが。お前、伍助を殺したいのか？お前がついて来たら伍助
が死ぬぞ？」

一気にまくし立てた俺に、アサギは俯き黙り込んだ。さすがに自
分が参戦すると伍助が死ぬと言わわれては一の句がつげんか。

「とにかくお前は安全なところで隠れていろ。その代わり万一俺達
が捕まつたりした場合は、お前が救出してくれ。奴等もまさか俺達
以外にも敵がいるとは思つていらないだろうからな」

「分かった。そうする。もしあんたらが捕まつたら絶対に助けてみ
せる」

まったくの役立たず扱いではなく、一応は役目を『えられた事に
アサギは意氣込んでいた。だがその様子に新九郎が耳打ちしてきた。

「もし俺達が捕まつたとして、あんなガキが俺達を助け出せる訳ね
えだろ。それこそ無駄死にじゃねえか」

「心配するな。里の奴等が俺達を生かしておく訳がない。捕まえる
ぐらになら、どうせその場で殺される。」（）でも言わないと、一旦
は納得したように見えてもやつぱり付いて来かねないからな

俺も耳打ちし返すと、新九郎は納得し「よし」と短く言つて俺か
ら離れた。

「そんじゃ、とにかくその洞窟に行くか
分かった。じゃあ俺に着いて来てくれ！」

役目を与えられた事に意気込むアサギは、そう言つと先頭を歩き出す。そしてしばらく歩くと見覚えのある場所にたどり着いた。

「ここだ」

と、アサギが指差した洞窟は、まさにさつきまで俺と七重が一緒にいた洞窟だった。

おいおい。灯台下暗しとはこの事か？ なんだか来た道を戻つているような気もしてしやと思っていたが、ここが探していた抜け道だったとは……。だがまあ、せつかアサギが教えてくれているんだし、実際この奥が里に繋がっているなんて俺は知らなかつたし。俺がさつきまでこの洞窟に居た事は黙つておくか。

そう考えながらも、ここで待つていると約束した七重が八重さんを連れて戻つてきてるんじやないかとちょっと焦つたが、恐る恐る入り口に近づいてみると人の気配はなかつた。

良かつた。まだ戻つてきてないようだな。ここで鉢合せたら七重のことだ、やっぱりつけてくるとか言ひ出しかねん。

洞窟に入った俺達は、アサギの案内で洞窟の中を進んだ。さつき俺達が居たところは外からの明かりが届いていたが、奥に行くにつたがつてその光も届かなくなる。そして辺りが真っ暗になつてもアサギはどうんと奥に進み続ける。

先頭を行くアサギ以外は、俺を含め暗闇でも気配で人の位置を探るので難なくアサギの後を着いていくが、肝心のアサギが道に迷

つたらおしまいだ。新九郎がいらだつた様に口を開いた。

「おいおい。真っ暗じゃねえか。本当に大丈夫なんだろうな？」

「大丈夫だ。この壁沿いに進んだら表に出るはずなんだ」

まあ、壁沿いに進むだけでたどり着くなら迷いはしないか。新九郎もその後は黙つてアサギの後を歩いた。そして結構歩いた後、前方に光が見える。

「どうやら、着いたようだな」

「だから大丈夫だつて言つただろ」

得意げなアサギの声を耳に受けながら、俺達はさらに進み洞窟の外に出た。するとそこに思わぬ人物が立つていた。

「遅かつたじやない。待ちくたびれたわ」

そう言つた七重は見た事も無い着物を着て、にこやかに笑みを浮かべて立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7265s/>

戦国トランスジェンダー

2011年11月8日01時46分発行